
機動戦士ガンダム 00 ~ The Last War ~

猛虎 with ELS

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦士ガンダム00 〜The Last War〜

【Nコード】

N1572T

【作者名】

猛虎 with ELS

【あらすじ】

西暦2314年地球圏に突如飛来した地球外変異性金属体、通称ELS。激しい戦いの末人類初のイノベーター、刹那・F・セイエイにより人類とELSの「来たるべき対話」が成功し、人類はELSとの共存を始めた。しかしそれは新たな戦いの幕開けでもあった。これは異種との共存という道を歩み始めた人類が外宇宙に進出するまでの過程と、その中で起きた人類史上最後の戦争を描く物語である…

新しく二人のマイスター（オリジナルキャラと外伝キャラ）を加えたソレスタルビーイング視点です。初投稿作品ですが、よろしくをお願いします。ELSの花が咲いた直後からスタートします。アニメ本編および劇場版の設定を最大限に使っていきたいと思っています。

第1話 プロローグ（前書き）

プロローグにしては少し長いですが、ご容赦ください。

第1話 プロローグ

「…」

戦場、地球上を問わず“それ”を目にした者全てが言葉を失っていた。当然のことだった。なぜなら本来宇宙では決して見ることできないものが常識外れの大きさに出現したからである。

「刹那…」

驚きで静まり返ったある戦艦のブリッジで一人の女性が呟いた。戦艦の名はブトレマイオス2改、私設武装組織ソレスタルビーイングが保有する戦艦である。そして女性の名はフェルト・グレイス、ソレスタルビーイングの戦況オペレーターを務めている。

彼女はモニターに映し出された“それ”をじっと見つめていた。彼女の目には見覚えのある一輪の花が映っていた。二年前一人の仲間に想いをこめて贈った花…

“それ”はELSが融合し合い誕生した大輪の花であった。

「やったのね、刹那…」

フェルトに続いてブリッジ中央の席に座っていた女性、ソレスタルビーイングの戦術予報士であるスメラギ・李・ノリエガがELSの花を見て独り言のように言った。その言葉が合図になったかのようにブリッジ内には安堵の空気が流れた。

「さすがだな」

艦の操舵手兼砲撃手のラッセ・アイオンが笑みを浮かべながら言った。

「私たちは大丈夫よ、ミレイナ」

「汚染が止んだぞ！」

「ママ！パパ！セイエイさんとアーデさんがやりましたです！」

サブブリッジにいる両親からの通信で喜びを爆発させたのはもう一人の戦況オペレーター、ミレイナ・ヴァステイ。

ミッションが成功したことを知ったメンバー全員が笑顔を見せていた。

機体が大破して宇宙空間を漂っていたガンダムマイスターたちも、ELSの花を見て驚きの色を隠せないでいた。

「とんでもないことをやってのけたな、あいつは」

『セツナ、ヤッター！ヤッター！』

少々苦笑交じりのロックオン・ストラトスのそばで、オレンジと青の二体のハ口が声をそろえる。

「わかりあえたのね」

「ああ、刹那が人類の進むべき道を示してくれた」

しっかりと寄り添い合いながら語り合うアレルヤ・ハプティズムとマリー・パーファシー。

仲間が成し遂げた奇跡の証を、三人はさまざまな思いを抱きながら眺めていた。

ソレスタルビーイングのメンバー以外にも、連邦軍の兵士、連邦政府の閣僚、その他ELSの花を目の当たりにした人々は戦争とはかけ離れた美しいその姿に、言葉では表しにくい安らかな気持ちになつていた。

人類最大の危機はついに回避されたのである。

：

：

：

：

：

ELSたちが巨大な花を作り始めた頃、木星付近に一つの光が現れた。その光は眩い光のベールを放ち少しの間同じ場所に留まっていた。そしてベールが消えるとその光は突如現れた丸いゲートのようなものに飛び込んでいった。そのあとにはまるで旅立ちを惜しむか

のように一筋の線が残っていた…

第1話 プロローグ（後書き）

定期的に更新できないことがあるかもしれませんが、完結させたいとは思っています。誤字・脱字等ありましたらご指摘をお願いします。

次回、オリジナルキャラ登場です。

第2話 使者

E.L.Sが人類を理解したことで戦いは終結した。

「スメラギさん、マイスターたちを回収しました」

フェルトがスメラギに報告した。

「わかったわ。とりあえず三人とも医務室へ向かうように言っ
てちようだい。」

スメラギが指示を出す。

「了解」

フェルトはマイスターたちと通信を始めた。

「サバーニヤとハルトはどうすんだ？」

ラッセがスメラギに尋ねた。ミレイナは両親のいるサブブリッジへ行っており、今ブリッジにはこの三人がいる。

「第二格納庫は汚染が少ないからそこにとりあえず収容しましょう」

「了解した」

ラッセはまずハルトの反応があるポイントへと艦の進路を向けた。

数時間後。

二機のガンダムを回収したプトレマイオス2改はソレスタルビーイングの秘密基地へと帰還した。

マイスターは全員軽傷で、サブブリッジに閉じ込められていたイアンとリンダは、艦に融合していたE.L.Sが離れていき花と一つになったことで脱出に成功していた。

「まだ今回のミッションが成功したことが信じられないぜ」

「私も信じられないわ」

「僕もだよ。今まで行ってきたミッションの中でも一番と言っ
ていほど無茶なものだったからね」

ロックオンとアレルヤ、そしてマリーは飲み物片手に談笑していた。

「あら、無茶で悪かったわね」

その言葉とともに酒を持ったスメラギが現れた。

「まあまあ、刹那とティエリアのおかげで成功したんだからよしとしようぜ」

スメラギからアレルヤへ向けたれた冷たい空気を断ち切るかのようにロックオンが言った。

「そうね、あの二人は本当によくやってくれたわ」

スメラギがロックオンの言葉に答えると、アレルヤは助かったばかりにほっと息をついた。それを見てマリーは笑いをこらえていた。そしてアレルヤは何事もなかったかのようにスメラギに尋ねた。

「ところで刹那とティエリアがELSの母星へ行っただってというのは本当なんですか？」

「ええ、だってあの時…」

ELSの花ができた直後…

「まずはマイスターを回収しましょう。フェルトお願い」

「はい」

スメラギの指示でフェルトが端末を操作する。

「ロックオン、アレルヤ、それにマリーさんを発見しました。機体も近くに反応があります」

フェルトが報告すると、

「クアンタの反応は？」

とスメラギが尋ねた。

「…ありません」

フェルトはまるで感情を押し殺すような声で言った。

「…」

それを聞いてスメラギとラッセは心配そうな顔をする。

『ピピッ』

その時オペレーター席の端末が一通のメッセージを受信したことを知らせた。

「ヴェーダからの通信です…えっ!？」

メッセージを読んだフェルトは驚きの声をあげた。

「どうしたの、フェルト？」

スメラギが聞くと、フェルトはそのメッセージを読み上げた。

それはティエリアからのメッセージだった。そこには自分と刹那はELSの母星に行くことの報告と、突然の別れに対する謝罪、そして自分たちの思いを託した使者がいずれソレスタルビーイングのもとへ訪れるという内容が書かれていた…

「ティエリアがメッセージを…」

ロククオンが呟いた。

「ええ、おそらくクアンタの量子テレポートの直前にヴェーダを使って送信したんだわ」

スメラギが自らの考えを言った。

「でも使用者って？」

「それはわからないわ、メッセージにも詳しくは書かれていなかったの…」

マリーの質問にスメラギは首を横に振りながら答えた。

数週間後…

『よし、基地へ戻ろうか』

「了解、ちゃんと役目は果たさないといけないしな」

コックピットの中で男が通信に答えた。男は金色の光を放つ目で地球のある方向を見つめていた。

その数秒後、木星から地球へ向け赤い光が飛び去って行った…

第2話 使者（後書き）

最後に出てきたのがオリジナルキャラです。

本当はもっと出番を増やしたかったのですが、次回に持ち越しとなりました…

感想、リクエスト、質問、間違いの指摘などしてくださると嬉しいです。

第3話 天使帰還（前書き）

今回はおやっさんが主人公みたいになってます（笑）

今回から外伝の人物や機体が登場しますが、それについては適宜説明を加えたいと思います。

第3話 天使帰還

「来たるべき対話」から一か月近くが経過した。この一か月で世界は大きく動いていた。

宇宙に咲く巨大な花を目撃した市民たちがそれに反応しないわけもなく、連邦政府はその花の正体が人類を理解したELSが集まってきたものであり、ELSが人類を理解したのはイノベーターの働きであること、そしてイノベーターとは人類が進化した存在であることを公表した。さらにELS来訪以来、増加傾向にあるイノベーターに対応する政策を公に開始した。この政府の動きに世論はさまざまな反応を見せ、時には先の戦いで大きく疲弊した連邦軍を派遣せざるをえない事態にまで発展することもあった。

疲弊したのは連邦軍だけではない。ソレスタルビーイングもそうであつた。

「だめだ……」

ここはソレスタルビーイングの基地にあるファクトリー、そこにアン・ヴァステイのため息交じりの言葉が響く。ため息の原因は目の前にある二機のモビルスーツ。ガンダムサバーニヤとガンダムハルト、どちらもあちこち損傷があり、大破状態である。

「満足に直すことすらできんとは……」

二年前のイノベイドやアロウズとの戦いが終結した後も似たような状況になった。最大のスポンサーであつた王留美からの援助がなくなつたためである。その時はかき集められるすべての資金と資材をかき集めて三機のガンダムを完成させた。しかし今はそれ以上に資金も資材もない。昔と比べれば大分風当たりがよくなつたとはいえ、ソレスタルビーイングは犯罪組織である以上正規のルートで調達することはできない。

「新しいスポンサーが必要だが、それも難しいな……」

『ピーー、ピーー』

イアンがまたため息をつく、組織のメンバーが基地へ帰還したことを示すブザーが鳴った。

「誰か基地から出てたのか？」

ガンダムが直せず手持無沙汰なイアンは、首をひねりながらそれが誰か確かめるためにファクトリーから出て行った。

イアンがトレミーのクルーとガンダムマイスターたちが集まっているを見つけて近づいて行くと、ちょうど一機のガンダムがモビルスーツ用の到着ゲートから入ってきた。よく見るとガンダムの後ろに一隻の宇宙船がついてきている。

「おい、おやつさんどうした？」

ラッセがそのガンダムを見て声をなくしているイアンに向かって尋ねた。

「このガンダムは何だ？ 新型か？」

ロックオンが不思議そうに言った。

「いや違う、これはエクシアやデュナメスと同じ第三世代ガンダム、ガンダムラジエルだ。そうかあいつらが帰ってきたのか」

イアンは納得したように言った。

「ラジエル？ あいつら？」

そう言ったロックオンをはじめ、ほかのメンバーはまだ納得できていないようだった。

そうこうしているうちにガンダムラジエルのコックピットハッチが開き、中からソレスタルビーイングの白いノーマルスーツを着た人物が出てきた。体格を見る限り男のようだ。そして宇宙船からも同じノーマルスーツを着た人物——こちらも男——が姿を現した。ただしこちらは腕にパイロットスーツ姿の男を抱えている。二人は少々困惑している面々の前に並んだ。ラジエルから出てきた男はヘルメットを外し、両腕がふさがっているもう一方の男のヘルメットも外した。

「果たすべき任務を終え、新たな任務を遂行するために戻りました」
その言葉を聞くと、イアンは言った。

「そうか、ティエリアの言っていた使者とはお前らのことだったのか……ヒクサー・フェルミ、ラグノス・セラード。」

第3話 天使帰還（後書き）

出ましたオリジナルキャラのラグノス・セラードと、外伝キャラのヒクサー・フェルミ。次回はラグノスの設定の公開とヒクサーの説
明をします。

設定1 ラゲノス&ヒクサー（前書き）

前回登場したラゲノスの設定です。

アニメは見たが外伝は見たことがないという方がおられるかもしれないので、軽くですがヒクサーの紹介も書いておきました。

設定1 ラゲノス&ヒクサー

ラゲノス・セラード

オリジナルキャラ。

性別：男

出身：カナダ

年齢：25歳（2314年時）

経歴：

生まれてすぐに孤児院に預けられたため両親の顔を知らずに育った。あらゆる面で天性の才能を持ち、ソレスタルビーイングが武力介入を行う六年前の2301年にアメリカにある大学を飛び級により若干12歳で卒業。在学時の専門はモビルスーツ工学で、特にモビルスーツの動力については専門家並みの知識を有していた。さらにモビルスーツ研究のため自らモビルスーツに搭乗することもあり、操縦技術も高い。そんな類稀な能力を見込んだユニオンから好条件でスカウトされる。しかしそれを断り、卒業後は使い古された兵器をリサイクルして平和的な用品に再利用する企業を学友たちと立ち上げた。自分たちの企業の特性上戦争の実態をまざまざと感じ、人類の未来のためにも戦争を失くすことは絶対に必要であると思うようになる。

そして卒業から約半年後、ソレスタルビーイングにメカニク兼予備マイスターとしてスカウトされる。組織では主に最新の動力機関であるGNドライブについて研究、イオリア・シュヘンベルグからトランザムシステムが贈られた後はトランザムについても研究を重ねガンダムの性能向上に大きな貢献をした。

アロウズ、イノベイドとの戦いが終わると組織のメンバーたちと木星へ向かいダブルオークアンタ用のGNドライブを建造した。GNドライブが完成してリンダたちが地球圏へ帰った後はヒクサーと

もに木星に残り、地球へ向かうE.L.Sの大群に遭遇した後ガンダムラジエルを発見する。

ヒクサー・フェルミ

外伝キャラ。

イノベイドのガンダムマイスター。リボンズ・アルマークの思惑でソレスタルビーイングに置かれた。

第三世代ガンダムの試験やマイスターのスカウトなどが行われていた時、スカウト兼ガンダムラジエルのマイスターとして活動していたイノベイドのグラীব・ヴィオレントの相棒としてGNセファール（GNアームズなどガンダムの支援機のプロトタイプ）のパイロットを務める。

後に、ガンダムマイスターはイノベイドであるべきと考え計画を歪めようとしたイノベイドのビサイド・ペインに操られ親友のグラীবに発砲、重傷を負わせてしまう。その後グラীবは傷ついた体をおしてラジエルで出撃しビサイドを撃破するが、ヒクサーに「生きる」と通信を入れると命を落としてラジエルとともに宇宙の闇に消えていった。

その後陽気だった性格が豹変し組織から離れ単独行動をするが、様々な人物との出会いやグラীবの最期の言葉が彼の支えとなり自分を失うことはなかった。

ソレスタルビーイングに合流した後は、イノベイドにより複製されたのちソレスタルビーイングが接収した二機目のガンダムラジエルを伴いラグノスたちと木星へ向かった。

グラীবが乗ったオリジナルのラジエルを搜索するためにラグノスと二人で木星に残っていたが、「来たるべき対話」が成功した後ようやくグラীবと再会する。

設定1 ラゲノス&ヒクサー（後書き）

次回からラゲノスが本格的に登場します。

第4話 双子の天使（前書き）

話の進み方がものすごくスローです…
次回からもう少し早めようかなと思っています。

第4話 双子の天使

ラグノス・セラード、ヒクサー・フェルミ。彼らが戻ってきたことで基地内は少しばかり騒然となっていた。両者とも組織内でかなり名の通った人物なのだ。普通は裏方の情報は余り回ってこないガンダムマイスターたちも、名前だけは聞いたことがあった。しかしヒクサーは少し笑みを見せながらも終始悲しみが混じった表情だった。

「ヒクサー、それはグラーベか？」

そんなヒクサーにイアンが尋ねた。

「ああ。ラグノスのおかげでようやく見つけたよ……」

ヒクサーが呟いた。

「しばらく二人だけにさせてくれるかい？」

そう言っているとヒクサーはグラーベの遺体を抱えて基地の奥へと姿を消した。

「イアンさん、あの様子だとラジエルもそのままにしておいたほうがいいかもしれませんね……」

ヒクサーの後ろ姿を見てラグノスはイアンに言った。

「かもな……」

イアンが答えるとロックオンが二人に尋ねた。

「そのままって、このラジエルは見たところ傷一つないじゃないか」

「“この”ラジエルはね……でも“あの”ラジエルはそうじゃない」

そのラグノスの言葉と同時にヒクサーが乗ってきた宇宙船のハッチが開き、中から一機のガンダムが姿を現した。

「これは……」

「どういうこと？」

アレルヤとマリーがその機体に目をみはった。

それはたった今ラグノスが降りてきたガンダムラジエルと形も色もまったく同じ、このガンダムもまたガンダムラジエルだった。しかしこちらのラジエルはいたるところに損傷が見られる。

「あのラジエルは今から十年以上前に作られたオリジナル、僕が乗ってきた方は約五年前にイノベイドによって複製された機体だ…」
そしてラグノスは、オリジナルは昔組織を裏切ろうとしたイノベイドとの戦いでパイロットのグラীবとともに宇宙のあなたに消えていったが一ヶ月ほど前に木星付近で発見した、と語った。

「おいラグノス、こっちのラジエルが搭載してるのってまさかオリジナルのGNドライブか!？」

複製ラジエルを見ていたイアンが驚き混じりの声でラグノスに尋ねた。

「そうですよ」

ラグノスが微笑みながら答えた。

「ちよつとこいつを見せてくれ」

イアンはそういうと二機のラジエルをファクトリーへ運ぶよう周りのメカニックたちに指示し始めた。

「じゃあラグノスはこっちへ来てくれる？まだ聞きたいことがあるから」

「わかりました」

そう言ってラグノスはスメラギに付いて行っ

第4話 双子の天使（後書き）

ラジエルについて補足を加えます。

GN - x x x（型式番号は伏せられています）
ガンダムラジエル

劇中に二機登場。オリジナルはラグノスとヒクサーが木星で発見した。複製の方はヒクサー専用機として木星へ向かったが、グラীবのそばにいたいというヒクサーの希望もあり新しく造られたオリジナルのGNドライヴを搭載してラグノスが搭乗して地球圏に帰還する。

第5話 変革（前書き）

第1話のラストシーンが詳しく出てきます。

第5話 変革

ソレスタルビーイングの基地の中にあるブリーフィングルーム。ここに複数の人影がある。ロックオン、アレルヤ、マリー、スメラギ、フェルト、ミレイナ、ラッセのトレミークルと彼らの視線の先にいるラグノスの合わせて八人である。

「じゃあ話してもらえるかしら？ ティエリアがあなたたちを使者と呼んだ理由を。」

「わかりました、少し長くなりますが…」

スメラギが尋ねるとラグノスは話し始めた。

「これはすごいな…」

ラグノスは宇宙船の窓から外を眺め息をのんでいた。彼の目には木星の大赤斑から突如現れたELSの大群が映っていた。

「じっとしてた方がいいよ、今この船は活動を停止してるんだから」
「わかってるよ、僕たちにはあれはどうしようもないしな」

ヒクサーの言葉にラグノスは頷いてヒクサーの向かいに腰掛けた。ヒクサーが言ったように彼らが乗っている宇宙船は現在全ての活動を停止している。活動するものを優先的に取り込もうとするELSを避けるためだ。そのため酸素も船内には供給されていない。

「酸素ボンベの備蓄が持てばいいけど…」

ラグノスは少し不安そうに呟いた。

「あの大群をやりすごしたの？」

そう言ったスメラギをはじめ全員が驚いていた。

「ええ、ヒクサーの素早い判断のおかげだね。それとあれだけの大群の後にはおそらくもう来ないだろうと思ったので用心しつつ宇宙船を再起動したんですよ。それから…」

ラグノスが話を続けた。

「じゃあ作業を続けるか」

「そうしよう」

ラグノスが言うとヒクサーが答えた。

彼らがこの木星圏に残ったのはオリジナルのガンダムラジエルを探すためだが、その傍ら新たなGNドライヴの建造も行っていた。クアンタ用のGNドライヴを建造して一足先に地球圏へと帰還したり、ンダたちが旅立つとすぐに建造に取り掛かり、ELSの大群がちょうど地球圏に入ろうかというときに中心部が完成した。そして仕上げの工程を進めていた二人が休息のため宇宙船に戻ろうとしている途中、彼らのすぐ近くに光り輝くゲートが出現した。

「なんだ!？」

「:!？」

ラグノスとヒクサーは驚きを隠せなかった。その二人の目の前にゲートから光り輝くモビルスーツが現れた。

「ダブルオークアンタ…」

その機体を見たラグノスが呟いた。そうそれは「来るべき対話」を成功へと導いた機体、ダブルオークアンタだった。

「ラグノス・セラード、お前に頼みたいことがある」

「ヒクサー・フェルミ、君にもだ」

二人のヘルメットから声が流れた。クアンタからの通信である。

「刹那と…それにティエリアか？」

ラグノスが驚いたように言った。

「なんだい頼みって？」

ヒクサーが尋ねた。それに刹那とティエリアが答えた

「俺たちは今からELSの母星に向かう。ELSは人類を理解してくれた。しかし人類がELSを理解しなければ真の対話は成り立たない。」

「もしかしたらまた人類は争いを始めるかもしれない。それではない。つまでたつても人類は外宇宙へ進出できない。」

「人類にELSを、そして人類同士を理解させてやってくれ。必ずできるはずだ。」

「でも刹那、お前はいなくなるんだろ？ソレスタルビーイングに純粹種のイノベーターがいなきゃそんな芸当……」

ラグノスが反論すると、刹那はゆっくりと言った。

「イノベーターならここにもう一人いる…今変革するイノベーターが……」

刹那の言葉と同時にダブルオークアンタからラグノスへ向けて、大量のGN粒子が放たれた。

「うわっ！」

突然の出来事に目をつぶりたじろくラグノス。

「お前の意見を聞かずすまなかった。だがお前は因子を持っていたんだ。お前ならやれる」

GN粒子の波が収まり刹那の声を聞いたラグノスは目を開いた。

「これは……」

ヒクサーはラグノスの顔を見ると驚きで言葉を失った。

ラグノスの瞳は鮮やかな金色に輝いていた……

第5話 変革（後書き）

リクエスト、感想等待着てます。

第6話 未来

「クアンタから放出された粒子の影響であなたは純粹種のイノベーターになった…そういうことね？」

「そうです」

スメラギの質問にラグノスが答えた。

「それで？刹那とティエリアはその後どうしたんだ？」

ロククオンが尋ねるとラグノスは話を再開した…

「僕がイノベーター？」

ラグノスが困惑したように言った。

「お前は元々イノベーターになり得る因子を持っていた。いずれ訪れる変革を少し早めただけだ」

「つまりラグノスなら人類を解りあわせることができる？」

刹那にヒクサーが尋ねた。

「そうだ」

刹那が自信を持って答えた。

「ヒクサー、君にはラグノスを手助けしてもらいたい。そこで君にヴェーダへのアクセス権を譲る」

今度はティエリアがヒクサーに向けて言った。

「わかった。全力でラグノスをサポートしよう」

ヒクサーが力強く言った。

「ありがとう。少々無理やりだがラグノスはいいかい？」

「ああ、決心がついたよ。僕の力ではどの程度までやれるかわからないけどやってみる」

次いでラグノスもティエリアの言葉に大きく頷いた。

「なら頼む。人類の未来のために…」

「組織のみんなに伝えておいてくれ。今まで本当にありがとう、そしていずれ必ず戻ってくる」と

刹那とティエリアがそう言うと、クアンタのソードビットが円状のゲートを作り出した。

「わかった、伝えておくよ」

ラグノスが答えると、ダブルオークアンタはゲートの中に飛び込みELSの母星へと旅立って行った。

「そしてその少し後にオリジナルのラジエルとグラーベを見つけてGNDドライブも完成したので二人の伝言を伝えるために戻ってきたんですよ。」

ラグノスの長い話が終わった。

「刹那…」

「アーデさん…」

フェルトとミレイナがさびしそうな表情でうつむいた。

「大丈夫だよ、二人とも。あいつらは絶対に帰ってくるさ。僕には確信がある」

そんな二人の思いを察したのか、ラグノスが慰めるように言った。その時ブリーフィングルームの扉が開き、イアンが入ってきた。

「ラグノスにいろいろと聞きたいことがあるんだが、いいか？」

イアンがスメラギに尋ねた。

「ええ、こっちが聞きたいことは大体聞いたからいいわ」

スメラギの言葉を聞くと、イアンはラグノスを連れて出て行った。

「刹那とティエリアが未来を託した新たなイノベーター…」

部屋から出ていくラグノスの後姿を見送ったスメラギが自らの考えを整理するかのようについた。

「まったくあいつらも大したことを押し付けたもんだな」

「確かに」

半ばあきれたように言うロックオンにラッセが同調する。

「でも彼にはそれができると思います。なぜかそんな予感がします。」

「

マリーが言った。

「僕も同じだ。それに僕たちは仲間だ。全員が力を合わせれば必ずできるさ」

アレルヤも力強く言った。

「そうね、私たちがやらなければ世界は変わらないわ。見守っていきましよう、人類の未来を」

スメラギの言葉に全員が大きく頷いた。

第6話 未来（後書き）

リクエスト、感想、質問などお待ちしております。

第7話 新たなマイスター

ラグノスとヒクサーが基地に帰還してから数か月が経った。すでに年が明けて西暦2315年になっている。

「よしこつちだ。おいそれは向こうに持って行ってくれ」

イアンが周りを急ぎ足で行きかっているメカニックたちに指示を飛ばしている。ソレスタルビーイングのメカニック部門にこれほど活気があるのは久しぶりのことである。

「イアンさん、どうですか状況は？」

そこに自分の作業を終えたラグノスが近づいてきた。イアンの作業を手伝いながら会話を交わす。

「どうもこうも、こんなに忙しいのはいつ以来かわかんよ」

イアンの愚痴には少し嬉しさが混じっていた。それほどまでに忙しくなったのには訳がある。

「まったく、お前の友人はすごいな。お前もすごいんだろうが」

「いやいや、僕は会社ができてすぐに組織に入りましたから。ここまで育て上げたのは彼らの力ですよ」

イアンの言葉にラグノスが答えた。

そう、メカニックたちが忙しくなった訳、それは大学卒業と同時にラグノスとともに企業を立ち上げた三人の友人たちがソレスタルビーイングの新たなスポンサーとなったからである。彼らのバックアップで得られた資材の第一回目の運び込み作業が行われていたのだ。その企業の名はRAC、Recycle Arms Corporation（兵器を再利用する会社）の略である。使い物にならなくなった兵器を平和的に再利用する彼らは、2307年に起きたソレスタルビーイングによる武力介入以降、急速に需要が増えた。独立治安維持部隊アロウズが組織されると、反連邦勢力の勢いを少しでもそぎたいアロウズが多く、反連邦勢力の兵器を持ち込んだため

大企業に成長した。アロウズ崩壊後は軍縮の影響で持ち込まれる兵器の数が増えたことにより、またしても成長、いまや世界を代表する企業となっている。

「おう、いたいた」

ラグノスとイアンが作業を続けていると後ろから声がした。二人が振り向くとそこには大柄で茶髪の白人男性が立っていた。ソレスタルビーイングの制服ではなく背広を着ている。後ろには同じく背広を着た男性とスーツ姿の女性がいた。

「対談は終わったか？」

「おう、正式にスポンサーになることが決まったよ」

ラグノスの質問に先ほど二人に声をかけた男が答えた。彼らはスメラギと対談を行っていたのだ。

「そうかお前さんたちが新しいスポンサーか」
イアンが言った。

「紹介するよ、この人はイアン・ヴァステイさん。ソレスタルビーイングのチーフメカニックだ。イアンさん、彼がロバート・アッシュ、それからイ・ウォナム、ミシエル・ボーヌです」

ラグノスが三人にイアンを紹介し、イアンに手前の男性、後ろの男性、女性の順で紹介した。

「これからよろしく願います」

「こちらこそよろしく」

イアンと三人が握手を交わした。

「それじゃ今日は帰るよ」

「じゃあな」

「またね」

「ああ、本当にありがとう」

ラグノスに挨拶すると三人は帰って行った。

「ここにいたのかラグノス。僕ら二人をスメラギさんが呼んでるよ」
そのすぐ後にヒクサーがやってきた。

「わかった、すいませんイアンさんすぐ戻りますから」

「すまんな手伝ってもらってるのに」

イアンに謝るとラグノスはヒクサーとともにスメラギのもとへ向かった。

二人がブリーフィングルームに入ると、そこにはスメラギだけでなくロックオンとアレルヤもいた。

「ごめんなさい、みんな忙しいのに。でもこのメンバーがそろっている前で言った方がいいと思ったから…ガンダムの修復や開発もできそうだし」

スメラギが四人に向かって言った。そして宣言した。

「今日付けで、ラグノス・セラードとヒクサー・フェルミを新たなガンダムマイスターに任命します！」

第7話 新たなマイスター（後書き）

第1章はこれで終わりです。次回から第2章に入ります。第2章は戦闘シーン多めでいきたいと思っています。

第8話 苦悩（前書き）

ちよつと長くなりました…

第8話 苦悩

「はあ……」

広い部屋に疲れきった表情で入ってきた女性は、大きな窓のそばにある椅子に腰掛けると深いため息をついた。窓の外の市街地はすでに漆黒の闇に包まれている。ここは旧ユニオン領にある地球連邦大統領官邸の大統領執務室。そして疲労困憊した様子の女性は二代目地球連邦大統領である。

「大統領、少しは休まれたらどうですか？ここ何日もまともに休みをとられてないですし……」

大統領のすこしあとから執務室に入ってきた大統領主席補佐官が心配そうに言う。事実彼女は一週間以上自宅に帰っていない。

「そういうわけにはいきません。あれから半年経っても議会や世論はまだ混乱しているのですから……」

大統領は主席補佐官だけでなく自分にも言い聞かせるように言った。彼女が言う通り、議会も世論もELSとの共存の是非、そしてイノベーターに対する処遇を巡って大きく荒れていた。大統領はつい先程終わったばかりの議会に出席していた。

地球連邦に加盟している世界中の国の代表が集まる連邦議会は、この半年で大きく三つの勢力に分かれていた。最も大きな勢力は、大統領が唱えるELSと人類の共存及びイノベーターと非イノベーターの共存双方に賛同する革新派。二番目の勢力はイノベーターと非イノベーターの共存には賛同するが、ELSとの共存には反対する人類派。そして最も小さな勢力は、ELSとの共存反対、そしてイノベーターは地球を離れ宇宙に専用の居住区を作るべきだとする保守派。ただし最大勢力の革新派でも過半数には至っておらず、今の議会はほとんどその機能を失っていた。

「ELS、イノベーター…いままで予想もしなかったものが一気に二つも現れたのだから、混乱するのは当然といえば当然でしょうが…」

主席補佐官が大統領に言った。大統領はしばらく物思いにふけっていた。半年前ELSが地球へ接近してきた時、人類が生き残るためにはELSと戦うしかないと思っただけでなく彼女が作った巨大な花を目にしたとき、自分の考えが間違っていたことに気付いた。人類は戦うだけでなく解り合うこともできる存在なのだと思う。そしてELSとの「対話」を行ったイノベーターなら人類同士を解り合わせることもできるはずだと思っただけだ。しかし彼女の思いとは裏腹に、ELSとイノベーターの存在は人類の溝を深めてしまった。大統領や革新派が人類の未来のためだと主張しても、他の勢力は耳を貸さず譲歩の姿勢すら見せようとしない。このままいけば最も恐れている事態に発展しかねない状況であった。

「世界戦争…それだけは絶対に防がなければなりません」

大統領が呟く。局地的な紛争、冷戦、一方的な虐殺は行われてきたが、人類は第二次世界大戦以降約370年もの間、全世界を巻き込んだ戦争は経験していない。しかしこの状況下では、大統領にも絶対に第三次世界大戦は起こさないと断言できるだけの自信はなかった…

大統領が頭を抱えているのとちょうど同じ時刻、コロニー型外宇宙航行母艦“ソレスタルビーイング”の内部にある量子型演算処理システム“ヴェーダ”に一本の通信が送られた。

「なんだ？レベル7にメッセージ？完成にはまだ早いと思うけど…何！？」

ヴェーダと完全リンクしているヒクサーがその通信にいち早く気付いた。

「ヒクサーどうした？えっ！？」

そばにいたラグノスが声をかけると同時に驚き声をあげた。脳量子

波でヒクサーが驚いているメッセージが送られてきたのだ。それは
驚愕の内容だった…

第8話 苦悩（後書き）

ソレスタルビーイング視点と言ったときながら登場したのは最後まで
になってしまいました、ごめんなさい。

第9話 六番目

ラグノス・セラードとヒクサー・フェルミがプトレマイオス所属のガンダムマイスターに任命されたという話題はすぐに組織全体に広まった。二人はほぼ毎日のように激励の言葉や、専用のガンダムはいつでもできるのかなどの質問を受けていた。ヒクサーがヴェーダに送られた通信に気付いたのは、そんな中珍しく二人だけで話している時だった。その内容に驚愕したラグノスとヒクサーは急いでスメラギのもとへ報告しに行った。

「どうしたの二人とも？そんなに慌てて」

スメラギが二人に尋ねた。

「例の開発計画の派遣隊からヴェーダにメッセージが送られてきました」

ヒクサーが答える。

「まだ完成していないわよね？先週到着したっていうメッセージがあつたばかりだし……」

「はい。緊急で伝えなければならぬことがあつたので送ってきたんです」

スメラギの疑問にヒクサーがまだ驚きを隠せない表情で答えた。

「これです、スメラギさん」

ラグノスがスメラギに端末を渡した。画面にはそのメッセージの内容が書かれていた。

「建造途中のGNドライブが見つかった！？」

端末を見たスメラギも二人と同じく驚愕の表情を浮かべた。

「イノベイドたちが工場船を再起動させた時に発見したんです……」

ヒクサーが言葉が続かないスメラギに向かって言った。

ヒクサーは木星から帰還すると、ティエリアから譲られたヴェーダへのアクセス権を使いイノベイド達を木星へ送った。その目的は新

たなGNドライブを建造するためである。イノベーターへと変革を遂げたラグノスが、刹那から託された人類を解り合わせるといふ役割を果たすためにはツインドライブシステムが必要不可欠である。しかしラグノスとヒクサーだけが木星に残っていた時には、資材も時間も限られていたため一つしか製造できなかった。このGNドライブは現在設計が始まっているヒクサー専用のガンダムに搭載されることとなり、ラグノス専用のガンダムに搭載するGNドライブは木星でツインドライブ用に調整を加えたものを新たに製造することになった。そこで木星へ向かったイノベイド達は先月到着し、さっそく作業に取り掛かった。まず木星周辺にあるGNドライブ建造用の工場船を再起動させた。三年前にダブルオークアンタ用のGNドライブを建造する時と半年前にラグノスとヒクサーがGNドライブを建造した時には六隻ある工場船のうち二隻しか再起動させなかったのだが、今回イノベイドたちは六隻全てを再起動した。するとそのうちの一隻に建造途中と思われるGNドライブのコアパーツが残されていたのだ。イノベイドたちがすぐさまそれを解析してみたところ、少し手を加えれば十分完成させられることがわかった。これは現在二基しか残っていない西暦2196年から建造が始められたGNドライブの一つであることも判明した。何らかの理由で途中で放棄されたのだろう。

「一番大事なことは、まだコアパーツのみだということです。つまり……」

「三つ目のドライブとして同調させることが可能ということ?」
ヒクサーの言葉に続いてスメラギが言う。

「正確に言えば同調率を極めて高くすることが可能ということです。同調するかどうかは実際に試してみないとわかりません」

ラグノスが残念そうな表情でスメラギに言った。しかしその後のヒクサーの言葉を聞くと表情は一変し、力強い言葉を口にした。

「でももし同調したなら……」

「それだけは断言できます。それを搭載したガンダムは必ず世界を
変えることができる…」

第9話 六番目（後書き）

今回出てきたGNドライブ建造用の工場船は外伝で登場するのですが、その数が六隻でした。でも実際建造された太陽炉は五つ…この差の問題を、実は六つ作っていたが一つ途中で放棄されそれがずっと気付かれないまま残っていたと自分なりに解決してみました。（後の展開を考えて、というのもあるんですが…）

ちなみにこの船はいつもは光学迷彩で隠れています。

第10話 撃砕（前書き）

初の戦闘シーンです。わかりにくいところがあるかもしれませんが、ご了承ください。

第10話 撃砕

『こちらラジエル。今からテストを開始します』

その通信と同時にラジエルが動き出した。宇宙空間を様々な動きを組み合わせながら動くラジエル。

「さすがだな…」

ラジエルの素早い動きをモニターで見ていたイアンがうなった。今行われているのはラジエルの動作試験であり、ラグノスの脳量子波に対する反応具合を主にチェックしている。イアンの手元にある計器には、ラジエルの動作反応はすでにラグノスの反応速度についていけなくなっていることが示されていた。

「よし、今回はもういいぞ。」

テスト開始から三十分経った頃、イアンがラジエルにいるラグノスに告げた。

「刹那の反応速度と同等かそれ以上だ…次はクアンタに使ったのと同レベルのシステムを使おう」

イアンが今回のテストの結果が詳細に表示された端末を見ながら言った。

「わかりました」

ラグノスが飲み物を口にしながら答えた。

現在ソレスタルビーイングは地上と宇宙で、新ガンダム開発のためのデータ収集を始めている。今回はラグノスとアレルヤが宇宙で、ロックオンとヒクサーが地上でおこなっている。

データ収集には全員がガンダムを使用しており、ラグノスが使っているのはラグノス専用に脳量子波によるコントロールシステムを追加したガンダムラジエルである。この機体はもともヒクサーの専用機であったが、ラグノスが木星から帰還してくるときに搭乗して以降ヒクサーの進言もあってラグノスの専用機になった。

『イアン、ラグノスはいる？』

その時基地のスメラギから通信が入った。

「ここにいます」

ラグノスが答えた。

『ヴェーダからの情報よ。ラグランジュ5にある建造中のコロニーに、テロリストたちのモビルスーツ隊が向かっているわ。あなたが一番近いから至急向かって頂戴。ガンダムは使わないように』
スメラギは最後に忠告した。

「了解。Xを使います」

ラグノスは返事をする。格納庫へと向かって行った。

『目標まで距離800。周辺に機影なし。最終準備を』

『了解』 『了解』

編隊の戦闘に行く指揮官機と思われる機体からの通信に、後続の二機からの通信が答えた。その二機の間には大型の箱状のものがあり、二機が手で保持して牽引している。

その様子をセンサーが感知できる範囲の少し外からラグノスが見ていた。

「ヴェーダの情報によると、個人的に作られたテロ組織で構成員は三人、バックや関係組織はなしか。それにしてもあの機体を使うとは……どうせ闇取引で手に入れたんだろうが」

ラグノスが見つめるその機体はえんじ色に塗装されたジンクス？、かつて存在した独立治安維持部隊アロウズが使用していた機体である。今ではかつてのガンダムのように畏怖や嫌悪の対象となっている機体でもある。

「まあこの機体も正規の取引で手に入れたものじゃないけど……」

ラグノスは苦笑するとレバーを前に倒した。

「さあ、始めますか！」

「よし行くぞー！！…なんだ！？接近する機影？」

声を張り上げた指揮官はリーダーが捕えた機体の姿を目で追った。そして見つけた。まるで背景の宇宙空間に溶けこむようなカラーリングのその機体を。

「ジンクス？！？連邦軍か！？」

「ジンクス？、ラグノス・セラード、目標を撃砕する！」

ラグノスの声と同時に漆黒のジンクス？は高速で指揮官の機体に近づくと、ビームサーベルを抜き放った。

「くそっ、邪魔をするな！」

指揮官はそう叫ぶと機体のビームサーベルを抜き応戦しようとした。しかし目の前にいたはずの機体が消えている。

「何？どこだ？」

指揮官がそう言った瞬間、後ろにいた二機が爆発した。

「なっ…」

指揮官はその事実を受け止められなかった。ラグノスはビームサーベルで指揮官の機体に近接戦闘を仕掛けるように見せかけると機体を高速で離脱させ、ビームライフルでほかの二機を仕留めたのだ。

「よくもっ！！」

指揮官の機体はビームサーベルを構えラグノスのジンクスへ迫った。しかしラグノスは落ち着いてビームサーベルで相手の機体を両断した。そして指揮官の機体は部下の機体と同じく爆散した。

「目標の破壊を確認、ミッションコンプリート」

ラグノスはその言うと残されていた大型の物体、ミサイルランチャーをビームライフルで粉々に破壊すると漆黒のジンクス？を駆ってその場を去っていった。

第10話 撃砕（後書き）

ということとで初戦闘シーン、いかがだったでしょうか？

今回は二種類のジンクス？が登場しますが、テロリストたちが使っていた方はラグノスの言葉通り闇取引で入手したという設定です。ラグノスのものは←

CBGNX-001 ジンクス？ ソレスタルビーイング仕様
R仕様←

RACが自社の防衛用に保有していた機体を横流ししたもの。宇宙と地上の両方に四人のマイスターそれぞれの専用機としてカスタマイズされた機体があり、合計八機ある。ラグノス専用のR仕様はイノベーターの脳量子波に対応した高速戦闘を基本とした機体。武装はGNビームライフルと二基のGNビームサーベルのみと至ってシンプルだが、ラグノスの能力と技術によりその性能は高い。

ちなみにラグノスが言った“X”というのは型式番号CBGNXのXで、一種の隠語のようなものです。

第11話 声

「お疲れ様」

スメラギは任務を終えて基地へ帰還し、部屋に入ってきたラグノスへ向かって言った。ラグノスはすでにパイロットスーツから銀色の制服に着替えている。

「結果はヴェーダに報告しておきました」

そういうラグノスは少し顔を曇らせている。そんなラグノスの様子を察したのか、スメラギは優しくラグノスに声をかけた。

「誰も人殺しなんかしたくはないわ。人間なんですもの」

「任務だと割り切っても、命を奪う瞬間に頭に響く声にだけは何度やっても慣れないんです……」

ラグノスは意気消沈している。何度か今回と同じような任務をこなしたが、その度に絶命する者の心の叫びのようなものが脳量子波を通して頭に響いていた。殺さなければ声も響かないのだが、今回のようなテロリストの実行部隊の場合、逃がしてしまえば再びテロ行為に走る危険性があるためヴェーダの判断も交えスメラギやマイスターが総合的に判断して殺害するということになるのだ。当然機体を破壊するだけで命は奪わないというやり方もヴェーダは判断するし、ソレスタルビーイングはできる限り敵の命を奪わなくて済むような可能性を探している。

「私は慣れる必要なんかないと思うけど？」

「え？」

予想外だったスメラギの言葉にラグノスは少し驚いた。

「刹那には聞こえなかった声があなたには聞こえる。ということはあなたは刹那以上に人類というものと真剣に向き合わなければならぬということでしょう？なら慣れるんじゃない、それを受け止めなくちゃ。慣れるということは自分を騙すということじゃないの？」

「……」

ラグノスは黙っている。

「……ごめんなさい。あなたは本当に苦しんでいるのに、説教じみたことを言ってしまった」

そんなラグノスが怒っていると思ったのか、スメラギは謝罪した。しかしスメラギの考えは間違っていた。ラグノスは新たな決意をしていたのだ。

「謝らないでください、スメラギさん。僕が感謝しなければいけないくらいですよ」

「感謝？」

ラグノスの言葉にスメラギが首をかしげた。

「はい。スメラギさんは僕に大切なことを気付かせてくれました。僕がイノベーターになったのは人類の未来を守るため。そんな僕が一番人類を理解しなければいけないのに、僕はそれから逃げていたんです。僕はもう逃げません」

ラグノスの言葉には確固たる信念のようなものがこめられていた。「本当にいいの？」

「あの声は、いくら残酷なテロリストのような人々であつても人類はみな同じ、ということを僕にわからせるためのものだったのかもしれません。だからこそ人類は解り合うことができるのだと……」

心配そうなスメラギにラグノスは力強く答えた。

「僕は戦います。人類の未来のために、そして人類同士の“対話”のために」

この決意をして以降、ラグノスの頭に声が響くことはなかった。

第12話 覚悟（前書き）

本編キャラクター二人が初登場です。

第12話 覚悟

ELSの花が咲いてから一年と少しが過ぎた。西暦2315年も終わりを迎えようとしていた。各地でデモなどはおこっていたが、ソレスタルビーイングが紛争やテロを影から未然に防いでいることもあり世界はあやういながらも穏やかな状況であった。しかし一部の者たちはこの状況を快く思っていなかった…

「主任、調整作業終了しました」

「ありがとう。しばらく休んでいてくれ」

地球連邦軍技術主任ビリー・カタギリは部下をねぎらった。部下が部屋から出て行き一人になったビリーは部屋についている大きな窓の外を見た。そこからは彼の仕事場でもあるモビルスーツの整備場を一望できる。現在そこには航空機のような形をした三機の薄い緑色のモビルスーツがある。GNX-1001V ブレイヴ、連邦軍の新型主力モビルスーツである。ELSとの戦いで大きな戦火をあげた試験機が上層部の評価を受け、制式採用に至ったのだ。生き残った試験機のパイロットやビリーの要望もあり名称はそのまま引き継ぐことになった。試作機の段階ですでに高い性能を有していたため、現在開発中のもう一つの主力モビルスーツ、ジンクス？よりも早く配備された。

そのときチャイムが来訪者があることを告げた。

「どうぞ」

ビリーは入室を促した。

「失礼する」

「これは准将、どういったご用件ですか？」

入ってきたのはカティ・マネキン准将だった。

「貴官に少し話しておきたいことがあってな…貴官もすでに気付い

ていると思うが、軍の内部で水面下ではあるがイノベーターを排斥しようという動きがある。イノベーターとの共存を肯定する兵士もな」

カティは重苦しい顔で話した。

「ええ、気付いていますよ」

ビリーはそれにさらつと答えた。

「しかし貴官はイノベーターとの共存は必ずできると主張していたと思うが？」

「それは准将、あなたもそうだったのでは？」

カティの言葉にビリーは逆に尋ね返した。

「ふっ…確かに。だが我々は相応の覚悟をしておかなければならない。貴官はそれでもいいのか？」

ビリーはそう言ったカティから少しの間視線を別の場所に移した。自らの机に置かれた金髪の男の写真に…

「もちろんです。イノベーター、それにE・L・Sと共存してこそ人類の未来は開かれるはずですから」

「そうかわかった。ならば私も信じるでしょう、人類の未来を…」

ビリーの言葉を聞いたカティは微かな笑みを残して部屋から出て行った。

「きつと君なら人類の未来を信じて戦い続けるんだろうね…それに君も」

ビリーは先程の金髪の男の写真に続いて、引き出しから出したもう一枚の写真を見て呟いた。こちらはビリーと長髪の女性が写っている。

ビリーのいる場所から遠く離れた場所、宇宙にあるソレスタルビーイングの基地でその写真の女性、スメラギ・李・ノリエガはミッシェンが終了するのをじっと待っていた。今回はE・L・Sとの決戦以降初めてのガンダムを使用したミッションである。地上にラグノスとロックオンが向かい作戦を遂行中である。

「デユナメス、目標を撃破しました」

「エクシアもミッシェンコンプリートです」

フェルトとミレイナの報告にスメラギはほっと息をついた。

「二人に地上の基地に帰還するように言って頂戴」

そう言っているとスメラギは自室へ戻っていった。

第12話 覚悟（後書き）

今回エクシアとデユナメスが少し出てきます。大まかな設定をゝに

GN-001 REIV ガンダムエクシアリペア？

刹那とリボンスの最終決戦で損傷したりペア？を改修して、クアンタができるまで刹那の地上用のガンダムとして配備されていたエクシアリペア？。それをラグノス用に調整した機体。地上で運用される。

GN-002 REII ガンダムデユナメスリペア？

劇場版に登場したデユナメスリペアを、サバーニャのデータを用いて改良した機体。同じく地上で運用される。

第13話 衝撃

ソレスタルビーイングの秘密基地内。

「最近のテロリストたちが使ってる機体、どんどん高性能になつてないか？」

つい先程テロを未然に防ぎ、基地へ帰還したロックオンが言った。

「僕もそう思うよ…ガンダム以外だと結構手こずることも多くなってきたしね」

アレルヤも不安げに同調した。彼も先程テロを防ぐミッションから帰還したばかりである。

「何か裏があるのかもしれない…」

今回は基地に残っていたラグノスが呟いた。そんな時ヒクサーが駆け寄ってきた。まだ薄い黄色のパイロットスーツを着ている。

「みんな！大変なことが起きた！」

「大統領が亡くなった!？」

ブリーフィングルームに集まったマイスターたちはそのニュースに驚きを隠せなかった。

「政府の公式発表によると、移動中の車が事故をおこしたそうです」
フェルトが手元の端末を見ながら言った。

「いや、違うな…」

ラグノスの言葉を聞いて全員がラグノスを見た。

「これは事故じゃない。そんな感じがする」

「ええ、その通りよ。これは事故じゃない、暗殺よ」
スメラギが頷いた。

ヒクサーがヴェーダを使って調べたところ、一台の怪しい車が大統領の乗る車に突っ込んでいったというのだ。さらに政府はこの映像をヴェーダによって隠していることも分かった。

「なんでこんなことを…」

アレルヤは悲しげな表情だった。

「保守派の仕業ね。議会の革新派はもとも大統領を支持する議員たちのグループ、実際に大統領が唱える共存政策に完璧に賛同している議員ばかりではない。だから革新派を牽引している大統領を暗殺すれば革新派はまとまりを失ってしまう。そう考えたんでしょね」

スメラギは説明した。

「それだけじゃない。副大統領は保守派だ。もうすぐ彼が大統領になる。」

ラグノスが付け加えた。地球連邦大統領はかつてのアメリカ大統領とほぼ同じきまりで選出される。

『今回の大変痛ましい事件により急遽発足した現政権は、前政権の素晴らしい政治をできる限り引き継いでいきたいと思います。しかし、イノベーターと呼ばれる新人類たちとそうでない人々をともに同じ場所に住まわせるというやり方は少々いただけないのではないのでしょうか？これではどちらにとってもマイナスになってしまいます…』

初老の男性が熱弁をふるっている。彼が副大統領から昇格して就任した新しい連邦大統領である。そして大統領はほぼ今まで保守派が主張してきたこととほぼ同じことを演説した。イノベーターは地球ではなく宇宙に住むべきであると。

「これは困ったことになったわね…」

演説を聞いていたスメラギが顔をしかめた。

「でも世論は反対するんじゃない？」

アレルヤが尋ねた。

「世論にも保守派を支持する意見は多くあるし、大統領に就任した時点でヴェーダによる情報統制が可能になるから少々過激なこともできるわ」

スメラギがそう言つとラゲノスが大きく息をついて言った。

「また僕たちが本格的に活動しなければならない時が来るかもしれない
せんね……」

第13話 衝撃（後書き）

オリジナルのキャラや機体をリクエストしてもいいですか？という質問をいただきました。大歓迎です。今のところキャラクターはアニメ本編のキャラをそのままと考えていますが、なにせ五十年もあるので…

それからアニメ本編には敵キャラと言えるキャラがほとんど残っていないので、できればオリジナルの敵キャラをお願いします。もちろんソレスタルビーイングのキャラでもOKです。

機体の方はガンダムも敵のモビルスーツもお待ちしています。

設定の一部を作品の流れに合わせて作者が変更する場合がありますのでご了承ください。

第14話 追放（前書き）

今回もアニメ本編のキャラが初登場です。

第14話 追放

西暦2317年初頭。ELSが人類との共存を始めてから約二年が経った。この間に地球は大きく変わった。副大統領から昇格した新大統領は、先月行われた選挙で大勝し正式に選ばれた大統領としての任期を始めた。彼はイノベーターを宇宙へと移住させる政策を実行に移していた。コロニーの建設作業員としてイノベーターを雇用することで、差別感情のせいでまともな職に就けないでいるイノベーターを助け、イノベーターとそうでない人々との格差をなくするというのが表向きの考えである。しかしまだ数千人単位しかない少数派のイノベーターを、数の力で過酷な宇宙へ追い出したというのが実態である。

軍もイノベーター排斥の動きをとっていた。兵士の中にもイノベーターは増えてきたため、彼らを新たに創設したコロニー建設現場防衛隊に転属させた。さらにイノベーターではないが彼らを擁護する発言をしたり、思想を持っている人間は閑職へ追いやった。こうして地球連邦政府、連邦軍は保守派で固められることになった。

「本当についてくるの？」

「もちろんだよ。君を一人になんかせられない。僕も行く」

ここは軌道エレベーター“タワー”のリニアトレイン宇宙側のステーション。コロニーへと送られるイノベーターたちを乗せた便が次々と到着している。そのうちのひとつからカップルらしき男女二人組が降りてきた。男性は黒い髪に東洋系の顔立ち、女性は長い金髪に白い肌。

「沙慈、あなたを危ない目にあわせたくない」

「大丈夫だよリス。それに僕はもう絶対に君を一人きりにしない」
何度も心配そうな表情を見せる彼女の手を、彼は強く握った。

彼女の名はルイス・ハレヴィ。そして彼の名は沙慈・クロスロード。かつては平和に囲まれた生活を送り戦争は自分たちとは無関係なものだと思っていた。しかし二人とも戦争を身近に経験し、その考えが間違っていたと知った。

ここに来たのは先日ルイスがイノベーターになったことが分かったためだ。ルイスは療養生活を終え、ようやく仕事を見つけたばかりだった。しかしイノベーターになったとわかった瞬間周りの目は冷たくなり、政府にコロニーへ移住するように告げられたのだ。沙慈はコロニーの建設に従事していたことがあるため特別に彼女に同伴することが許された。

「すみません、ルイス・ハレヴィさんと沙慈・クロスロードさんです
ね？」

そのとき二人に声をかける男がいた。黒く短い髪、彫りの深い顔立ち。自分たちと同じ宇宙服を着ている。

「はい、そうですか？」

沙慈が返答した。

「申し訳ないですが私と一緒に来ていただけませんか？イノベーターではない方が来られるのは大変珍しいことです、いろいろな検査をしたいと思ひまして」

男はそう言つて二人を少し離れた場所にある扉へと案内した。

「あのー検査つてどこするんですか？」

扉を抜け、廊下を男に合わせて早足で歩いている中ルイスが尋ねた。

「あの扉の先です」

男は目の前の扉を指さした。

扉を抜けた先には小型の宇宙船があった。

「これに乗ってください」

男は二人に乗るように促した。しかし沙慈はルイスを自分の背後に

回して自らが盾になるようにすると、男に向かって叫んだ。

「僕たちをどこに連れて行く気だ！」

そのとき宇宙船の扉が開き、宇宙服を着た男と女が出てきた。

「そう怒らないでクロスロードさん」

「そうだよ。僕たちは君たちを守りに来たんだ」

「マリーさん！それにアレルヤさん！」

沙慈は二人の顔を見てまた叫んだ。

「ピース中尉！」

ルイスは女性の顔を見て叫んだ。

「挨拶は船の中でしてくれるか？急がないと奴らが来るぞ」

ルイスと沙慈を連れてきた男、ラグノス・セラードは苦笑しながら言った。

第14話 追放（後書き）

ラグノスの容姿を書いたのは初めてでした。設定ではカナダ出身と
いうことになってますがアジア系の血が混じっているのもので黒髪です。

第15話 ルイス

沙慈、ルイス、そして二人を助けに来たラグノス、アレルヤ、マリ
ーが乗る小型艇はステーションから離脱した。

「まだ状況がよくわからないんですが…僕たちは誰かに狙われている
ってことですか？」

沙慈が尋ねた。

「そうだよ、特にそちらのハレヴィさんがね…」

操縦桿を握るラグノスの隣の座席に座っていたアレルヤが、後ろを
振り向いて答えた。

「私ですか？」

ルイスは不思議そうに首をかしげた。

「ハレヴィさん。あなたは元アロウズ兵士で今は軍に所属していな
い。そしてイノベイター。こういう事例はあなたが初めてなんです」
今度はルイスの隣に座っていたマリーが答えた。

「連邦政府は今強気な態度を取ってイノベイターを追放している
けど、いずれ彼らが反乱を起こすと思っているんだ。もともとイノ
ベイターは戦闘において普通の人間を大きく上回る能力を発揮する
ことができる。そのうえ軍人となればその脅威はもっと増す。だか
ら軍人のイノベイターには旧型の機体を与えてコロニーの防衛にあ
たらせているってわけさ」

ラグノスが前を向いたまま言った。

「だからルイスを狙った？元軍人で今は軍が思い通りにできないか
ら」

沙慈がラグノスの言葉に反応して自分の考えを言った。

「その通り」

ラグノスが頷いた。

小型艇の中ではしばらくマリーとルイス、沙慈とアレルヤの同性同

士の会話が続いた。

「二人とも宇宙にどこか行くあてはあるかい？」

そんな中アレルヤが沙慈とルイスに尋ねた。

「いいえ地球にしか…」

ルイスが答えた。

「地球はもうイノベーターが住むのは難しくなっちゃったからね…」

アレルヤが悲しみを浮かべた表情で言った。

「すまないけどしばらくの間僕たちの基地にいてもらうことになるな」

ラグノスが言った。

「大丈夫、すぐに別の場所を確保するから」

アレルヤが今度は笑顔で言った。

小型艇はソレスタルビーイングの基地に戻った。五人はまずブリーフィングルームに向かった。そこにはスメラギ、ロックオン、ラッセ、フェルト、ミレイナ、イアンがいた。

「久しぶりねクロスロード君。そして初めまして、ルイス・ハレヴィさん」

スメラギが代表して挨拶した。

「まずはハレヴィさん。あなたに謝罪します。八年前に起きた事件のことを…」

そう言ったスメラギをはじめその場にいた沙慈以外のメンバーがルイスに対し頭を下げた。ソレスタルビーイングが武力介入を行っていた約八年前、ルイスの親族はガンダムスローネドライの攻撃により命を落とした。

「みなさん頭を上げてください。事情は沙慈から聞いています。あの事件にみなさんは関わっておられなかったと」
ルイスは穏やかな顔でそう言った。

ルイスの言葉でその場が和んだ時だった。基地内に警戒音が響き渡った。

「フェルト、ミレイナ、何があったの？」

スメラギがすでに端末を操作し始めていた二人に尋ねた。その時ヒクサーが入ってきた。

「ヴェーダからの緊急通信です。イノベーターを乗せた宇宙船を保守派のテロリストが狙っています」

ヴェーダから最も早く通信を受け取れるヒクサーが報告した。

「わかったわ。マイスターはジnkクスで出撃、イノベーターを守って！」

スメラギの言葉に四人のマイスターはブリーフィングルームを飛び出して行った。

第15話 ルイス（後書き）

機体、キャラのリクエスト、感想などお待ちしております。

第16話 四つの黒

『未確認のモビルスーツがこちらに接近しています。回避行動を取りますので乗客のみなさんはご着席の上、シートベルトをお締めください』

警報とともに告げられた警告で船内は騒然となった。イノベーターを乗せ低軌道ステーションからラグランジュ1へ向かっている五隻の船はどれも同じ状況だった。

接近しているのは六機のモビルスーツ。宇宙船とモビルスーツでは速度に大きな差があるため結果は目に見えていた。

『宇宙の藻屑となれ、異星人に侵された裏切り者たちよ！』

六機のモビルスーツは一列に並び、一斉にビームライフルを構えた。六つの銃口がオレンジ色に染まったその瞬間、突如横に並んだ機体の真横からオレンジ色の粒子ビームが飛来し、六つのビームライフル全てを貫通していった。ビームライフルは爆発した。

『何！？』

テロリストの一人が驚きの声を上げた。粒子ビームが飛来してきた先を見ると、そこには銃身の長いライフルを持った黒のジンクス？がいた。さらに後方には同じ黒のジンクス？が三機いる。

『さすがだなロックオン』

「なーにこれくらい朝飯前だよ」

腕前を寝めるラグノスに謙遜するロックオン。先程の攻撃はロックオンが乗るジンクス？ソレスタルビーイング仕様のL仕様が、GNスナイパーライフル改による遠距離射撃を行ったのだ。

「アレルヤ、ヒクサー、宇宙船の防衛をしつつ攻撃を」

『了解』『了解』

ラグノスの指示に二人が答え機体を宇宙船の方向へ向けた。テロリ

ストの機体のうち三機も宇宙船を追いかけた。

「ロックオン、援護を頼む」

『任せときな』

ロックオンの返事を聞くとラグノスはテロリストたちの方へ向かって行った。

テロリストたちの機体はジンクス？だった。現在の連邦軍はジンクス？が主力機となっているが、ジンクス？の時点でジンクス？をはじめとする前世代機との技術水準の差が大幅に開いたため、軍では今も使用されている。その機体がテロリストたちの手に渡っているのだ。

「これで裏がつかめたな」

ラグノスが機体を前進させながら呟いた。

「革新派だか人類派だか知らないが、？で？に勝てる訳ねーだろ！」
残ったテロリストの三機のうちの一機のパイロットが叫んだ。

ラグノスは脳量子波でそれを感じ取ったが無視して、機体の左肩ハードポイントに装着してあるGNバスターソード改を右手に、右肩ハードポイントに装着してあるGNブレイドを左手に持った。今回のミッションではラグノスのR仕様は白兵戦を重視した装備をしている。

それを見た敵の三機はビームサーベルを抜いた。その時ロックオンのL仕様がスナイパーライフル改で攻撃した。ラグノスのR仕様は回避動作が遅れた機体に一瞬で近づきバスターソード改で両断した。その後しばらく2対2の戦いが続いたが、L仕様が敵のコックピットをスナイパーライフル改で撃ち抜き、そのすぐ後にR仕様がもう一機にGNブレイドの一閃を浴びせた。

ラグノスとロックオンが敵を全滅させると、アレルヤのA仕様とヒクサーのH仕様のジンクス？がやって来た。

『敵は全て撃墜したし、防衛隊が来た』

アレルヤが報告した。

「よし帰ろうか、報告しなきゃいけないこともあるしな」
ラグノスが告げた。

第16話 四つの黒（後書き）

次回は今回登場したソレスタルビーイングのジnkクス？についての設定です。

設定2 ジンクス？ソレスタルビーイング仕様

第10話のあとがきでラグノスの機体の設定と大まかな機体の設定は書きましたが、今回は各マイスター仕様の設定と武装の説明です。

CBGNX-001 ジンクス？ソレスタルビーイング仕様

擬似太陽炉搭載。両肩にハードポイントが設けられ、基本装備の他に単独出撃や複数出撃など任務に応じて装備を使い分ける。機体名につくR＝ラグノス、L＝ロックオン、A＝アレルヤ、H＝ヒクサーは各マイスターの名前の頭文字。

～R仕様～

高速戦闘を主体とする。基本装備はGNビームライフルとGNビームサーベル。他のマイスターの機体とともに出撃する時は、かつての刹那の機体のように近接戦闘を想定した武装を装備することが多い。

GNバスターソード改

ジンクス？のGNバスターソードの改良型である大型剣。

GNブレイド

エクシアのGNロングブレイドとGNショートブレイドを参考に開発された剣で、刀身が短く細いためバスターソード改よりも取り扱いやすい。

～L仕様～

射撃戦を得意とする。基本装備はGNスナイパーライフル改とGNビームサーベル。追加装備として両肩に高精度センサーを搭載できる。

GNスナイパーライフル改

デュナメスのスナイパーライフルをジンクス？に合わせ改良した装

備。

〈A仕様〉

R仕様と同じく高速戦闘を主体とする。ただしR仕様と違い超兵の脳量子波に合わせた調整がなされている。基本装備はGNビームライフル、GNビームサーベル、GNミサイル。

GNミサイル

背部のコンテナから発射する。コンテナは機体各部に追加装備することができる。

〈H仕様〉

砲撃戦を想定している。基本装備はGNバズーカとGNビームサーベル。追加装備にはGNフィールド発生装置が用意されている。

GNバズーカ

高い威力を持つ射撃武装。バーストモードでさらに強力な攻撃を行うことができる。

設定2 ジンクス？ソレスタルヒーピング仕様（後書き）

次回から本編再開です。

第17話 分裂

イノベーターを追放する。この一見非人道的ともいえる政策―追放という言葉は使わず格差是正のための分離と言っているが―は、世論から大きな賛同を得ていた。能力を持たざる者は持つ者を羨望の目で見つめ、やがて自らとは区別し追い出す。人類の歴史で繰り返して行われてきたことだ。しかし今回の場合が過去の事例と大きく違うのは、持つ者と持たざる者の差が大きすぎることだ。

イノベーターはありとあらゆる面で非イノベーター―最近では普通人と呼ぶのが一般化してきた―を上回っている。いくら努力してもノーマルはイノベーターには勝てない。このことがさらにイノベーターを社会の片隅へと追いやることになったのだ。

このような政策に当然イノベーターは反対している。しかし地球人口の中では圧倒的少数派のその主張は、無視されている。

ノーマルの中にはイノベーターを支持する者たちもいるが、彼らも周りから冷たい目で見られる。

2316年後半から始まった追放政策は約一年経った今も続き、すでに世界はイノベーターを追放することが当たり前であるかのようになってしまうた。

コロニー建設に従事するという名目で故郷を追われたイノベーターの数はすでに一万人の万台を超え、なおも増え続けていた。もうすぐ十万人に達する勢いだ。イノベーターによってラグランジュ5を中心に建設されている新型コロニーはその数を増やし、今ではイノベーターの居住空間となっていた。イノベーターの持つ驚異的な能力が随所に発揮されたこのコロニーは、重力も含め地球に非常に似た環境を有する。

連邦軍の兵士でイノベーターになった者は、コロニー建設をテロリ

ストなどから守る防衛隊へ半ば強制的に配属された。軍内部には高い戦闘能力を有する彼らは残しておくべきだとする意見が多かったが、最終的には連邦政府の追放政策が行われている以上、彼らも追放するべきだとされた。イノベーターの能力を恐れた上層部は、脳量子波に対応していない旧式のジンクス？を与え、さらに監視役として最新鋭機ジンクス？を与えたノーマルの上級士官を置いた。

保守派の過激派のテロを防ぐためという名目で連邦軍は軍備増強路線をとり、ジンクス？を主力機として大量生産した。ちなみにジンクス？よりも先に主力機に選ばれたブレイヴは、革新派の開発主任ビリー・カタギリが何人かのパイロットとともに失踪したため開発中止となった。

私設武装組織ソレスタルビーイングは、そんな状況下でもテロを未然に防ぐなどの武力介入を影で行っていた。

「お疲れ様です、ラグノスさん」

ミッションを終えラジエルから降りたラグノスに整備用具を持った沙慈が声をかけた。ソレスタルビーイングに保護された沙慈とルイスはすぐに別の安全な場所に避難する予定だったが、相次ぐテロでそのような場所がなくなってしまったため今も組織にいる。二人ともすっかり組織に慣れ、沙慈は新ガンダムの開発に追われるイアンに代わり機体のメンテナンスを担当している。ルイスはマリーとともに食事などの管理をしている。

「ありがとう、手伝うよ」

ラグノスはそう言って沙慈を手伝い始めた。

整備を終えたラグノスは、別の機体の整備に向かった沙慈と別れると自室に戻った。その時端末にメッセージが届いた。ヴェーダからのものだ。ラグノスはそのメッセージに目を見張った。

「防衛隊が軍からの分離を宣言！？」

第17話 分裂（後書き）

リクエスト、感想お待ちしております。

第18話 ソレスタルビーイング（前書き）

西暦2317年末、連邦政府の政策によりコロニー建設現場に強制移住させられたイノベーターたちはすでに完成したコロニーに居住を始めていた。そんな中連邦軍から半ば追放されたイノベーターの兵士たちで構成されるコロニー防衛隊が、連邦軍からの分離を宣言した。

第18話 ソレスタルビーイング

「コロニー防衛部隊が連邦軍からの分離を宣言したって…本当ですかスメラギさん」

「残念だけど本当よ。それだけじゃなくて防衛部隊は新型モビルスーツまで開発したのよ」

驚くアレルヤにスメラギは深刻そうな顔で告げた。

「新型？いつの間にそんなものを…」

ロックオンが驚きながら言った。

「イノベーターの中には技術者も多くいる。新型コロニーを秘密裏に工場に改造していたんだろうな」

ラグノスが冷静に答えた。

「ヴェエーダが新型モビルスーツの情報をキャッチしました」

ヒクサーが瞳を金色に輝かせながら言った。

「モニターに出します」

ヒクサーの言葉と同時にモニターにモビルスーツの詳細データが現れた。細身の手足に、動物の耳のような頭部アンテナ。そして可変機能。どこかで見たことがあるこの機体にスメラギが呟いた。

「ブレイヴ？」

「似ていますが違いますね。型式番号GNX-1101V、機体名はヴァンです」

「ヴェエーダによると、開発主任が失踪したブレイヴのデータをイノベーター側が転用したようです」

そのラグノスとヒクサーの言葉に、スメラギはほっと息をついた。

コロニー防衛部隊は連邦軍の一部隊として編成されたものだが、今回の分離宣言で事実上地球圏で二つ目の軍隊が誕生したことになる。ヴェエーダのデータでは、監視役として防衛部隊に配属されていたノ

「マルは追放されたか殺害されたかしたらしい。コロニーは連邦軍に左右されることなく自分たちだけで守るとというのが、防衛部隊側の主張である。しかしスメラギはこれに裏があることを読み取っていた。」

「イノベーター側はいずれノーマルに対して戦いを挑むつもりでしょうね……」

スメラギが言った。

その場にいた全員がスメラギの言葉で黙り込んだ。

「また戦争が始まる……」

アレルヤが悲しそうに言った。

「俺たちが紛争やテロを陰で防いでいても結局はこうなるのか……」
ロツクオンも悲痛な面持ちだった。

「長い間戦いの歴史を繰り返してきた人類が、そう簡単に戦いをやめられるはずがない。しかしだからこそ僕たちが気付かせる必要があるんじゃないのか？ 人類は戦わずとも解り合うことができるのだと」

ラグノスが語りかけるように言った。

「そう、僕たちならできる。ソレスタルビーイングなら」

ヒクサーが続けた。

「その通りよ。もう一度私たちの原点に戻りましょう。イオリア計画の第一段階を再び行うのよ」

そのスメラギの言葉にロツクオンとアレルヤも表情を変えた。

「俺たちはソレスタルビーイング」

「武力による戦争根絶を理念とする私設武装組織だ」

「戦おう、戦争をなくすために」

「そして人類の未来を切り拓くために！」

マイスターたちの表情には強い決意が浮かんでいた。

「スメラギさん、大変です……！」

その時大声がブリーフィングルームに響き渡った。別室で情報収集を行っていたフェルトだ。

「フェルトどうしたの？」

「連邦軍がコロニー侵攻に向けて部隊の編成を始めた模様です」

スメラギの質問にフェルトが答えた。

「攻撃開始はいつ頃？」

「明後日が一番濃厚です」

「ヒクサー、彼らの到着は？」

「今日中には到着するかと」

スメラギはフェルトとヒクサーに相次いで尋ねた。

「わかったわ。ラグノスとヒクサーは輸送艇が到着次第すぐに作業にかかって頂戴。ロックオンとアレルヤは5・5の最終調整を。フェルトは引き続き連邦軍と防衛部隊の動きを監視して」
スメラギが指示を出した。

第18話 ソレスタルビーイング（後書き）

本格的に戦いが始まっています。

設定3 ヴァン&ジンクス？（前書き）

防衛部隊のイノベーター専用機ヴァンと連邦軍の最新鋭機ジンクス？についての設定です。

設定3 ヴァン&ジンクス？

GNX-1101V ヴァン

地球連邦軍から分離したコロニー防衛部隊が秘密裏に開発したイノベーター専用機。設計には連邦軍で開発中止になったブレイヴのデータを転用している。そのため各部形状や武装はブレイヴと類似している。制式採用されたブレイヴは擬似太陽炉を一基のみ搭載していたが、本機は両腰バインダーに二基搭載する（ツインドライブではない）。ブレイヴと同じく可変機能を持ち、イノベーターの常人離れた反射神経を利用してヴァン＝風の名に恥じない驚異的な機動力を発揮できる。ただしそれ以外の性能はブレイヴとほぼ同じ。機動力を最優先に設計されたため武装は最低限のものしか装備していないが、肩などのハードポイントに武装を追加することが可能。トランザムシステムを搭載する。機体カラーはグリーンで、指揮官機は赤いラインが入る。

GNビームライフル「ドレイクフラム」

ブレイヴのドレイクハウリングを改良した武装。同じく巡航形態では機首を形成する。通常射撃モードから銃身を分割した高出力モードに切り替えることができる。ドレイクハウリングと同様に連射はできないが、その欠点を補うため銃身側面にGNバルカンが追加されている。

GNビームサーベル

両腰のバインダーに内蔵する。より高速戦闘に適した改良がなされている。

GNキャノン

両腰のバインダー先端に装備するビーム砲。機能的にはブレイヴの

ものと同等の武装で、ドレイクフラムと同時発射する「トライパニッシャー」も引き続き使用可能。

GNビームエクリプス

新開発された本機独自の武装。両腕の銃口から三日月形のビームを発射する。高速戦闘に対応した武装で、連射可能。巡航形態では前腕部だけが正面を向くことで発射する。ビームマシンガンとしても使用できる。

45mm機関砲

胸部に装備された機関砲。実弾を使用する。

GNミサイル

脚部に三基内蔵。

チャクラムグレネード

脚部に装備する。粒子攪乱を行い敵のセンサーを無効化する。

GNX-807T ジンクス？

ジンクス？にかわって連邦軍の主力機に採用された機体。当初はブレイヴと配備部隊を二分していたが、ブレイヴの開発中止に伴い本機のみが配備されることになった。最大の特徴は、全機に緊急脱出用のコアフアイターを標準装備していることである。これはELSとの戦いで多くの兵士が命を落としたためパイロットの生存率を高めるべく開発された、GNX-805T/CF ジンクス？コアフアイター搭載型（外伝に登場）から受け継いだものである。開発期間の短さから基本的な性能はジンクス？と変わらないが、現在エースパイロット用の各種カスタム機が開発中である。トランザムシステムが使用可能。機体カラーは一般機は連邦制式カラーの水色、指

揮官機はジンクス？と同じくグレー。

GNビームライフル

ジンクス？とほぼ同様の装備。高威力のロングモードと連射可能なショートモードを任意に使い分けることができるようになった。

GNビームランチャー

指揮官機のみがビームライフルにかえて装備できるオプション装備。ビームライフルロングモードよりも強力なビームを発射できるが、その分チャージに時間がかかる。

GNビームサーベル

脚部に二基内蔵。

GNシールド

両肩に装備する。ジンクス？からの流用装備で、本機では一般機を含めた全機が両肩に標準装備する。GNフィールドを発生させて防御する。

GNビームグレネード

GNシールドの裏面に二基装備する。

GNバルカン

頭部に二門搭載。

GNクロー

鋭利な爪で相手を攻撃する。

設定3 ヴァン&ジンクス？（後書き）

おかしいところがあればご指摘をお願いします。
次回ガンダム登場です。

第19話 トリプルドライブ（前書き）

連邦軍から分離したコロニー防衛部隊に対し、連邦軍は侵攻の動きを見せていた。それに対してソレスタルビーイングは武力介入を行うためガンダムの調整作業を行っていた。

第19話 トリプルドライブ

「固定アーム接続、接舷完了」

「よし、作業開始だ」

「了解です」

ラグノスとヒクサーの言葉に沙慈が答えた。三人は輸送艇用の接舷ドッグにいる。

「輸送艇から出したら一つずつカートに乗せてMSドッグへ運ぶんだ」

ラグノスがそう言いながら輸送艇へと近づいて行った。その後ろからヒクサーと沙慈が続く。

三人が輸送艇の向かって右側に着くと両側のハッチが開いた。

「ヒクサーと沙慈はあっち側を頼む」

ラグノスの言葉を聞くとヒクサーと沙慈は向かって左側に移動した。「これが…」

「ああ、これがオリジナルのGNドライブさ」

沙慈とヒクサーの目の前には二基のGNドライブがあった。

「ちゃんとできたみたいだな」

反対側にいるラグノスが通信を送ってきた。ラグノスの目の前にはGNドライブが一基ある。この輸送艇は、三年前ヒクサーが木星へ送ったイノベイドたちが製造したオリジナルのGNドライブを運んできたのだ。

「残されていたドライブもしっかりと完成させたようだ」

今回運ばれてきた三基のドライブのうち二基は一からつくられたものだが、一基は建造途中で放棄されていたものを完成させたものである。

「よし早く運ぼう。調整作業をしないと」

三人はGNドライブをカートに乗せて一人一基ずつ運んで行った。

「ヒクサー、こっちは僕と沙慈がやるよ」

「わかった」

ラグノスがそう言うのとヒクサーはカートを二人に預け、ドッグに置かれた四機のガンダムのうち一機のもとへ行った。薄い黄色のボディは細身だが背中の中黒いバックパックはかなり大型だ。CB-002RE ラファエルガンダムリペア、三年前に自爆した機体をヒクサーの乗機として再製造した機体である。

「おうついに来たのか」

別のガンダムの前を二人が通ると、コックピットで調整をしていたロックオンが声をかけた。

「ああ、それよりどうだ機体の調子は？」

「万全だよ。いつでも出せるぜ」

ラグノスの質問にロックオンが答えた。

ロックオンが乗っている機体は腰に装着されたビットが特徴的である。GN-010RE ガンダムサバーニヤリペア、三年前に大破したサバーニヤを改修したものだ。

「ようやくできたのかい？」

機体の外で調整作業を行っていたアレルヤは、手を休めそばを通る二人に話しかけた。

背部にある巨大な二対のコンテナとほかのガンダムと違い頭部にバイザーを持つガンダム、GN-011RE ガンダムハルトリペアをアレルヤは調整している。この機体もサバーニヤリペア同様三年前の戦闘で傷ついた機体を改修している。

そしてラグノスと沙慈はドッグの一番奥にあるガンダムのところにたどり着いた。すでに数週間前に改良を済ませており、搭載していたGNドライヴはつい先程予定通りラファエルに搭載された。背中和そこにつながった羽のような二枚のパーツには空洞があった。

「ついにこの空洞に最もふさわしいものを埋めるのか…」

ラグノスが機体を見上げながら言った。

「初めてトリプルドライブを搭載する機体、ガンダムラジエルア
ー
ラ」

第19話 トリプルドライブ（後書き）

次回は5・5世代ガンダムの設定です。

設定4 第5・5世代ガンダム（前書き）

今回は設定がかなり長くなってしまいました。

設定 4 第5・5世代ガンダム

第5・5世代ガンダム

開発中の第六世代ガンダムが完成するまでのつなぎの機体として用意された。また第六世代ガンダム開発のためのデータを得る実験機としての役割も持つ。基本的な性能は第四世代ガンダムと変わらなかった第五世代ガンダムとほぼ同じであるため、連邦軍のジンクス？やコロニー防衛部隊のヴァンに少し劣っている。

GN - x x x A L ガンダムラジエルアーラ

イノベイドによって複製され、その後ヒクサー、ラグノスの乗機となったラジエルを改良したラグノスの専用機。最大の特徴は三つのGNドライブを同調させる「トリプルドライブシステム」を搭載していることである。当初ラグノスの機体にはツインドライブが搭載される予定だったが、GNドライブ建造船に残されていた開発途中のGNドライブのコアパーツが発見されたため急ぎよそのGNドライブも搭載することになった。同調率を高めたドライブではあるが現段階の技術では三つを同調させることができなかったため、トリプルドライブの真の力は発揮できない状況である。そのかわりに三つのうち二つをツインドライブとして同調させ、残り一つは独立稼働させている。GNドライブは胸部に一つ、背部のウイングパーツに二つ搭載する。機体名のアーラとはラテン語で「翼」の意味。

GNバズーカライフル

ソレスタルビーイングが新たに開発した武装。第六世代ガンダムの武装として高い威力と高い連射能力を両立し、さらに取り回しのよい大きさも考慮にいった武装として開発が進められた。しかし大きさと威力はクリアしたものの連射能力が極端に低くなってしまい、それを解決する道を探すために実戦でデータを得ることを目的とし

て本機に搭載された。

GNショートライフル

GNバズーカライフルの低い連射能力を補うために搭載された武装。かなり高い連射能力を持つが威力はそれほど高くない。

GNプロトウイングビット

実験的に装備されたオールレンジ兵器。機動力を優先して設計されている。背中のウイングパーツに四基ずつ計八基装備する。

GNスーパービームサーベル

連邦軍が開発中の新型ビームサーベルのデータをヴェーダを使って流用し開発した武装。内蔵された新型の発振器により刀身の形状を自由に变化できる。腰に二基搭載する。

GNビームシールド

GN粒子を盾として展開する防御武装。両腕前腕部に発生器を装備する。

GNシールド

エクシアのものに似た手持ちの盾。新たにGNフィールド発生機能が搭載されている。

GN-010RE ガンダムサバーニヤリペア

損傷したサバーニヤを修復した機体。2312年から2314年の間では確立できなかった新システムを実験的に搭載している。ケルデイムの設計を流用していたフレームは一部新規設計されている。今回もオレンジと青の二体のハ口が同乗してロックオンをサポートする。

GNホルスタービット改

防御力の向上が図られており、GNフィールドを展開できるようになった。両腰に十基装備する。

GNピストルビット改 / GNライフルビット？改 / GNスナイパービット

新たに超遠距離射撃用のスナイパービットを採用。ライフルビット？改に強化型センサーと遠距離バレルを追加することで使用可能。

GNプロトマルチビット

新開発の多目的ビット。まだ実験段階の武装のため「プロト」がついている。防御用の「シールドモード」、射撃用の「ライフルモード」、特攻用の「アタックモード」の三形態を使い分けることができる。両肩に四基装備する。

GNミサイル

改修前と同じく全身にミサイルポッドを装備する。

GN-011RE ガンダムハルトリペア

サバーニヤ同様大破したハルートを修復した機体。サバーニヤと同じく新システムや新兵器を搭載しているが、機体の全性能を引き出すにはアレルヤとマリーの二人が搭乗する必要がある。ハルートで最終決戦時に脚部に装備した追加サバーニアを改良したレッグブースターを標準装備している。アレルヤの希望もありアレルヤ一人でも操縦できるように複雑な火器管制を自動制御できるようにしている。

GNソードライフル改

基本的な性能は改修前と変わらないが、銃口からビームサーベルを

発生させる機能を追加して攻撃力の向上が図られている。

GNシザービット改

サイドコンテナに四基ずつ計八基内蔵する。アレルヤだけが搭乗するときはリミッターがかけられ使用できない。

GNキャノン

粒子消費量の削減が行われ、GNソードライフル改との合体機能が追加された。

GNレッグキャノン

レッグブースターに装備されたビーム砲。コンテナのGNキャノンよりも威力は低い、砲塔が360度回転できる。

GNマルチコンテナ

改修前のミサイルコンテナと同じく機体後部に装備する複合武装コンテナ。複数のタイプが用意されており出撃前に選択する。

CB-002RE ラファエルガンダムリペア

新ガンダム開発のためのつなぎの機体として、ヴェーダ内に残っていたラファエルのデータを使い再建造された機体。当初はラファエル本体にオリジナルのGNDライブ、武装モジュールであるセラヴィー？に擬似太陽炉を搭載するハイブリッド機になる予定だった。しかしラファエル本体の設計をやり直す時間がなかったためセラヴィー？の胸部にオリジナルのGNDライブを搭載し、セラヴィー？の脚部にあたるGNビッグキャノンにはGN粒子貯蔵タンクを搭載している。紫だったラファエルの機体カラーは、マイスターがヒクサーになったことから薄い黄色に変更された。なおこの形態は宇宙用の装備であり、地上用の装備は別に開発されている。

GNビームライフル改

細かな改良が行われたのに加え、本機は二つ装備する。

GNビームサーベル

先代ラファエルではセラヴィー？のみに搭載されていたが、本機ではラファエル本体の腰にも搭載する。

GNビッグキャノン改ノGNビッググクロー改

ビットとしての操作性向上とキャノンの粒子消費量の削減が行われている。セラヴィー？の脚部になる。

GNバズーカ

背部に二門搭載する。改修前と同様の武装で、セラヴィー？の主武装。

設定4 第5・5世代ガンダム（後書き）

次回から本編再開です。

第20話 想い（前書き）

勃発寸前の連邦軍とコロニー防衛部隊との戦い。それを食い止めるべく武力介入を行うことを決めたソレスタルビーイング。ガンダムの調整作業を終え、ついにヴェーダが戦いが起こる可能性が最も大きい日を迎えた…

第20話 想い

「ガンダム各機、搭載完了しました」

「トレミーへの粒子供給を開始するです」

ブリッジではフェルトとミレイナが作業を行っている。ラッセは二人の報告を聞きながらトレミーの調整をしていた。そこにスメラギが入ってきた。

「お疲れ様。ヴェーダからの情報によると予想通り連邦軍が月面基地に集結を始めたわ。防衛部隊もモビルスーツ隊を展開している。予定通り本艦は0030に発進します」

「久しぶりだな。腕が鳴るぜ」

ラッセは気合十分の様子だ。

現在着々と発進準備が進んでいるのはCBS-78 プトレマイオス3、第六世代ガンダムの母艦として先月完成したばかりの新型艦である。先代艦では分かれていたコンテナを中央の大きな一つだけにし、ガンダムの整備がしやすい設計になっている。

「スメラギさん。少しいいですか？」

スメラギが来たすぐ後にブリッジへ入ってくる人影があった。マリーとルイスだ。

「どうしたの？もうすぐトレミーは発進するわよ」

「そのことなんですが…私たちも乗せて行ってくれませんか？」

マリーがスメラギに頼んだ。

「あなたたち二人を？でもアレルヤとクロスロード君が…」

「沙慈が反対するのはわかっています。でも沙慈がまた戦場に行くのなら私は沙慈のそばにいたいんです。イノベーターとして何かできることがあるかもしれませんし…」

スメラギの言葉をルイスが遮った。沙慈は自ら願い出て整備担当と

してトレミーに搭乗することになったのだ。

「私も同じ思いです。アレルヤが何と言おうと、私はアレルヤのそばにいます」

そう語るマリーの表情には固い意志が浮かんでいた。

「…わかったわ。でも二人ともちゃんと彼らには言うのよ？それと絶対に危険なこととはしないで頂戴ね」

スメラギは二人の言葉に折れた。マリーとルイスはブリッジを出て行った。

「いいのか？あの二人を戦場に連れて行つて」

ラッセがスメラギに尋ねた。

「大切な人を想う気持ちは誰にも邪魔できないわ…」

スメラギの言葉を聞いたフェルトとミレイナは少し寂しげな表情を見せた。

結局アレルヤと沙慈はしぶしぶ彼女たちの言い分を受け入れた。ただしハルトに再び乗るというマリーの主張だけはアレルヤが絶対に許さなかった。そのためマリーはトレミーの操舵を、ルイスは沙慈の手伝いをする事になった。

「プトレマイオス3、各部異常ありません」

「全システムオールグリーンです」

フェルトとミレイナがスメラギに告げた。

「マリーさん、お願い」

「了解。プトレマイオス3発進します！」

マリーの操舵でトレミーは基地を飛び出し、イノベイターのコロニーがあるラグランジュ5へと向かって行った。

第20話 想い（後書き）

質問やリクエストお待ちしております。

第21話 爆発（前書き）

プトレマイオス3は、連邦軍とコロニー防衛部隊が衝突間近のラグランジュ5へ向けて発進した。

第21話 爆発

「まもなく目標ポイントに到達する。パイロットはモビルスーツへ」
連邦軍の戦艦内に放送が響き渡った。今回ラグランジュ5へ派遣されたのはヴォルガ級巡洋艦四隻と、新造のエニセイ級巡洋艦一隻からなる部隊である。

それに対しコロニー防衛部隊は戦艦二隻を発進させた。ヴァン運用のために建造された新型戦艦、メリーランド級である。
二つの陣営はまもなく戦闘態勢に入ろうとしていた。

そこから離れること数キロのところにソレスタルビーニングの戦艦、ブトレマイオス3がいた。こちらはすでに戦闘態勢に入り、ガンダムが発進するところだ。

「第一、第二デッキハッチオープンです」
ミレイナがオペレートと同時にトレミーの右舷と左舷のハッチが開いた。

「ラファエルとハルートをカタパルトデッキへ搬送です」
格納庫からハルトリペアが左舷の第一デッキ、ラファエルリペアが右舷の第二デッキに移動した。

「リニアカタパルトボルテージ上昇。機体をフィールドに固定。射出タイミングをフェルミさんに譲渡するです」

ラファエルリペアのコックピットにミレイナからの通信が入った。
それを聞いてヒクサーは操縦桿を握り直した。

「了解。ラファエルガンダムリペア、ヒクサー・フェルミ。行きます！」

「ユーハブコントロールです」

次にミレイナはハルトリペアのオペレートを開始した。

「アイハブコントロール。ガンダムハルトリペア、アレルヤ・ハ

ブティズム。目標へ飛翔する！」

「続いてサバーニヤ、ラジエル、カタパルトデッキへ」
今度はフェルトがオペレーターを行う。

第一デッキにはラジエルアラ、第二デッキにはサバーニヤリペアが姿を現した。

「射出タイミング譲渡します」

フェルトの声を聞いたロックオンが前を向くのと同時に二体のハ口が耳を動かした。

「オーライ。ガンダムサバーニヤリペア、ロックオン・ストラトス。狙い撃つ！」

「射出準備完了しました」

ラジエルアラの中でラグノスは閉じていた目を開けた。

「了解。ガンダムラジエルアラ、ラグノス・セラード。出る！」

トレミーから四つの光が飛び出して行ったところ、連邦軍と防衛部隊は双方のモビルスーツを発進させていた。数では連邦軍が圧倒的に勝っているが、ノーマルとイノベーターではパイロットの能力に大きな差があるためどちらが優勢かはわからない。

連邦軍のジンクス？部隊は防衛部隊のヴァン部隊に接近していった。

その時だった。ジンクス？部隊にむけて何本か粒子ビームが飛来した。直接機体を狙ったものではなかったため、ジンクス？は全機ビームを回避した。

「このビームは……」

その桃色のビームを見たジンクス？のパイロットの一人が呟いた。その声にこたえるかのようにビームが飛来した方向に四つの緑色の光が現れた。その光は大きくなり、モビルスーツの形になった。

「ガンダム……！」

突如現れた四機のガンダムに連邦軍もコロニー防衛部隊も驚いたようだ。しかしただ一人驚いていない男がいた。彼はジンクス？の中で怪しい笑みを浮かべた。

「やはり来たか、ソレスタルビーイング」

今回ガンダムマイスターに与えられたミッションは、連邦軍がコロニー防衛部隊がお互いに攻撃することを防ぎ、連邦軍を撤退させるというものだ。攻撃が行われると攻撃された側の感情が悪化し、本格的な戦闘になることは目に見えているからだ。

四機のガンダムは両陣営の間に入り、ジンクス？およびヴァンと向き合った。先程ヒクサーがヴェーダを使って双方に攻撃を行わないようにメッセージを送った。

そのおかげかジンクス？もヴァンも動きを見せない。

「ヒクサー、連邦軍に撤退するように…」

ラグノスがヒクサーに通信を送ったその瞬間、ヴァン部隊の中の一機が突然爆発した。

「何！？」

マイスターは目の前で起きたことが理解できなかった。近づいた機体はなく、粒子ビームによる攻撃でもない。機体の故障かと思われたが、ラグノスや他のイノベーターたちはそうでないことを感じ取っていた。

「あのジンクス？のパイロット、何てことを…」

彼らの目には味方部隊から少し離れた位置にいるグレーの指揮官用ジンクス？が映っていた。そのコックピットにいるのは先程唯一ガンダムの姿に驚かなかった男だった。

第21話 爆発（後書き）

いつもより長くなってしまいましたが、読んでいただきありがとうございます。

第22話 反射（前書き）

戦闘間近になった連邦軍とコロニー防衛部隊の間に入り、撤退するよう呼びかけたソレスタルビーイング。両者ともに動きがなくミッションは成功かと思われたが、突如防衛部隊のMSヴァンのうち一機が爆発した。

第22話 反射

「いったい何が起きたの？」

トレミーにいるスメラギは状況が全く把握できずにいた。その時ラグノスから通信が送られてきた。

「どうやら連邦軍はコロニーにスパイを送り込んでいたようです。あらかじめ擬似太陽炉の炉心部に小型の爆弾を仕込んでおいて、遠隔操作で起爆したんです。起爆させた人物、つまりスパイは今ジンクス？に乗っています」

「どうやらそのことに気が付いたのはラグノスだけじゃないみたいだぜ。防衛部隊が一斉に攻撃態勢に入りやがった」

ロックオンがラグノスに続いて通信を送った。

その言葉通り、ヴァン部隊はビームライフル「ドレイクフラム」をジンクス？部隊に向けていた。それに応じるようにジンクス？も攻撃態勢に入る。もはや両軍一触即発の状態だった。

「なかなかやるわね、連邦軍も。これよりミッションプランをB34に変更します」

スメラギは厳しい口調で指示を出した。

「プラン変更了解。これより武力介入に移行する」

スメラギの指示にアレルヤが代表して答えた。ミッションプランB34は、今回のミッションで想定された最悪の状況――両軍が戦闘状態に入った――に対応するプランである。

「ロックオンとヒクサーは連邦軍を頼む。僕とラグノスで防衛部隊を抑える」

アレルヤが他の三人に通信を入れた。三人がアレルヤの指示通りに動く。

（お前だけでイノベイターに対抗できるのかよ？）

その時アレルヤの頭の中に声が響いた。アレルヤの別人格、ハレルヤだ。

「やってみなきゃわからないさ」

（そうかい。なら俺はちよつと見物させてもらうぜ）

ついにヴァン部隊がジンクス？部隊に対して攻撃を開始した。「ドレイクフラム」から幾筋もの高出力ビームが放たれる。だがそのビームはジンクス？に届かなかった。ラジエルアーラのGNシールド、サバーニヤリペアのGNホルスタービット改、ラファエルリペアのGNフィールドが防いだのだ。その隙に回り込んでいたハルトリペアがヴァン部隊にGNミサイルを撃ち込んだ。

ヴァン部隊は持ち前の機動力でミサイルを全弾回避した。高速で飛び回るヴァンをラジエルアーラとハルトリペアが追う。

続いてジンクス？が反撃とばかりにヴァンに攻撃を仕掛けた。先程のヴァンの攻撃よりも数が多い粒子ビームが発射された。しかしこの攻撃も大部分がサバーニヤリペアとラファエルリペアが防いだ。防御の間を抜けたビームもヴァンには当たらなかった。

しばらくジンクス？とヴァンが互いに攻撃し、それをガンダムが妨害するという三つ巴の戦いが続いた。ジンクス？はヴァンの攻撃やサバーニヤリペアとラファエルリペアの横槍により、約半数が武装や手足を失っていたが、ヴァンの方は被弾した機体はいまだ数機という状況だった。おまけに攻撃を命中させたのは全てラジエルアーラであり、ジンクス？はおろかハルトリペアですら牽制がやつという状況だった。今までのどの機体よりも高速で動くヴァンに攻撃を当てることは常人には不可能に近く、火器管制がオートになったとはいえ本来複座式であるハルトリペアの武装をアレルヤ一人で使うことは少々無理があるのだ。

攻撃を当てることができないアレルヤに苛立ちが見え始めた時だった。ハルトリペアが四機のヴァンに包囲された。アレルヤはハルトリペアを飛行形態に変形させ離脱しようとしたが、別の一機が突如正面に現れてビームサーベルで斬りかかってきた。

「アレルヤ！」

それを見たラグノスはすぐに助けに行こうとしたが、他のヴァンに行く手を阻まれた。トランザムを使っても間に合わない…ラグノスがそう思った瞬間ハルトリペアはビームサーベルをまるで曲芸のような動きで避けると、ビームサーベルを持ったヴァンの腕をGNレッグキャノンで破壊しながら急速で離脱した。

「まったく、結局俺の助けがいるんじゃないかよ」

「すまないハレルヤ。君に迷惑をかけるつもりはなかったんだけど

…」

ハレルヤとアレルヤが交互に喋る。先程の動きは表面化したハレルヤが行ったのだ。

「謝ってる暇はねえ。行くぜ相棒、反射と思考の融合だ！」

「ああ！トランザム！」

ハルトリペアは赤く輝き、超高速でヴァン部隊に向かって行った。

第22話 反射（後書き）

どうも最近話が長くなっていきます…

第23話 漆黒の宣言（前書き）

連邦軍のスパイ工作が引き金となり始まった、連邦軍とコロニー防衛部隊の戦闘。それに対し武力介入を行うソレスタルビーイング。その戦闘のさなか窮地におちいったハルトリペアだったが、ハレルヤが表出し真の超兵が再び復活した。

第23話 漆黒の宣言

トランザムを始動させたハルトリペアはヴァン部隊に突撃していくと攻撃を開始した。多数のビームとミサイルがヴァンに襲い掛かる。ヴァンは高速でその攻撃をかわしたが、それよりも速いスピードで一機のヴァンに接近したハルトリペアはソードライフル改でその手足を切断した。

「さすが真の超兵だな。いやそれだけじゃなくて、アレルヤもすでに始まっているのか…」

自分も戦いつつハルトリペアの戦闘を見ていたラグノスは一人呟いた。

四機のガンダムにより両軍の機体はそれぞれ十数機が戦闘能力を失った。そしてハルトリペアが三機目のヴァンのGNドライブを破壊した時、一応の目標を達成した連邦軍は戦闘宙域から離脱し、それを見たコロニー防衛部隊も相当の被害を受けたため撤退していた。

「ゴート少佐、撤退命令です」

「わかつている」

ゴートと呼ばれたその男はガンダムを一瞥すると乗機ジンクス？を母艦の方向へと向けた。

「あの男、やってくれたな…」

そのジンクス？を見つめているラグノス。

バリー・ゴート少佐。今回の戦闘の引き金ともなったヴァンの爆発を仕掛けた張本人である。

「とりあえずミッションは終了よ。ガンダム各機はトレミーに帰投

して」

スメラギの指示に応じ四機のガンダムはトレミーへと戻った。

こうして歴史に大きな影響を与えることになるノーマルとイノベーターの最初の軍事衝突は終結した。グリニッジ標準時の西暦2317年11月11日に起きたこの事件は後に「イレブン・ハザード」と呼ばれるようになる。

この事件はノーマル、イノベーター双方に大きな影響を与えた。コロニー側は大々的にこの事件を取り上げ、ノーマルは自分たちを殲滅しようとしているのだと主張した。一方地球連邦は、コロニー側の主張は事実無根とし、事件自体がノーマルへ戦争を仕掛ける布石を作るための自作自演だとした。この矛盾し合った主張が理由でお互いに対する感情は一気に悪化してしまい、三日後の11月14日に歴史的に非常に重要な宣言がなされることになる。

「スメラギさんとヴェーダの予想通りですね……」

他のメンバーとともにブリーフィングルームのモニターでコロニー側が全世界に向けて発信している映像を見ていたラゲノスが言った。「世界是最悪のシナリオをたどろうとしているわ」

スメラギは落胆した様子である。

コロニー側から出された宣言（通称、漆黒の宣言）は以下のものだった。

「コロニーに対する連邦政府直轄統治の廃止およびコロニー自治政府の設立――」

つまり軍隊だけでなく政治面でもコロニーは地球連邦から分離するという宣言である。すでに自治政府は立ち上げられ、その機能を果たし始めている。

地球連邦はこの宣言が出された直後に声明を発表し、この宣言は到底受け入れられないものであり自治政府の設立は無効であるとした。さらにヴェーダによれば、コロニー軍も連邦軍も武力行使を辞さない構えを見せている。双方が軍拡に走っているというのだ。

ソレスタルビーイングのメンバーは誰もがこう思っていた。
（また戦争が始まる…）

第23話 漆黒の宣言（後書き）

オリジナル機体やオリジナルキャラの投稿、お気軽にとつぞ。

第24話 サーガ（前書き）

あのおなじみ原作キャラがよやくの登場です。

第24話 サーガ

コロニー自治政府が立ち上がってから半年、連邦政府はいまだその存在を認めていなかった。月面基地への配備数を増やした連邦軍は部隊を展開してコロニー側への牽制を行ってはいたが、本格的な戦闘行為は「イレブン・ハザード」以来まだ起きていない。連邦軍は四年前の対ELS戦で多くの人材を失ったダメージからまだ回復できておらず、さらにイノベーターに革新した兵士が次々と軍を抜けていくため積極的な作戦行動がとれないのだ。一方コロニー軍も兵士の数は増えつつあるが慢性的な人材不足に悩んでいた。

そのような状況のため連邦政府や連邦軍の中には、いずれ起こるであろう戦争でイノベーターに勝利するためには一部のイノベーターをコロニーへ追放せずに自らの陣営に引き込むべきだという意見が生まれ始めていた。しかし開始されてから一年以上が経過したイノベーター追放政策はこれまでにないほど世論の賛同を得ており、連邦政府と軍の悩みは尽きなかった。

そんな中、旧人革連領の人里はなれた山奥にある研究所：そこへ向かう道の上を暗闇の中二つの影が動いている。

「コアの具合はどうだ？」

影のうちの一つがもう一つの影に話しかけた。声からして男のようだ。

「現状で50%といったところです。しばらくは擬似の方を使ったほうがいいかと。そちらはもうすぐ完成との連絡が来ています」
もう一方の影も男のようで、さらに低い声だった。

「そうか…」計画は順調に進行中だ。期待しているぞ」
最初の男がそう言うと二人は研究所に入って行った。

二人は大きなガラスケースの前で立ち止まった。中には椅子が一つだけあり、一人の男が拘束されていた。

「さて、我々のために存分に働いてもらいたいものだ。イノベーター。」

所変わってラグランジュにあるコロニー。このコロニーは旧世代のものであり、すでに稼働は停止されている。そこに小型艇が静かに入って行った。

コロニーの中にあるビルの一室。かつては会議室であつたと思われる大きな部屋である。どうやらこの部屋には空気が供給されているようだ。

そこに軍服を着た男が入って来て、部屋の中心にいる女に話しかけた。

「司令。彼らが帰還しました」

「わかった」

その時部屋の扉が開き、男が一人飛び込んできた。

「大佐、帰りました」

「貴様は毎度毎度…司令と呼べと言っているだろうが！」

「す、すみません…」

おなじみのこの光景に周りにいた者は肩をすくめた。

「司令、調整作業は一通り終了しました」

「さすが私のダーリンね」

続いて部屋に男女二人が入って来た。赤毛の女が隣にいる長髪の男の腕に愛おしそうにしがみついている。

こちらもおなじみの光景に周りのメンバーはまた肩をすくめた。

彼らはイノベーター追放政策に反対して軍を抜けた者たちで構成さ

れた組織、サーガである。戦争が起きた場合は第三者の立場から介入すべく現在さまざまな準備を行っている。

（再びともに戦うことになるのだろうか、クジヨウ…）

サーガの最高司令官、カティ・マネキンはまだ謝っている夫パトリックを尻目に考えにふけていた。

（君はまだ戦っているのかい？クジヨウ…）

サーガ技術主任、ビリー・カタギリは妻ミーナがまだ腕にしがみついていたが、しばらく思考を巡らせていた。

第24話 サーガ（後書き）

機体や人物の投稿、感想欄へどしどしお寄せください。
設定がなく名前だけでも結構です。

第25話 同調せず

「全GNドライブ、同調稼動準備完了です」

「機体システムセッティング完了。ラジエルアーラ各部異常ありません」

ミレイナとフェルトがオペレートする。

「よし、これよりトリプルドライブシステムのマッチングテストを行う。ラグノス、始めてくれ」

「了解。GNドライブ、リポーズ解除」

イアンからの通信に答えたラグノスの言葉と同時に、ラジエルアーラの背中と二対のウイングから緑色の粒子が放出され始めた。

「同調率30%を突破しました」

「粒子生産量、放出量ともに上昇中です」

「今度はいけるかどうか…」

ラグノスはオペレートを聞きながら、コックピットの中で呟いた。

その時オペレーター席の端末が警報音をあげた。

「どうした!？」

「粒子生産に異常発生、このままではオーバーロードします!」
フェルトが状況を説明した。

「ラグノス!」

イアンの叫び声を聞くと、ラグノスの瞳が金色に光った。

ラグノスは信じられないようなスピードでキーボードをたたき始めた。

約一分後、三つのGNドライブはオーバーロード直前で停止した。

「今回も同調率は最高で32%か…ダブルオーのツインドライブの

時よりひどいな」

「もう40回もテストを行っているのに前進しませんね」

テスト終了後の休憩室。イアンとラグノスが話し合っている。ラジエルアーラに搭載されているトリプルドライブシステムは依然三つのGNDドライブが同調せず、解決策も見つからなかった。

「完全同調を果たせば、必ず人類をわかり合わせることができはずなのに……」

そのとき基地内にフェルトの声が響いた。

「ヴェーダより連絡が入りました。ラグランジュ2に連邦軍とコロニー軍が集結し始めています。戦闘が起こる可能性があるので、トレミーは発進します。マイスターは至急乗艦を」

ラグランジュ2。月の裏側に存在するラグランジュポイントで、コロニー型外宇宙航行母艦ソレスタルビーイングが存在する場所である。さらにソレスタルビーイング号の近くには巨大な花がある。約四年前にELSが一体化してできたものである。

ELSを認めようとしない保守派はこれに対し何度かテロをしかけていた。一年ほど前まではソレスタルビーイングや連邦軍によってテロはすべて防がれていたのだが、コロニー側が連邦軍から分離して以降、連邦軍（近頃イノベーター側からは旧人類軍と呼ばれるようになった）もソレスタルビーイングが防いでいるものの、これを狙うようになっていた。

イノベーターたちはELSを自分たちを進化させてくれた存在と認識し始め、まるで神のように信仰していた。そのためコロニー軍は防衛拠点として月の裏側に基地を建設しようとし、ラグランジュ2に部隊を派遣した。それに対し連邦政府が軍を差し向けたのである。

「ガンダム各機発進完了しました」

ラグランジュ2へと赴いたトレミーからガンダム四機が発進した。
それと時を同じくして太陽系第一惑星、水星…

水星の近くの空間から突如一機のモビルスーツが姿を現した。その
機体は白い光を放ちながら地球へ向けて進んで行った。

第26話 カスタム（前書き）

E L Sの花を守るため月の裏側に基地を建設しようとするコロニー軍に対し、連邦政府は軍を差し向けた。ノーマルとイノベーター二度目の軍事衝突が起ころうとしていた。

第26話 カスタム

「連邦軍艦隊を確認。エニセイ級五隻、ヴォルガ級三隻、ナイル級一隻です」

「コロニー軍艦隊も確認したです。メリーランド級が十隻です」

フェルトとミレイナが状況を報告した。

「どっちも本気だな」

ラッセが呟いた。

「ええ、ガンダム各機は十分注意してミッションを遂行して」

スメラギがマイスターたちに伝えた。

今回起こるであろう戦闘はラグランジュ2へ進撃する連邦軍と、それを迎え撃つコロニー軍という構図である。連邦軍はジンクス？、コロニー軍はヴァンからなる部隊を展開している。

イレブン・ハザード以来となる連邦軍とコロニー軍の戦闘は、ジンクス？の攻撃から始まった。

今回もヴァンは高い機動力で戦闘宙域を飛び回り、ジンクス？がそれを追う。ガンダムは双方を無力化しようとしていた。しかし今回の戦闘はイレブン・ハザードと決定的に違うことがあった。

「くそつ、ヴァンだけじゃなくてジンクスにも当たらねえぞ」

ロックオンの言葉がその違いを表していた。

ジンクス？がヴァンとほぼ同じ機動力を発揮しているのだ。

「攻撃力を落としてでもヴァンに匹敵する機動力を求めたのか……」
ラグノスが言った。

ジンクス？は圧倒的な機動力を持つヴァンとの戦闘に備え、全機がGNコンデンサ内臓のブースターを機体各部に装備しているのだ。ただしノーマルのパイロットではスピードに翻弄され、攻撃がまま

ならなくなっていた。

「こんなブラマイゼロの戦闘、意味があるのか？」
ラッセが首をひねる。

「一見無意味に見える高機動装備……」
スメラギが呟く。

「まさか……！」

自分たちの攻撃が全く当たらず、ヴァンのパイロットたちが苛立ちを見せ始めた時だった。

ジンクス？部隊とは別の方向から太いオレンジ色の粒子ビームが飛来した。ヴァンはそれを避けたが、いきなりビームが曲がり不意をつかれたヴァン三機が破壊された。

「あのビームは……！」

近くにいたロックオンは見覚えのあるそのビームの動きに声を失い、撃った機体を探した。

ビームを撃ったのはジンクス？だった。しかし他の機体と違いブースターは装備しておらず、一部形状や武装が異なる。

「やはりカスタム機！もう完成していたのね」

スメラギの言葉通り、そのジンクス？はカスタム機で砲撃戦闘型。ヴェーダの情報ではロールアウト間近とあったのだが、連邦軍は完成にこぎつけていた。

一方アレルヤは、高速で接近してくる機体に気付いた。それは他の機体よりも大型のブースターを付け、ヴァンやハルトリペアを超えようかというスピードを発揮していた。ジンクス？のカスタム機、高速戦闘型である。

別の場所でジンクス？の部隊を相手にしていたヒクサーもカスタムジンクス？に遭遇した。

まるで中世の騎士のような風貌で大型の刃を形成したビームサーベルを持った、近接戦闘型に。

そしてラグノスは、近くに現れたカスタム機のパイロットから発せられているものを感じ取り驚愕した。

「脳量子波が…なぜ？」

それぞれノーマルジンクス？の一個中隊を率いて現れた四機のジンクス？カスタム機のうちの最後の一機は、脳量子波対応型だった。

第26話 カスタム（後書き）

次回はジnkクス?のカスタム機の設定を解説します。

設定5 カスタムジンクス？

全機が両腰バインダーに擬似太陽炉を一基ずつ、計二基搭載している。（ツインドライブではない）また全機がGNフィールドを使用できる。

GNX-807T/BW ジンクス？砲撃戦闘型（ジンクス？・バジリスク）

ガデッサのデータを転用して開発された機体。多彩な射撃武装を持ち、非常に高い火力を持つ。パイロットはAEUからアロウズを経て連邦軍に戻った、ネロ・ファッジ大尉。

GNブラスターキャノン

ガデッサのGNメガランチャー、レグナントのビーム砲、さらにガデラーザのGNブラスターのデータを参考に開発された武装。後部に擬似太陽炉を搭載する。形状はGNメガランチャーに似ており、三連ビームライフルとしても使用できる。最大の特徴はレグナントのビーム砲と同様に、任意のタイミングでビームを曲げられることである。

GNビームクリニエラ

背部に二基搭載した十門の砲口を持つパーツからなる武装。フルバーストモードでパーツ内に折りたたまれた部分を展開し、合計四十門にもなる砲口から雨あられのように発射されるビームの様はまさにイタリア語で「たてがみ」を意味する「クリニエラ」の名の通りである。

GNキャノン

両腰のGNドライブと直結したビーム砲。高い連射能力と威力を合わせ持つ。

GNバルカン

両手首に装備する。主に牽制やミサイルの迎撃に使用される。

GNミサイルポッド

両肩のハードポイントと両脚ふくらはぎに搭載されたミサイルポッド。多数のミサイルを一度に発射できる。

GNビームサーベル

両脚に搭載する。本機ではあくまでも予備的な武装である。

GNX-807T/HS ジンクス？高機動戦闘型（ジンクス？・スザク）

ヴァンと同じくブレイヴのデータを使用し、巡航形態に変形する機能を持つ。背部に大型ブースターを二基装備し、MS形態でも驚異的な機動力を誇る。しかしその代償としてパイロットに常人離れの反射神経を要求し、本機は唯一適性があるバリー・ゴート少佐にしか扱えない。

GNビームマシンガン

高い連射能力を持つライフル。基本的には二丁装備する。巡航形態でも使用可能。

GNビームガン

巡航形態時の機首に内蔵されたビーム砲。

GNビームサーベル

高速戦闘時に扱いやすいように搭載位置を前腕部に変更している。

GNビームカッター

巡航形態時の主翼に搭載。ビーム刃を展開しすれ違いざまに敵機を切り裂く。

GNX-807T/AC ジンクス？近接戦闘型（ジンクス？・ユニコーン）

追加装甲などに中世騎士の風貌が見える機体。GNバルカン以外の火器を持たないが、接近戦ではエクシアやダブルオー以上のスペックを有する。パイロットは人革連、アロウズを渡り歩いた、カラー・カーリー大尉。

GNマルチビームサーベル

ラジエルアーラに搭載されているスーパービームサーベルにデータが使用された装備。刀身の形状を変化させる新型発振機を内蔵する。柄の部分がほかのビームサーベルよりも大型で、より高い威力のサイベルを形成する。二基装備するが、通常は一刀流で使用する。

GNクロウ

スサノオから転用した武装。腰のバインダーを変形させて相手を攻撃する。新たにクロウ部分を射出することが可能になった。

GNバルカン

頭部に装備する本機唯一の射撃武装。

GNX - 807T / SP ジンクス？脳量子波対応型（ジンクス？ドラウヴン）

連邦軍が秘密裏に進めている「E計画」の第一弾として、アヘッド・スマルトロンのデータを参考にし開発された機体。機体名のオランダ語で「ぶどう」という意味をもつ「ドラウヴン」は、スマルトロンにならいつけられた。連邦軍のデータベースでは本機のパイロットは登録されておらず、存在していないことになっている。

GNビームライフル

高威力照射ビームから牽制用のバルカンにいたるまで、多くのモードをオプション装備なしに使用できる。

GNビームサーベル

両脚に搭載する。

GNフアング

両腰のバインダーと両肩のコンテナに合計20基搭載する。

第27話 The Fight of Meister（前書き）

ラグランジュ2で始まった連邦軍とコロニー軍の戦闘。シンクス？、ヴァン、そしてガンダムが三つ巴の戦いを繰り広げる中、四機のカスタムシンクス？が現れた。

第27話 The Fight of Meister

突如戦場に現れた四機のカスタムジンクス？に、ソレスタルビーイングとコロニー軍は困惑していた。

「スメラギさん、どうします？」

フェルトが尋ねた。

スメラギはしばらく考えると、マイスターたちに指示を出した。

「介入行動は続行します。でもおそらく連邦軍の狙いはELSよ。近くにいるラグノスとアレルヤは警戒して」

「了解」

アレルヤは通信に答えると、ヴァンに対して攻撃を始めたジンクス？高機動戦闘型、通称ジンクス？・スザクにハルトリペアを向けた。

「羽つきか。スザクのスピードについてこれるかな？」

スザクのパイロット、バリー・ゴートはハルトリペアに気付き、さらに機体のスピードを上げた。

「ふん。なかなかやるじゃねえか！」

アレルヤにかわり表出したハレルヤも、ハルトリペアの速度をアップさせスザクに迫った。

「そらそら、どうしたガンダム！」

近接戦闘型、ジンクス？・ユニコーンを操るカーラ・カーリーは、激しい攻撃に対して受けに回っているラファエルリペアに失望したかのような声を漏らした。

「くそっ、さすがカスタム機だ…だが！」

ヒクサーの声に力がこもると、ビームサーベルによる鏝迫り合いをしていたラファエルリペアはユニコーンを押し返した。

ロックオンとハロは四方八方から襲ってくるジンクス？・バジリスクが放つビームをホルスタービット改やプロトマルチビットで必死で防ぎ、かわしていた。

「思っていたよりも手ごたえがないな、これならどうだ？」

バジリスクのパイロット、ネロ・ファッジは余裕の笑みを浮かべた。その瞬間バジリスクの背中から大量のビームが雨のように発射された。GNビームクリニエラだ。

「それがどうした！」

ロックオンはサバーニヤリペアを巧みに操りビームの雨を避けると、バジリスクに銃口を向けた。

「あのパイロット、イノベイターか？いや、何か違う…この感覚どこかで…」

ラグノスはまだジンクス？脳量子波対応型〃ジンクス？・ドラウヴンのパイロットが脳量子波を発していることに驚きを隠せなかった。動きが止まったラジエルアーラに対して、ドラウヴンはビームライフルを放った。

「バーストシステムが使えれば…」

ラグノスはビームを避けつつ呟いた。

現在ラジエルアーラはトリプルドライブが安定していないため、ツインドライブにもう一つのドライブを独立稼働させて加えるという形で運用されている。トランザムは問題なく使用できるものの、独立稼働しているドライブの干渉により、対話のためのバーストシステムが使えないのである。

「それでもやらないと。僕は刹那とティエリアに託されたのだから、人類の未来を！」

体勢を立て直したラジエルアーラは、スーパービームサーベルを抜き放つとドラウヴンへ突撃した。

カスタム機四機と激しい戦いを繰り広げるガンダム。そこから少し離れたところに白い光が現れた。水星からやってきたその光は、まるで戦いを見守るように浮遊していた。

第28話 ARCHER（前書き）

ラグランジュ2で続く連邦軍とコロニー軍の戦闘。連邦軍が投入した四機のカスタムジンクス？のうち一機から、ラグノスは脳量子波を感じ取っていた。

第28話 ARCHER

「カスタムジンクス？のパイロット！僕の声が聞こえるか！」

ラグノスはビームを避け、攻撃を仕掛けつつジンクス？・ドラウヴンのパイロットに通信と脳量子波で呼びかけを行っていた。

「……」

応答はない。

ラグノスは違和感を感じていた。このパイロットからは脳量子波の存在だけが伝わってくるのだ。普通の脳量子波使いならもっと多くの感情が伝わってくる。

「感情がない、ということは何らかの処置を受けているとしか考えられないな……やはりこのパイロット、超兵だな」

確信を得たラグノスはトレミーへ通信を入れた。

「マリー、ちょっといいか？」

ラグノスが通信を送ったのはトレミーの操舵を行っているマリーだった。

「どうしたんですか？」

「カスタムジンクス？の一機に超兵が乗っている」
ラグノスが告げた。

「えっ？」

マリーだけでなくブリッジにいた全員が驚きの表情になった。

「それで、悪いんだが……」

「わかりました。すぐに準備をします」

マリーはラグノスの言葉を遮って言った。

「ラッセさん。操舵もお願いできますか？」

「了解だ」

ラッセに舵を預けると、マリーはブリッジを出て行った。

マリーに続いてアレルヤにも通信を送ったラグノスは、準備のためハルトリペアがいる方へラジエルアラを進ませた。それを追うドラウヴン。

「そろそろビームの動きが見えてきたぜ！」
ロックオンの言葉通り、サバーニヤリペアは全てのビームを難なくかわしている。

回避と同時に、両手に持ったライフルビット？改をジンクス？・バジリスクに向けて発射する。バジリスクがGNフィールドを展開してビームを防ぐと、さらに全ビットが一斉に火を噴いた。

「くそっ……」
ファッジに焦りが見え始めた。

「近づかせなければ問題ないさ！」

ヒクサーは、ラファエルリペア自慢の火力でジンクス？・ユニコーンを近づかせない。

分離させたビッグクロー改とGNバズーカを同時発射する。

「さすがにガンダムは一味違うか！」

GNフィールドを展開したカーリーの額に汗がにじむ。

「おい、アレルヤ。ラグノスの話は本当なのか？」

「ラグノスはイノベイターだ。それくらいわかるのは当然だよ、ハレルヤ」

ジンクス？・スザクと超高速の戦いを展開しつつ、アレルヤとハレルヤは会話を行う。

「そついえば羽つきのパイロットは、人革連が作った超兵だったか……」

ゴートはスザクのコックピットで一人呟いた。

その時スザクのレーダーが、ハルトリペアとは別に接近する敵機が二機いることを告げた。

「ヴァンか？ いやあれば…ガンダム！」

「マリー！」

アレルヤは、ゴートが注目した機体、ラジエルアーラとは別の一機を見て叫んだ。普通のモビルスーツよりも小さい、かつて自分が最も愛する人が乗ったその機体を。

「アレルヤ！」

GNR-101A/RE GNアーチャーリペアに乗ったマリーもアレルヤの名を叫んだ。

第28話 ARCHER（後書き）

投稿間隔が少し開いたので、時間があるときにまとめて投稿しました。

ちなみにGNアーチャーリペアは「こんなこともあるかと」「ということで改修され、トレミーに搭載されていた、という設定です。

第29話 白（前書き）

連邦軍とコロニー軍の戦闘の最中、一機のカスタムジンクス？から
脳量子波を感じ取ったラグノスの呼びかけに応じて、マリーがGN
アーチャーリペアで出撃した。

第29話 白

「アレルヤ、マリー！ここは僕が引き受ける」

「わかった。すぐ戻る」

アレルヤはラグノスに答えると、マリーが乗るGNアーチャーリペアとともに離れていった。

ドラウヴンが追いかけようとしたが、ラジエルアーラのプロトウィングビットがそれをはばんだ。

ラジエルアーラはスザクとドラウヴン、二機のカスタムジンクス？と向き合った。

「足止めのつもりだろうが、一対二でできるのか？」

ゴートが見下したように言った。

するとまるでゴートの言葉に答えるかのようにラジエルアーラが赤く輝いた。

「トランザム！」

そう叫ぶラグノスの目は金色に輝いていた。

「ロックオン、大丈夫か？」

「なんとかな。そっちはどうだ、ヒクサー」

それぞれ違う場所でカスタムジンクス？と戦っていたロックオンとヒクサーが合流した。ヴァン部隊がカスタムジンクス？に向けて攻撃してきたのだ。

「お前らいい加減にしろ！」

ロックオンの言葉とともに、サバーニヤリペアとラファエルリペアがバジリスクとユニコーン、そしてヴァンへと攻撃を開始した。

トランザムを始動させたラジエルアーラは、スザクとドラウヴン相手に互角の戦いを繰り広げていた。スザクを超えるスピードで動き回り、バズーカライフルとショットライフル、そしてプロトウェイングビットで攻撃する。

「さすがだな。ならこちらも…トランザム！」

ゴートはトランザムを使った。

「くっ…」

トランザムによりさらにスピードを上げたスザクの動きに、ラゲノスは一瞬たじろいだ。

ラジエルアーラはビームサーベルによる接近戦に移行しようとした。そこを狙いドラウヴンがファングを飛ばしてきた。数は十基。

ラジエルアーラはファングの突撃をぎりぎりでかわし、ビームサーベルで三基を破壊した。

さらにショットライフルで二基を撃ち落としたが、スザクが放ったビームを避けるため回避行動をとったところに残りの五基がまっすぐ向かってきた。

それを防ごうと突き出したシールドに命中する直前、五基のファングは全て爆発した。

「何だ！？」

「来たか！」

ゴートとラゲノスの視線の先にいたのは、マリーを乗せて帰ってきたハルトリペアだった。

「なんとか間に合ったようね」

マリーは先程放ったシザービットを回収しながら言った。

「ああ」

アレルヤが答えた。

「安心して場合じゃねえぞ！とつととやることやっちまおうぜ！」
アレルヤにかわってハレルヤが現れた。

「わかってるよ」

再びアレルヤが言葉を発すると、アレルヤとマリーの前にあるコンソールに三等分された赤い円が現れた。中心には”M A R U T E”の文字。

マルチモードを起動させ赤い六つ目になったハルトリペアは、ドラウヴンへ突撃した。

双方がトランザムを始動させたラジエルアーラとスザクは、戦闘宙域を飛び回っていた。

逃げるスザクに、追うラジエルアーラ。スピードはほぼ同等だった。「このままじゃちがあかない。向こうのトランザムの限界時間まで待つか…」

ラグノスがそう言った時だった。粒子ビームがスザクに向けて放たれた。

「何！？」

ゴートはそれに反応したがかわしきれず、スザクの右脚が消し飛んだ。

「ソレスタルビーイングの増援か？限界時間も迫っている。ここが引き際か…」

スザクは撤退して行った。

ビームを放った機体は一瞬だけ停止したが、すぐにまるで流星のように超高速で離れていった。

しかしラグノスはその機体の姿を捉えていた。まったく見覚えのない機体だった。先程の粒子ビームや、その機体が発しているGN粒

子すら始めて見るものだった。
「白い…GN粒子…」

第29話 白（後書き）

感想やオリジナル機体、キャラの投稿お待ちしております。

第30話 超兵

マルチモードを起動させ、潜在能力を完全に開放したハルトリペアはドラウヴンを圧倒していた。ファングは全て撃墜し、ビームライフルも右手とともに粉碎した。さらに左足と頭部を破壊した。しかしドラウヴンは一歩も引く気配がない。

「このパイロット、確かに超兵だけど…何か違う」
マリーが言った。

「俺たちより脳量子波は強いくせに、自我を失ってるな」

ハレルヤがマリーに賛同した。

「僕らとは違う超兵？」

アレルヤが現れて言った。

その時ドラウヴンは残った左腕でビームサーベルを持ち、トランザムを始動させた。

「もうやめるんだ！」

アレルヤはそう叫ぶと操縦桿を前に倒した。

ハルトリペアはドラウヴンの突撃を避け、ソードライフル改でドラウヴンの左腕を切断した。

そしてシザービットでGNDドライブを二基とも機体から切り離した。GNDドライブを失ったドラウヴンはトランザムが切れ、動きが停止した。すると機体からコアファイター

が分離し、戦闘宙域から離脱していった。

「あれはいい…」

アレルヤが呟いた。

ヴァン部隊を攻撃しているユニコーンとバジリスクは、サバーニャリペアとラファエルリペアの妨害を受け続けていた。

「ロックオン！」

「任せろ！」

ヒクサーとロックオンは絶妙なコンビネーションで攻撃を繰り出す。

ビッグキャノンをかわしても、ライフルビット？改やスナイパービットが機体を包囲する。

「カーリー、そろそろ撤退しよう」

「そうだな」

バジリスクに乗るファッジがユニコーンのカーリーに通信を送ると、二機のカスタムジンクス？は撤退していった。

カスタム機が撤退したのを合図とするかのように、ジンクス？部隊が撤退を始めた。

ヴァン部隊が追いかけてようとしたが、四機のガンダムがそれを阻んだ。

こうしてラグランジュ2で起きた二回目のイノベーターとノーマルの戦闘は、両者痛み分けて終結した。

「みんなお疲れ様。帰還して頂戴」

スメラギがマイスターたちにねぎらいの言葉をかけた。

マイスター、沙慈とルイスを含むトレミークルはブリーフィングルームに集合していた。

「違う超兵？」

アレルヤとマリーの報告にスメラギは首をかしげた。

「はい。確かに超兵ではあるんですが、違っ点が少しあるんです」
「それはハレルヤも言っています」
マリーとアレルヤが答える。

「違っってどのあたりが？」

ロックオンが尋ねた。

「脳量子波は超兵よりもかなり高いんです。でも、ただ戦うだけの機械のような…」

マリーが顔を曇らせながら言った。

「連邦軍はそんなものを…」

スメラギの言葉は沈んでいた。

「ヴェーダを使っても、あまり有益な情報はありません」
ヴェーダとリンクしているヒクサーが言った。

「ヴェーダでも情報が集められないなんて…」

「しかし、繰り返し出てくるある単語が気になります」
ヒクサーがスメラギの言葉を遮った。

「I計画？」

「どうやら連邦軍が密かに進めている計画のようだが、詳しくはわからない」

「Iって何だ？」

アレルヤ、ヒクサー、ロックオンが頭を悩ます中、ラグノスが呟いた。

「イノベーター計画…」

「まさかそれって…」

ラグノスの呟きを聞いたスメラギは、驚愕の表情でラグノスの顔を見つめた。

「はい。連邦軍はイノベーターを作ろうとしているんじゃないでし

ようか」

「超兵の技術をそれに使った……」

マリーがラグノスの考えを聞くとうつむいた。

「連邦軍の、擬似イノベーター……」

スメラギの声の調子は、人類が歩まなければならない道の険しさを表しているようだった。

第31話 フェルト（前書き）

ラグランジュ2での武力介入を終えたソレスタルビーイング。
戦場に現れた擬似イノベーターや白いGN粒子を発するモビルスー
ツの存在は彼らを悩ませていた。

第31話 フェルト

擬似イノベーターの報告に続いて、ラグノスが白いGN粒子を発するモビルスーツについて報告した。

「それは本当にGN粒子だった？」

「はい。間違いありません」

スメラギの質問にラグノスが確信を持って答える。

「ヴェーダにも全く情報はありません」

ヒクサーがスメラギに言った。

「この件については現段階ではどうしようもないわ。情報が集まり次第また考えることにしましょう。今はみんな疲れているでしょうし、基地に帰るまでゆっくり休んで」

スメラギはヒクサーの言葉を聞くと全員に言った。

「そうですね」

ラグノスはそう言うのと他のメンバーとともにブリーフィングルームを後にした。

それからしばらくしてトレミーは基地に到着した。

マイスターやクルーたちはそれぞれの部屋に戻り、沙慈はガンダムの整備にとりかかった。

「お疲れ様」

「ああ、今回はまじで疲れたぜ」

ロックオンは他のマイスターと別れて、自分の部屋に入って行った。

「僕はちょっとヴェーダを見てくるよ」

「わかった。また後で」

ヒクサーはヴェーダのターミナルユニットが置かれている部屋へ向かった。

「僕たちも少し休ませてもらうよ」

「二人とも今回は本当にすまなかった」

「いいえ、これが私たちがやらなければならないことですから……」

ラグノスの謝罪に対し首を横に振ったマリィは、アレルヤと一緒に自室に戻った。

一人になったラグノスは部屋に戻らなかった。イノベーターであるためほとんど疲れを感じていないし、白いGN粒子を発するモビルスーツについて少し考えておきたかったのだ。

ラグノスは展望室へ足を運んだ。ここは巨大な窓がついており、地球と月を見ることが出来る。今は先程まで彼らが戦っていたラグランジュ2の宙域が見え、ELSの花も確認できる。

ラグノスが扉をくぐると、そこには先客がいた。窓の方を向いた椅子の背もたれから、桃色の髪がはみ出していた。

「フェルト、休まなくていいのか？」

「えっ……！」

フェルトは自分以外の人物がこの部屋に入って来たことにとても驚いたようだった。

「ラグノスこそ、大丈夫？」

「僕はイノベーターだから、あれくらいじゃ疲れないよ。それにちよつと考えたいこともあつたしな。フェルトも考え事か？」

フェルトが座っている椅子の隣の椅子に座りながらラグノスが尋ねると、フェルトは少し恥ずかしそうに下を向いた。

「今回の戦いを見て思ったの。また戦争が始まったら刹那は何て思うんだろうなって」

「刹那は僕に、いや僕たちソレスタルビーニングに人類の未来を託してELSの星に旅立って行った。そんなあいつなら最後の最後まで人類を信じて、解り合わせようとするんじゃないのか？」

ラグノスが自らの考えを述べた。

「そっか…そうだね。私も刹那ならそう思うと思う。ELSと解り合うために遠い所まで行ったんだもんね」

フェルトはさびしそうに言った。

それを聞いたラグノスはフェルトに尋ねた。

「フェルト。もう刹那に会えないと思ってるだろ？」

フェルトは頬を赤く染めた。

「うん…私が生きているうちに帰ってくるかわからないし…」

「あいつは絶対に帰って来る。それに刹那のことを想い続けていれば、必ずまた会えるよ」

「想い続ける…」

「そう。人が人を想う気持ちはとても強い。どんなことでも可能にするほどに。たとえそれが実現不可能に思える奇跡であったとしても…」

フェルトはラグノスの言葉を聞くと、強い決意がこめられた表情になった。

「刹那…」

第31話 フェルト（後書き）

フェルトの想いは、二人を再会させることができるのでしょうか？

第32話 真の目的

ノーマルとイノベーターのお互いに対する感情は、イノベーター追放政策が開始されて以降目に見えて悪化していた。しかし西暦2318年半ばに起きたラグランジュ2における連邦軍とコロニー軍の衝突、通称ラブレースクレーターの戦い以降、それは最悪のものとなった。

コロニー軍は戦いの舞台にもなったラブレースクレーターに巨大な基地を建設し、ELSの花防衛兼地球侵攻の拠点とした。対する連合軍はラブレースクレーターの戦いで大きな戦果を挙げた四機のカスタムジンクスを中心として部隊を再編成し、コロニー軍に対抗した。

一年前までは両軍ともに人材不足に悩み積極的な行動がとれなかったが、それも解決に向かっており、もはや開戦は時間の問題であった。

しかし開戦の前に連邦軍には解決すべき問題がもう一つあった。ヴェーダの本体が存在するソレスタルビーイング号がコロニー軍に実質占領されてしまっていることだ。

四年前のELSとの戦いにおいて深刻なダメージを負ったソレスタルビーイング号だったが、ヴェーダは無事だった。しかしラブレースクレーターの戦いでラグランジュ2がイノベーター側の勢力圏になってしまった。ヴェーダはイノベーター側にも協力しているためコロニー軍は破壊こそしなかったものの、ヴェーダを使えば連邦政府の情報が筒抜けになる可能性がある。

そこで連邦軍司令部はある作戦を立案した。その作戦はすぐさま全兵に伝えられた。真の目的は明かされないまま…

ラグランジュ2の反対側、月の表側にある連邦軍月面基地には連邦軍艦隊が続々と集結していた。

「司令。例のもの、運搬完了です」

今回の作戦司令に、副官が耳打ちした。司令はそれに怪しげな笑みを浮かべつつ頷いた。

「これよりソレスタルビーイング号奪還作戦を開始する。全艦出撃！」

司令の号令で艦隊がラグランジュ2へ向け進撃して行った。

それから時を遡ること数時間。

「連邦軍によるソレスタルビーイング号奪還作戦…やはり始まったわね」

モニターに表示される情報を見ていたスメラギが言った。

「目的はヴェーダでしょうね」

「おそらくね」

ヒクサーの言葉にスメラギは首を縦に振った。

「でもあの艦はコロニー軍が抑えてんだろ？そう簡単に奪還できるのかよ」

「それにヴェーダを奪還しても、イノベーター側のネットワークとのリンクを簡単に切れるんじゃないか」

ロックオンとアレルヤが疑問を口にした。

「確かにそう。これは無茶な作戦よ。本当にヴェーダを奪還しようとしているのならね…」

「ということは、スメラギさん。まさか…」

ラグノスがスメラギの顔を見つめる。

「ええ、そのまさかよ。連邦軍の真の目的はヴェーダを奪還することじゃない。おそらく連邦軍は、ヴェーダを破壊しようとしているわ」

第33話 Another（前書き）

開戦間近の連邦軍とコロニー軍。

ソレスタルビーイング号をコロニー軍に占領された連邦軍は、開戦前に奪還作戦を始めた。しかしその作戦の裏には、ヴェーダを破壊するという連邦軍の思惑が潜んでいた…

第33話 Another

「ヴェーダを破壊する!？」

アレルヤが驚きの声をあげた。

「ええ。コロニー軍は連邦軍が侵入して来ることを想定して、ソレスタルビーイング号の内部に多くの部隊を配置しているわ。ヴェーダをソレスタルビーイング号ごと破壊すれば、情報がイノベイター側に漏れることもないしコロニー軍を一網打尽にすることもできる」スメラギが説明する。

「でもスメラギさん。ヴェーダによる情報統制があるからこそ連邦政府のイノベイター追放政策はうまくいっているんですよ？ヴェーダがなくなれば現政権の存続自体が危ぶまれるんじゃない？」マリーが首をひねった。

「そうだな。ヴェーダがなくなることによるメリットよりも、デメリットの方が大きいと思うぜ」

ロックオンも納得できていない様子だ。

「私も最初はそう思ったわ。この作戦は一見連邦軍の損にしかないように思える。でもある可能性を考慮すれば、連邦軍が大きな得をする作戦よ。私はそれを考慮するのが正しいと思うわ」

「ある可能性？」

スメラギの言葉にはほ全員が首をかしげた。

「まさかとは思いますが…もう一つのヴェーダ、ですか？」ラグノスがスメラギに言った。

「さすがね、ラグノス。その通りよ」

「もう一つの…ヴェーダ!？」

全員が驚きを隠せないでいた。

「正確にはもう一つの量子型演算システムね。ヴェーダを調査して得られたデータを使えば、ヴェーダほど大掛かりなものは無理だとしても情報統制を行う程度のものは作れるはず」

「それがもうできている、もしくは完成間近だとしたら…」

「連邦軍は何のためらいもなくヴェーダを破壊できる、か」

フェルトとラッセがスメラギの言葉に納得したように言った。

「そういうことね。でもそれが事実だとしたら、新しい問題が出てくるわ」

「ヴェーダがなくなれば、僕たちが困窮してしまうということですね」

アレルヤがスメラギに言った。

「確かに。今俺たちが武力介入をスムーズに行えているのは、ヴェーダの情報があればこそだからな」

ロックオンが続けた。

「そこでヒクサー。あなたに先月頼んだことなんだけど…」

スメラギはヒクサーに話しかけた。

「彼は協力すると言っています。もうまもなくここに到着する予定です」

ヒクサーは少し感慨深げ、もしくは安堵したような表情で答えた。

「ならその件はヒクサーに任せるわ。他のみんなは準備に取り掛かって。すぐに出撃することになるわ」

「了解」

トレミーのクルーたちは部屋を出て行った。

ソレスタルビーイングの秘密基地から離れること十数キロ。基地に向けて航行する一隻の宇宙船があった。CBS-68 エウクレイ

デス。ソレスタルビーイングが保有する、いや保有していた船で、
今はある男のものになっている。

その男は宇宙船の内部に設置されている大きな球体を見ていた。

「まさかあいつがプトレマイオスのマイスターになるとはな。あげ
やあげやあげや」

船の中にその男の特徴的な笑い声が響いた。

第33話 Another（後書き）

最後に出てきた男は外伝を読まれた方なら誰なのかわかると思いますが。

感想、リクエストお待ちしております。

第34話 移行（前書き）

連邦軍が実行に移そうとしているヴェーダ破壊作戦。

それを防ごうとするソレスタルビーイング。そんな中ヒクサーは今回のミッションで重要な鍵を握っているフォン・スパークと再会した。

第34話 移行

「超望遠カメラが連邦軍艦隊を捕捉したです」

「これよりミッシェンを開始します。ガンダム発進！」

ミレイナの報告を聞いたスメラギが指示を出す。

「トレミー、第一、第二、第三ハッチオープン」

フェルトの声と同時にトレミーの三つのハッチが開き、カタパルトが姿を現した。

「ハルトトリペア、アレルヤ・ハプティズム、ソーマ・ピールス。

目標へ飛翔する！」

「サバーニヤリペア、ロックオン・ストラトス。狙い撃つ！」

「ラジエルアラ、ラグノス・セラード。出る！」

三機のガンダムは数か月前に戦いを繰り広げた戦場に再び向かって行った。

その頃基地に残ったヒクサーは、先程到着したばかりの船から降りてきた一人の男と向き合っていた。その男の名はフォン・スパーク。元々はソレスタルビーイングのサポート組織、フェレシユテに所属するガンダムマイスターであったが、後に脱退。ソレスタルビーイングがアロウズとの戦いを始めた頃から現在まで独自行動を取っていた。

「フォン・スパーク、協力に感謝するよ。」

ヒクサーがフォンに言った。

「俺にはやりたいことができたんだ。そのことにはこいつはもう必要ねえんだよ」

フォンがぶっきらぼうに言った。

「やりたいこと？きみのことだから突拍子もないことなんだろうが」
「心配すんな。もう地球には帰ってこねえよ」
二人とも少し笑みを見せた。

「俺はもう行くぜ。アストレア以外は全部置いてってやるよ」
「わかった。ありがとう」

フォンは宇宙船の外に立っている深紅のモビルスーツ、G N Y - 0 0 1 F ガンダムアストレア Type - F に乗り込み基地から去っていった。

「さて、僕の仕事にとりかかるか」
アストレアを見送ったヒクサーは、フォンが残っていた宇宙船に乗り込んだ。

「スメラギさん。ヒクサーが作業を開始したそうです」
フェルトがスメラギに報告する。

「わかったわ。ミレイナ、マイスターたちの状況は？」

「予定通りポイント F 3 4 で待機中です」

ミレイナが答える。

「今回はかなり危うい作戦だよな」

ロックオンが他のマイスターに通信を送る。

「ああ。連邦軍だけを攻撃すればコロニー軍に協力することになるし……」

「かといってコロニー軍を攻撃すればヴェーダを破壊される危険が増す」

アレルヤとマリーがそれに答える。

「だからヒクサーが今基地で頑張ってるんじゃないか。あいつを信じよう」

ラグノスが瞳を金色に光らせながら言った。

「レベル7へのアクセス完了。移行データ確認。ターミナル間のリンク状態正常」

ヒクサーも瞳を金色にし、作業を黙々と行っていた。

ヒクサーが今行っているのは、ヴェーダのデータを移行する作業である。移行先はフォンが持ってきた宇宙船の内部に設置してある、ヴェーダのメインターミナル。もともとは月にあったもので、約10年前ソレスタルビーイングが武力介入を行っていた際に稼働していたもので、リボنز・アルマークがソレスタルビーイング号のターミナルに移した後はフォンが使用していた。

スメラギが立案したのは、連邦軍が破壊する前にヴェーダのデータをこちらへ移すという作戦である。

「これより蓄積データの移行作業を開始する」

第34話 移行（後書き）

ガンダムアストレアとは、エクシアなど第三世代機開発のためのデータ収集を目的として建造された、第二世代ガンダムの一機です。フォンが乗っている機体は、リボンスらにより複製された機体を改修したもので、オリジナルはソレスタルビーイングが保有しています。

第35話 バースト（前書き）

連邦軍はヴェーダを奪還するように見せかけてヴェーダ破壊するための作戦を始めた。奪還を防ぐための布陣で迎え撃つコロニー軍。あくまでも戦いを防ごうとするソレスタルビーイングは、ヴェーダのデータを移行させるというミッションに取り掛かった。

第35話 バースト

ソレスタルビーイング号から少し離れたポイントで、二機のガンダムが多数のジンクス？と向き合っていた。サバーニヤリペアとハルトリペアである。

「まったく連邦軍も大したことをやってくれるな」

ロックオンがため息交じりに言った。

「ごちゃごちゃ言ってる暇はねえぞ。来やがった」

ハレルヤの言葉通り、ジンクス？が二機に向かって来た。

一方ラジエルアーラは、ソレスタルビーイング号の周辺に展開しているコロニー軍に近づいていた。

（今我々ソレスタルビーイングが最善と思われる作戦を実行中だ。

むやみに戦闘を行わないでほしい）

ラグノスが脳量子波でイノベーターたちに呼びかける。

「うっ……」

その瞬間ラグノスは苦痛の表情になった。

「この感情…怒り、憎しみが一気に流れ込んできた」

イノベーターたちは、連邦軍が攻めてきたのだからそれを排除するのは当たり前だと叫んでいた。

「確かに…今回はあなたたちに責任はない。しかしイノベーターの力は他者と解り合わりあうための力だ。決して戦うための力ではない！」

そう叫ぶラグノスの瞳が金色になり、生体認証を行う赤い光がその瞳の上を通り過ぎた。

「トランザムバースト！」

ラジエルアーラから虹色の光が大量に放出された。

「スメラギさん！ラジエルが！」

フェルトが叫んだ。

「そんな…無茶よ、自爆するわ！すぐにやめさせて！」

ソレスタルビーイング号がある方向にできた虹色のボールを見てスメラギは立ち上がった。

ラジエルアーラのコックピットには警告音が鳴り響いていた。

独立稼働している三番目のGNドライヴの干渉でバーストシステムは安定せず、一歩間違えれば機体が自爆する危険性も秘めている。しかしラグノスはそれを無視してイノベーターたちとの対話を試みた。

「くっ…頼む、答えてくれ！」

ラグノスを周りのイノベーターから発せられる大量の悪意を秘めた脳量子波が襲った。ラグノスはまるで怒り狂った無数の人間に囲まれているような感覚に陥っていた。

「あれは…」

ロックオン、マリーとともにジンクス？部隊と戦っていたアレルヤは、トランザムバーストの光に気付き心配そうな声を出した。

「アレルヤ、マリー、行け！」

ロックオンが呼びかけた。

「ロックオン！」

「あいつがやられたら元も子もないだろ！俺のことはいいから早く！」

「わかった。すぐ戻る」

ハル・トリペアはラジエルアーラのもとへ急いだ。

それを追いかけてようとするジnkクス？を、プロトマルチビットが防いだ。

「ここから先には行かせねえ。トランザム！」

ラグノスは耳から入ってくる激しい警告音と、脳に直接響く脳量子波の叫びに耐えながら必死で呼びかけを続けていた。しかし一向にイノベーターたちの感情は収まることはなかった。

そしてラジエルアーラの両脚が爆散した。機体がドライヴの干渉に耐えられなくなったのだ。

ラグノスは意識が飛びかけていた。

その時だった。ラグノスを取り巻く大量の意識の波を貫いてくる一つの意識があった。その意識は他のものと同じく脳量子波により伝えられたものだったが、何かが違った。人間の意識ではなかったのだ。

「エル…ス」

ラグノスはそばに浮かぶ巨大な花を見つめながら呟くと、意識を失った。

第36話 恨みの花火（前書き）

ヴェーダを破壊するためにソレスタルビーイング号に進攻する連邦軍。それを迎え撃つコロニー軍。両者の戦いを止めようとするラグノスは、自爆の危険を覚悟でトランザムバーストを発動させた。しかしイノベーターたちに彼の声は届かなかった…

第36話 恨みの花火

アレルヤは、虹色の粒子を放出しなくなりさらに両脚を失ったラジエルアーラにハルトリペアを近づけた。

「ラグノス、ラグノス！」

アレルヤが必死に呼びかけたが返事はなかった。

コロニー軍のヴァン部隊は二機のガンダムのそばを通り過ぎて行った。

「マリー、操縦は任せる」

「わかったわ」

アレルヤがラジエルアーラに乗り込もうとしたとき、二人は同時に何かを感じたかのような表情になった。

「何だ？」

「脳量子波？」

しかしその脳量子波を感じたのは一瞬で、その後は何も起こらなかった。

アレルヤは少し不思議そうな表情を見せつつも、ラジエルアーラのコックピットに入って行った。

「気絶している…マリー、トレミーに連絡を」

ハルトリペアに残ったマリーに通信を送ると、アレルヤはラジエルアーラを自動操縦に切り替えトレミーへの帰還ルートに入らせた。

アレルヤが機体から出ようとしていた時、ラグノスはわずかに意識を取り戻し薄目を開けた。アレルヤはそれに気付かなかったが、ハッチから出る直前にラグノスの方を振り向いた。再び薄れ行く意識の中でラグノスの目に映ったのは、金色に輝く二つの瞳だった。

「あれは…コロニー軍」

ジンクス？を牽制していたロックオンは、近づいてくるヴァン部隊に気付いた。

気付いたのは連邦軍も同じで、後方にいた艦隊からジンクス？が発進した。

「お前ら、いい加減にしろ！」

「ロックオン、大丈夫かい？」

その時ハルトリペアが戻ってきた。

「ラグノスは？」

「自爆は免れたようだけど機体は大きく損傷を。ラグノスは気絶していた。今トレミーに向かわせている」

「アレルヤ！あの機体が来るわ！」

マリーが叫んだ。アレルヤが増援のジンクス？部隊を見ると、脳量子波対応型のジンクス？、ジンクス？・ドラウヴンがその中にいた。他にも近接戦闘型のユニコーン、砲撃戦闘型のバジリスクがそれぞれ一機ずつヴァン部隊に向かっていった。

「アレルヤ、行くぞ！」

「ああ！」

二機のガンダムは二つの勢力の真ん中に突撃して行った。

「ラジエルを回収したです。セラードさんを医療カプセルへ搬送するです」

トレミーのブリッジでミレイナが報告する。

「コロニー軍が連邦軍迎撃のため進攻。それに対し三機のカスタムジンクス？が現れました。サバーニヤとハルートの介入行動に入りました」

フェルトは戦況をスメラギに伝える。

「三機？カスタムジンクス？は四機のはず。今日はいないなんてことは考えられないし…まさか！」

スメラギが自分が思いついた考えをまだ信じられずにいた時、ブリッジの扉が開いた。

「ラグノス！？」

「おい、大丈夫かよ」

ブリッジに入ってきたラグノスを見て、スメラギとラッセが心配そうな表情で言った。

「大丈夫です。それよりスメラギさん、さっきの声からして何か気付いたんですね。説明してもらえますか」

「わかったわ。私の考えは…」

スメラギの説明を聞き終わったブリッジの面々は、言葉が出なかった。

「そんな…」

「まじかよ」

「驚きです…」

ラグノスも驚いていたが、スメラギにこう告げた。

「…僕が行きます」

「えっ？」

「予備の機体を使います。今沙慈とルイスが移設作業をしてくれています」

ラグノスはそう言うとブリッジをあとにした。

「まもなく作戦を開始する。各員最終準備に入れ」

ジンクス？・スザクに乗ったバリー・ゴートは、自分と同じように

小惑星に身を隠している周りの部下たちに通信を送った。

「異星人に洗脳された裏切り者どもよ。われらの恨みのこもった花火を今こそ打ち上げてやるぞ」

バリーは怪しい笑みを浮かべ、自身が乗るスザクの真後ろにいる五機のジンクス？をモニター越しに見た。そのジンクス？はそれぞれ二発ずつ両手にミサイルを装備していた。そのミサイルにはあるマークが印されていた…

第37話 能天使（前書き）

ヴェーダ破壊作戦を遂行する連邦軍は、密かに別働隊を配置してその機会をうかがっていた。

一方イノベーターとの対話に失敗したラグノスは、ある機体で再び戦場に赴くのだった。

第37話 能天使

「第三デツキ、ハッチオープン。カタパルトボルテージ上昇。機体をフィールドに固定。射出タイミングを譲渡します」

フェルトの声がコックピットに響く。

「了解。ラグノス・セラード、出る！」

トレミーからソレスタルビーイング号へ向け緑の光が飛び出して行った。

その少し前、ロックオン、アレルヤ、マリーはジンクス？とヴァンの戦闘に介入していた。

ドラウヴン、ユニコーン、バジリスクのカスタムジンクス？三機を中心として戦闘を行う連邦軍だったが、コロニー軍はこれまでの戦いからその特性を学び取っていた。ガンダムの介入もあり戦いは互角、もしくはコロニー軍が少し押していた。

「イノベイターもなかなかやるじゃないか！」

ロックオンが言った。

「マリー、どうしたんだい？」

アレルヤが前の座席で様子がおかしいマリーを心配して声をかけた。

「連邦軍の動き…いつもより積極的じゃないと思って」

「確かに…どんどんソレスタルビーイング号から離れてるみたいだね」

アレルヤは首をかしげた。

「少佐。全部隊安全圏まで撤退完了しました」

「よし。これよりミッションを開始する」

小惑星に身をひそめていたバリー・ゴートは、部下からの報告を聞くと号令をかけた。
カスタム機を含め六機のジंकウス？が、静かにソレスタルビーイング号の方へと向かって行った。

その時マイスターたちに通信が入った。スメラギからだ。

『三人とも少し聞いて』

「何かあったのか？」

ロックオンが問いかけた。

『ええ、まだ推測の域を出ていないんだけど…』

「核！？」

『この前ヒクサーが、今は稼働していないはずの工場が稼働しているのをヴェーダが捕えたと言っていたわ。そこは21世紀にアメリカが核兵器が製造していた工場で、連邦軍の車両が出入りしたのを確認したそうよ』

スメラギが言った。

「まさか核兵器を使うなんて…」

マリーが呟いた。

人類の負の遺産ともいえる核兵器は、日本のナガサキに原子爆弾が投下されて以来約670年間一度も使われなかった。21世紀に核戦争が勃発する危険性が何度かあったものの、人類はそれを回避し現在宇宙を含む全ての地球圏で原子力を使用することが国際条約で禁止されている。

「すぐに止めない！」

アレルヤが叫んが、スメラギが制止した。

『待つて！攻撃部隊は何らかの対レーダー策を講じてるみたいで、

どこから攻撃してくるか全くわからないの。今はラグノスに任せて、あなたたちはまずコロニー軍へこの事実を伝えて頂戴」

「ラグノスが出たんですか？」

アレルヤがスメラギに尋ねた。

「そうよ。ラグノスが自分が行くと言って…」

順調にソレスタルビーイング号へと向かっていたジンクス？の核攻撃部隊だったが、機体のレーダーが接近してくる機影を捉えた。

「あの機体は…」

そう呟くバリーの視線の先には、右手に大型の実体剣を装備した青い機体があった。

11年前ソレスタルビーイングの名を一躍世界に知らしめた機体、ガンダムエクシアが。

第37話 能天使（後書き）

エクシアは12話に登場した、エクシアリペア？です。予備機として地上から運び出されたものです。

第38話 一閃（前書き）

ソレスタルビーイング号へ近づく連邦軍の核攻撃部隊。彼らが攻撃
へ向かおうとしたところに、ラゲノスに乗るガンダムエクスシアリペ
ア？が現れた。

第38話 一閃

「こちらの作戦が読まれていたのか：まあいい。護衛機は私とともにガンダムを引き付ける。その間に攻撃機はミッションを遂行しろ」
バリーが指示を出した。

「了解」

バリーの指示通り、ミサイルを両手に持った五機の攻撃機は進路を変えてソレスタルビーイング号に向かって行った。そしてスザクを先頭に五機の護衛機がエクシアリペア？に向かって来た。

「ガンダムエクシア、目標を撃砕する！」

ラグノスはそう叫ぶとGNソード改二式を展開した。

護衛機の一機がビームサーベルを抜き放ってエクシアリペア？に攻撃を仕掛けて来たが、エクシアリペア？は華麗な動きでそのジंकウス？を一閃した。

「何だあの動きは！？ライフルで応戦しろ！無暗に近づくな！」
それを見ていたバリーは残った護衛機に指示を出した。

その言葉に従ってジंकウス？はビームライフルでエクシアリペア？に攻撃を仕掛けた。

しかしエクシアリペア？は大量のビームをいとも簡単に避け、一機のジंकウス？に高速で近づくとGNソード改二式で真つ二つにした。

「トランザムを使え！何としてもあいつを落とすんだ！」

バリーは焦りからか語気を荒げて叫んだ。

スザクを含む三機のジंकウス？はトランザムを始動させると、高速でエクシアリペア？の周りを飛び回り始めた。

するとエクシアリペア？は動きを止めた。

「やはりこのスピードにはついてこれないか！行くぞ、突撃！」
バリーが他の二機に合図を出すと、三機のジンクス？は一斉にエクシアリペア？に突撃した。

その瞬間エクシアリペア？は両腰のビームサーベルをダガー状態で投げた。

「何！？」

バリーが驚きの声を上げたのもつかの間、ビームサーベルはスザク以外の二機のジンクス？のコックピットに正確に命中した。

そしてエクシアリペア？は真後ろから突撃してきたスザクをかわすと、GNソード改二式で斬り裂いた。

「くそつ、こんな短時間で全滅とは…」

バリーは母艦へと帰還するコア・ファイターの中で悔しさをかみしめていた。

「ラグノスは大丈夫かな…？」

アレルヤは心配そうに呟いた。

「あいつなら大丈夫さ」

ロックオンが自信を持って言った。

サバーニヤリペアとハルトトリペアはコロニー軍へ真実を伝えたあと、ラグノスから送られてきた攻撃機の予想到達地点へ急いでいた。すでに連邦軍はモビルスーツ隊によるコロニー軍への直接の攻撃はやめて、まるで牽制するかのようには艦隊をコロニー軍艦隊の正面で待機させていた。そのため真実を知ったコロニー軍も下手に動けず、両者はにらみ合いを続けていた。

「来たわ！」

マリィが叫んだ。

ラグノスの情報通りのポイントに五つの赤い光が現れた。

「よし、行くぞ！」

ロックオンの言葉で、二機のガンダムは赤い光へ向けてスピードを上げた。

第39話 集結（前書き）

まもなく連邦軍が核ミサイルによるヴェーダ破壊作戦を遂行しよう
としていた…

第39話 集結

「まもなく攻撃地点に到達します」

一人の連邦軍兵士が母艦に報告した。彼が乗っているのはジンクス？の機体各所のハードポイントを増設し、より多くの武装を搭載できるようにした特殊攻撃型である。今回は両腕のハードポイントに一つずつミサイルを装備している。人類史上最悪の力、核の力を宿したミサイルを。

「了解した。攻撃地点に到達次第攻撃を開始せよ。幸運を祈る」
母艦から通信が帰ってきた。

それを聞いた五機のジンクス？特殊攻撃型のパイロットたちは、前進を続けた。

その時ノーマル機よりも強化されているレーダーが、二つの機影を捉えた。

「またあいつらか…しつこい奴らだ！」

そう叫ぶパイロットは猛スピードで接近する二機のガンダム、ガンダムサバーニヤリペアとガンダムハルトリペアを見据えていた。

トレミーのブリッジでは、オペレーターの二人が忙しそうに働いていた。

「ヒクサーからです。現在作業の73%が完了。しかしレベル7の移行作業が思ったより時間がかかっているそうです」

「サバーニヤとハルトリが、連邦軍の攻撃隊にまもなく接触するです。セラードさんもそちらへ向かっているです」

フェルトとミレイナがスメラギに報告した。

「わかったわ。ヒクサーには作業を続けるように言って。マイスタ

「たちにはミサイルへの対処には十分注意するように伝えて頂戴」
「了解」「はいです」

スメラギの指示に二人が返答した。

トレミーから数キロ離れたところに、光学迷彩で姿を隠している艦隊がいた。

その艦隊の旗艦にあたる、ナイル級改戦艦のブリッジでもオペレーターたちが忙しく動いていた。

「司令。光学カメラが連邦軍の攻撃隊を捕捉しました。近くにはガンダム姿もあります。それと司令の予想通りのポイントに、いくつかモビルスーツらしき影を確認しました」

「了解した。これより作戦を開始する。モビルスーツ隊に伝えよ」

サーガ司令官、カティ・マネキンは部下に指示した。

「いよいよ初陣ですね司令。機体の整備は万全です」

「できれば迎えなくなかったがな…」

カティはビリーの言葉に軽いため息をつきながら答えた。

さらにその艦隊から数キロ離れたところには、光学迷彩を展開しているモビルスーツがいた。

その光学迷彩の隙間からわずかに漏れ出ているのは白いGN粒子。

以前ラグノスの目の前に現れた謎のモビルスーツだ。

『戦闘行為確認。武力介入開始』

コックピットに電子音が流れた。

そこからはるかかなたにある木星。ここにも光学迷彩を使って姿を隠しているものがある。GNドライブ建造船。ソレスタルビーイン

グが使用している太陽炉建造用の施設である。

しかしもう一つ光学迷彩を展開している船があった。それは内側から緑色の光を発する機体を射出すると木星の方へ進路を向け、そのまま木星に墜落して爆発した。

第39話 集結（後書き）

タイトル通り、いろんな人や機体が一同に集まってきました。
感想、リクエストお待ちしております。

第40話 参上(前書き)

連邦軍の核攻撃部隊によるヴェーダ攻撃作戦に対し、様々な勢力が
集結していた。

第40話 参上

『モクヒヨウホソク！モクヒヨウホソク！』

ガンダムサバーニヤリペアに搭載されている二体のハロが叫んだ。機体のスクリーンには核ミサイルを両手に持った、五機のジンクス？特殊攻撃型が映し出されていた。

「連邦軍も迷惑なもんを使ってくれたもんだぜ」
ロックオンがぼやく。

『スメラギさんからの指示が届いた。ミサイルの扱いには十分注意するようにと』

アレルヤが通信を送ってきた。

「了解だ。ラグノスもこっちに向かってきてるみたいだし、とつとと片付けようぜ。ハロ、スナイパービットだ！」

『リヨウカイ！リヨウカイ！』

「行くぜピーリス！」

「了解！」

マイスターたちの声とともに、サバーニヤリペアからスナイパービットが展開され、ハルトリペアが六つ目になった。

「今回は乱れ撃つのは危ないからな…狙い撃つぜ！」

ロックオンがそう言っていると、スナイパービットから一斉にビームが放たれた。そのビームは正確にジンクス？の頭部を狙っていた。命中したとロックオンが思った瞬間、全てのビームがはじかれた。ジンクス？がGNフィールドを展開したのだ。

「何！？」

「これならどうだ！」

ハレルヤが叫ぶと、ハルトリペアがソードライフル改をGNキャ

ノンに合体させて強力な照射ビームを放った。そのビームは三機のジンクス？をすっぱり飲み込んだ。

「さすがにこれは防げないだろ！」

ハレルヤは自信満々に言ったが、目の前の光景を見ると言葉を失った。

「まさか…無傷！？」

マリーが言ったように、ジンクス？はハルトリペア最大の攻撃をも防ぎ切ったのだ。

「そんなビームではこの機体に傷一つつけることができないぞ！」
ジンクス？特殊攻撃型のパイロットの一人が自信満々に叫んだ。

今回はGN粒子を利用した火器を装備していないため、強力なGNフィールドが展開できるのである。

「くそつたれ…なんて防御力だよ」

ロックオンが唇をかんた時、ジンクス？の後方から赤い光が超高速でやって来た。

「何だ？」

その場にいた全員がその光の方を見た。そしてその光の正体に気付いた時にはすでにジンクス？の一機がミサイルを残して大破していた。

「さすがだね」

そう言うアレルヤが見ていたのは、トランザムを起動させGNソード改二式でGNフィールドを一気に突破したエクシアリペア？だった。

「アレルヤ、マリー！ソードライフルとシザービットを使い！」
ラグノスが二人に指示を出した。実体剣であればGNフィールドを突破できるためだ。

「わかった！マリー！」

「了解！」

シザービット改がGNフィールドに突撃し、GNソード改二式とGNソードライフル改がフィールドごとジンクス？を切り裂く。そしてフィールドが解除されたところをスナイパービットが的確に狙い撃つ。核ミサイルは腕ごと切り取られ、発射されない。

ガンダムはジンクス？特殊攻撃型を圧倒していた。そして最後の一機になった。

「これで終わりだ！」

ラグノスがそう叫び、GNソード改二式を振り下ろした。

核ミサイルは全て安全装置がかけられたまま回収された。

「ミッション成功だな」

ロックオンが安堵のため息をついた時だった。ラグノスが何かを感じ取った。

「これは…しまった！」

「どうしたんだい？」

息をのんだラグノスにアレルヤが尋ねた。

「ソレスタルビーイング号の向かい側にモビルスーツがいる。攻撃隊は五機だけじゃない！」

ラグノスが指定した位置には、ジンクス？特殊攻撃型とノーマル機が二十機ずついた。

「ソレスタルビーイングはうまく引っかけたようだ。トランザムを使ってももう間に合わないぞ」

この部隊の指揮官が笑みを浮かべつつ言った。

「全機、攻撃準備を…」

指揮官がそう言った瞬間、オレンジ色の粒子ビームがジンクス？部

隊に向けて大量に放たれた。

ジンクス？は回避行動を取ったが、特殊攻撃型二機とノーマル機三機が大破した。

「あれは…ブレイヴ！？」

指揮官の言葉通り、攻撃したのは何十機ものブレイヴだった。しかし指揮官が知るブレイヴとは少し形状が違った。

そのうちの二機のコックピットの中で男が叫んだ。

「幸せのコーラサワー、ただいま参上！！」

第40話 参上(後書き)

更新が遅くなってすいません。
テストが終わったらまた更新頻度を上げていきます。

第41話 完全共闘（前書き）

連邦軍の核ミサイル攻撃隊を撃破したガンダムだったが、別の場所から第二の攻撃隊が侵攻を始めた。

完全に不意をつかれたマイスターたち。阻止は不可能かと思われたが、カティ・マネキンが率いるサーガのブレイヴ？が現れた。

第41話 完全共闘

「ようやく俺たちの出番だぜ…大佐のためにやってやろうじゃないか！」

サーガのパトリック・マネキン大尉は、乗機であるブレイヴ？のcockピットで大きな声をあげた。

「大佐じゃない、司令だ！」

すると突然怒鳴り声が通信に乗って送られてきた。

「き、聞いてたんですか…」

パトリックは顔面蒼白になった。

「当たり前だ…馬鹿なことを言っている暇があったらさっさと仕事にとりかかれ！」

「は、はい！ブレイヴ第二中隊、俺に続け！」

「了解！」

パトリックが率いる第二中隊を始め、ブレイヴ？全機がいきなり現れた彼らに驚き動きを止めているジンクス？部隊へと向かって行った。

一方マイスターたちは、トランザムを使って大急ぎで第二攻撃隊がいるポイントへ向かっていた。

「まさか攻撃隊すらも囷だったとは…連邦軍もやってくれる」

ラグノスは顔に焦りの表情を浮かべつつ呟いた。

「見えたぞ！」

その時ロッキオンがジンクス？を見つけて叫んだ。

「早く止めないと…」

「待ってアレルヤ。何か様子がおかしいわ」

マリーがアレルヤの言葉を制した。

「何だあの機体は？コロニー軍か？」

「あれは…ブレイヴ？」

ロックオンとラグノスがブレイヴ？を見て首をかしげた。

「やっと来たか、ガンダム！」

パトリックがガンダムを見て少し嬉しそうに叫んだ。

「大佐！ガンダムを視認しました」

『司令だ…まあいい。この通信をガンダムに転送しろ』

「了解です」

パトリックは通信をガンダムへ転送した。

「有視界通信？ブレイヴからか」

通信を受け取ったのはラグノスだった。

『こちらはサーガ司令官、カティ・マネキンである。ソレスタルビーイングの指揮官にこの通信のチャンネルにアクセスするように言ってもらいたい』

「サーガ？聞いたことないな。でも確かマネキンとかいう名前はスメラギさんが言っていたような…」

ラグノスはカティの言葉通り、トレミーへ向けて通信を送った。

「カティ！」

『久しぶりだなクジヨウ。ELSとの戦い以来か』

ラグノスからの通信を受けたスメラギは、カティとモニター越しに対面した。

「あなた、連邦軍じゃないの？」

『今は違う。私は連邦軍を抜け、新たな軍を組織した。連邦軍でもコロニー軍でもない。ノーマルとイノベーターとの共存を目指し戦う軍隊、サーガを』

「サーガ？」

スメラギの言葉にカティは軽く頷いた。

『そうだ。詳しいことはまた後で話す。今はそれどころではない。連邦軍は核ミサイルの攻撃部隊をもうひとつ用意していた。現在我々サーガのモビルスーツ部隊が交戦中だ。そちらのガンダムも三機加わっている』

「わかったわ。さっきマイスターたちにミッションプランの変更を伝えたわ。そちらの戦術は？」

『言わなくてもわかるだろう？』

カティが微笑を浮かべた。

「そうね。フェルト、ミレイナ。マイスターたちに通信を。今回のミッションはサーガのモビルスーツと協力して行くと」

「はい」「はいです」

『これほど完全に共闘するのは初めてか？』

「ええ。A E U時代にもなかったものね」

スメラギ・李・ノリエガことリーサ・クジヨウとカティ・マネキン。数々の因縁を作ってきた二人の天才戦術予報士は、ついに完全な共同作戦を実行することになった。

第41話 完全共闘（後書き）

ブレイヴ？の機体解説はもう少し後の方でさせていただきます。

第42話 金と銀そして青（前書き）

連邦軍による核ミサイルを使ったヴェーダの破壊作戦を防ぐべく奮戦するマイスターたち。そこにサーガが現れ、ガンダムとの共闘作戦を開始した。その一方…

第42話 金と銀そして青

ソレスタルビーイングとサーガが連邦軍の攻撃部隊が戦闘を行っているポイントからソレスタルビーイング号を挟んで反対側の場所。ここでは連邦軍とコロニー軍がにらみ合いを続けている…いや、つい先程まで続けていた。今はあたり一面に大破したモビルスーツの残骸が散らばっていた。

「くそつ、何だあの性能は！」

「たった二機に双方の大部隊が壊滅させられるとは…」

「あれはガンダムか？」

大破した機体のコックピットから連邦軍とコロニー軍の兵士たちは、大量の残骸でできた円の中心に静止している二機の機体を見つめていた。その二機は突然この宙域に現れ両軍の機体を一蹴したのだ。

一機は他のモビルスーツよりも一回り大きい機体に金色と銀色の派手なカラーリング、もう一機は背中から両肩の上へと伸びるパーツに接続された、太陽炉と思われるパーツが特徴的な青い機体。

金と銀の機体は両軍の兵士にとって初めて見るもの尽くしだった。まず機体が放出しているGN粒子と思われる粒子。青い機体が緑色の粒子を放出している一方で、金と銀の機体は両肩から大量の白い粒子を放出していた。さらに機体のフォルムや搭載している武装もこれまで見たこともないようなものであった。

しかし青い機体の方にだけ見覚えがあった。というよりも見覚えがある機体に酷似していた。

「あの機体、二個付きガンダムじゃないか？」

「そう言えば、似ているな」

連邦軍の兵士がそんなやり取りをしていた。

肩に機体から独立して配置された二基のGNドライブ、そしてツインアイと額のアンテナ。

まさにその風貌は、彼らが言うように六年前にアロウズとソレスタルビーイングの戦いの際に活躍した通称二個付きガンダム、ダブルオーガンダムにそっくりだった。外見で違ふところといえば、左肩のGNドライブに巨大な剣を装備している点だ。

『作戦終了。メテオラ、帰還する』

「了解した。核ミサイルはガンダムマイスターたちが何とかするだろう。ガンダムヴァランタ、ミッシェンコンプリート。帰還する」

金と銀の機体、メテオラから送られてきた通信は人の声ではなく、電子音によるものだった。しかし青い機体、ガンダムヴァランタのパイロットはそれを気にすることもなく答えた。

周りの兵士たちがあつけにとられている一方で、謎に包まれた二機は高速でその宙域から離脱していった。

第42話 金と銀そして青（後書き）

感想、リクエストお待ちしております。

第43話 C e l e s t i a l B e i n g & a m p ; S A G A (前書き)

核ミサイルでヴェーダを破壊しようとする連邦軍に対し、ソレスタルビーイングはサーガとともに介入行動を開始した。

第43話 C e l e s t i a l B e i n g & S A G A

「ミッションプランをD56に変更。サバーニヤはビットで敵機を牽制、エクシアとハルーツは近距離で攻撃を」

スメラギがマイスターたちに指示を出すと、三機のガンダムは指示通りにジンクス？部隊に対して攻撃を始めた。

「ミッションプランC12。第一から第四小隊は護衛機の撃破に集中。残りは攻撃機への攻撃を行え」

カティモブレイヴ？のパイロットたちに指示を出す。

「あの機体と一緒に戦うのは初めてなのに、こんなにも連携が取れるなんて… スメラギさんとむこうの戦術予報士は息がぴったり合っているみたいだね」

アレルヤの言う通りガンダムとブレイヴ？は完璧な連携行動を取り、四十機のジンクス？を翻弄していた。

「俺たちも行くぜ！アレルヤ！ピース！」

「ああ！」

「了解！」

ハルーツリペアが加速した。

サバーニヤリペアは接近戦に弱いことをつかれ、護衛機のビームサーベルによる総攻撃を受けていた。

「くそっ…」

ロックオンはホルスタービット改とプロトマルチビットを駆使して、その攻撃を必死に防いでいた。

その時五機のブレイヴ？が現れ護衛機を次々と撃破した。

「今だぜ、緑のガンダム！」

パトリックは十年前の国連軍とソレスタルビーイングの戦いの際に自らが傷つけた緑のガンダムのことを思いながら、サバーニヤリペアに呼びかけた。

「ハロ、マルチロックオンスタンバイだ！」

『『リヨウカイ、リヨウカイ！』』

攻撃が止んだ隙にサバーニヤリペアは全ビットを展開し、ミサイルポッドも全て開放した。

コックピットのモニターに多数の敵機をロックしたマークが表示されると、ロックオンは叫んだ。

「乱れ撃つぜえ！！！」

ラグノスは十数機のブレイヴ？とともに逃げる特殊攻撃型を追撃していた。

護衛機はそれを妨害しようと攻撃を仕掛けたが、ブレイヴ？が防いだ。そしてブレイヴ？のうち何機かが、護衛機に向けて鋭利な刃物のようなものを飛ばした。

（行け！ファング！）

ブレイヴ？がそれを飛ばす直前、ラグノスの脳に響いてくる声があった。

「あれは…ファングか。それに今の声、イノベーターがいるのか？」

ラグノスの言葉通り、サーガはノーマルとイノベーターが混在する軍隊であり、その区別なく部隊を編成しているのだ。

ガンダムとブレイヴ？は順調に護衛機の数減らしていたが、特殊攻撃型の数は一向に減らない。特殊攻撃型が形成する強固なGNフィールドの前には、どんな強力な粒子ビームも無力化されてしまう

ためだ。

ブレイヴ？の部隊うちいくつかはカティの指示で実体剣を装備しているものの、実体剣では一機ずつ接近して攻撃するしかない上、護衛機の執拗な妨害のせいでなかなか撃破できないのだ。

「ヒクサー、あとどれくらいで終わりそうだ？」

ラグノスは基地でヴェーダの移行作業を行っているヒクサーに通信を送った。

『今90%完了した。あと少しだ』

「できるだけ急いでくれ」

『わかってる』

ヒクサーとの通信を終えるとラグノスはトランザムを起動させた。周りのブレイヴ？も同様のことをする。機体を赤く染めたエクシアリペア？とブレイヴ？は、赤いGNフィールドの突破に向かった。

第43話 C e l e s t i a l B e i n g & a m p ; S A G A (後書き)

感想やリクエスト、どんどんお寄せください。

第44話 オーバーブースト

ブレイヴ？とエクシアリペア？の必死の攻撃により、ジnkクス？特殊攻撃型は残り五機になっていた。

『こちらブレイヴ部隊。トランザムの限界時間が近づいている！』
「こちらもだ」

ラグノスは額に汗を浮かべながら通信に答えた。

現在ラグノスが乗っているエクシアリペア？は、本来の乗機であり不安定ながらもトリプルドライブシステムを搭載しているラジエルアーラと比べると、GNドライブが二つ少ないため粒子放出量が圧倒的に少ない。

さらに今までは地上に配備されていた予備機であるためトランザムの使用可能時間があまり考慮されずに改良が行われている。

「おそらくあと少しで核ミサイルの発射可能ポイントに到達する。それまでにあと五機を撃破できるか…」

ラグノスが心配そうに呟くと、ともに特殊攻撃型を攻撃していたブレイヴ？の数機が残り七機になった護衛機の攻撃を受けて爆発した。トランザムの限界時間を迎え戦闘力が大幅に低下してしまったブレイヴ？は、護衛機の攻撃になす術なく撃破されていく。

エクシアリペア？は残り少ない貯蔵粒子を使って特殊攻撃型に攻撃していたが、ブレイヴ？を援護する余裕がなかった。

特殊攻撃型は自衛用に実体弾によるバルカンしか装備していないため、エクシアリペア？は一気に距離を詰めてGNソード改二式で切り裂く。それを妨害しようとする護衛機をブレイヴ？が捨て身の突撃で防ぐ。

エクシアリペア？が特殊攻撃型をさらに二機撃破した時、ブレイヴ？の攻撃を避けて護衛機がエクシアリペア？に向かってきた。

相手をしていれば核ミサイルの発射を許してしまう。機体が損傷を受けてでもミサイルの発射だけは食い止めなければ…とラグノスは思った。

その時その護衛機が桃色のビームに貫かれた。

『早く行くんた、ラグノス！』

『あれを止めて！』

『ここは俺たちに任せる！』

アレルヤ、マリィ、ロックオンが護衛機の破壊に当たっていたブレイヴ？の部隊を率いて現れた。

『頼んだぜ、ガンダム！！』

パトリックも叫んだ。

『ラグノス、作業の95%が完了した。今から最終確認に入る』

ヒクサーが告げた。

『わかった。最後まで持ってくれよ…これが最後の手段だ！』

ラグノスがそう言うと、エクシアリペア？のGNDライブが今までよりも大量の粒子を放出し始めた。

オーバーブーストモード。GNDライブに設定されているリミッターを解除し、粒子生産量を極限にまで高めるシステムである。今は失われてしまったエクシアのGNDライブにのみ実装されていたものであるが、現在エクシアリペア？が搭載している、木星の建造船で発見された建造途中で放棄されていたGNDライブにも同様のシステムが搭載されているのだ。

『ガンダムエクシア、目標を撃破する！』

第45話 END（前書き）

ガンダムとブレイヴ？が必死に連邦軍の核攻撃部隊を撃破していた。しかし攻撃可能地点への到達は間近。ラゲノスは切り札、オーバーブリストモードを使った。

第45話 END

エクシアリペア？は残り三機になった特殊攻撃型に突撃した。

早々と一機をしめると、ミサイル発射体勢に移った次の機体もGNフィールドごと斬り裂いた。

その際に最後の機機になった特殊攻撃型は、全速力でエクシアリペア？から離れて行った。

そして核ミサイルを二発同時に発射した。ミサイルはヴェーダが置かれているソレスタルビーイング号目指して真っ直ぐに向かって行った。

「くそっ！させるか！」

ヒクサーから他のマイスターへ転送されているヴェーダ移行作業の進行状況を示す数字は、97%になっていた。

ラグノスはGNフィールドを解除した最後の特殊攻撃型をビームライフルで破壊すると、二基の核ミサイルに向かって行った。

ガンダムサバーニヤリペアとガンダムハルトリペア、そしてブレイヴ？は護衛機を全て撃破した。

「ラグノスは！？」

移行作業進行状況が98%になっているのを確認してからロックオンが言った。

「あそこだ！」

アレルヤがそう言ったのと同時に、ハルトリペアが指を二機がいる場所より少し下側を指した。

ロックオンが目を向けると、そこには二基のミサイルに向かって行くエクシアリペア？の姿があった。

「おい、嘘だろ！」

ロックオンはそう叫ぶと、サバーニヤリペアをその方向へ向けた。ハルトリペアもそれに続いた。

「99%完了。このまま行けば移行が完了する前に、ヴェーダが破壊されてしまう…」

ラグノスは、高速でミサイルを追うエクシアリペア？のcockpitの中でそう呟いた。

「刺し違えてでも、絶対阻止してみせる。人類の未来のために！」そしてエクシアリペア？がビームライフルを二発放った。

ラグランジュ2には一輪の大きな花がある。ELSが作り上げた花だ。そのそばで巨大な爆発が起きた。奇跡的にその爆発にはELSの花も、ソレスタルビーイング号も巻き込まれなかった。

ガンダムマイスター、ロックオン・ストラトス、アレルヤ・ハプティズム、マリー・パーファシーはもう一つ巻き込まれていないものがある。仲間のラグノス・セラードが乗るガンダムエクシアリペア？だ。

「…」

爆発はすでにおさまっていたが、三人とも何も言うことができなかった。cockpitには移行作業が完全に終了したことを示す100%の数字が映し出されていた。

「ラグノス…」

基地で移行作業を完了させたヒクサーはモニターに映し出された爆発を見ていた。ラグノスの無事を信じながら。

トレミーにいるメンバーも言葉を失っていた。

「そんな…ラグノスが…」

スメラギが呟いた。ミレイナとフェルトは涙を浮かべていた。

その時オペレーター席の端末が音を發した。

「これは…スメラギさん！エクシアの反応です！ラグノスの生体反応もあります！」

フェルトがそう言うブリッジの面々は胸をなでおろした。

「ほんとか!？」

ロックオンはトレミーから送られてきた通信に喜びの表情を浮かべた。

『ロックオン、見えた!』

アレルヤがそう言ったので、先ほどまで爆発が起きていた場所を見るとそこには全身に損傷を負ったエクシアリペア?がいた。

二機のガンダムはすぐにエクシアリペア?のもとへ向かった。

両手と両脚は失われ、武装も全てなくなっていたが、ラグノスは無傷だった。

「よく無事だったね」

『ああ。ミサイルが爆発する直前に、生産されるGN粒子を全てまわしたGNフィールドをシールド表面に形成したんだ。なんとか防げたよ。それに何かが僕を守ってくれた。おそらくELSが…』
アレルヤの言葉にラグノスが答えた。

『みんな。よくやってくれたわね、お疲れ様。トレミーへ帰還して
ラグノスを医務室へ運んでもらえる？』

そこにスメラギから通信が送られてきた。

「了解」

マイスターたちが返事をした。

ヴェーダの破壊は寸前のところで免れたのだ。

第45話 END（後書き）

ようやくヴェーダ破壊作戦の話が終了しました。

タイトルは「END」ですが、別にこの小説自体がおわったわけではないですwww

感想などお待ちしています。

第46話 それぞれの望み（前書き）

連邦軍が核ミサイルによるヴェーダ破壊作戦を実行した。ラグノスの活躍でヴェーダの破壊は免れたが、ついに恐れていた事態に発展しようとしていた。

第46話 それぞれの望み

ソレスタルビーイングの秘密基地にあるブリーフィングルームでは、主要メンバーたちが話し合いを行っていた。

「核ミサイルが発射される十分ほど前に、連邦政府のネットワークが完全にヴェーダのリンクから外れました。一応新しいネットワーク網に侵入できないか試してみましたが、ブロックされました。おそらく新しい量子型演算システムとリンクしたのかと」

「そう…これで連邦軍の動きは大まかにしかわからなくなるということね」

「はい」

ヒクサーがスメラギに報告した。

「スメラギさん、コロニー政府が会見を始めるようです」

フェルトの言葉に全員がモニターを見た。

『…今回の事件で連邦政府が核兵器を使ったのは紛れもない事実です。これは我々コロニー政府およびイノベーターに対する凶悪な武力行使と見なさざるを得ません。これに対しコロニー政府は積極的自衛権を行使し、イノベーターへの脅威を取り除くことを決定しました…』

コロニー政府の報道官は画面に向かって昨日起きた事件の詳細を述べ始めた。

「ついに始まるのか…」

ロックオンがモニターを見つめたまま呟いた。

「連邦政府は何か言っていないのか？」

「まだ何の動きもないです」

ラグノスの質問にミレイナが答えた。

「連邦政府も強気の対応をするでしょうね」

「そうね。一番なつて欲しくなかった状況だわ」
アレルヤにスメラギが賛同した。

「だがなつてしまった。ならば我々がすべきことはもう決まっているのではないか、クジヨウ？」

サーガの代表として参加しているカティが言った。

「…そうね。みんな、いいわね？」

「はい」

スメラギが呼びかけるとカティ以外のメンバーはブリーフィングルームから出て行った。

「すまない。無理やり駆り立てたような形になってしまったな…」

ラッセが最後に出て行くとカティが口を開いた。

「気にしないで。みんな覚悟は出来てるわ」

スメラギは自分も覚悟を決めたように言った。

「ヒクサー、どうした？」

ロックオンが少し肩を落としているヒクサーに声をかけた。

「ヴェーダのリンクから外れた連邦政府のネットワーク、つなが直すことができたかもしれない。でも僕にはできなかった…これから戦いに大きな影響を与えるのは確実だ」

「いいじゃねえか、別に。コロニー政府はまだヴェーダとリンクしてるわけだし、それに何よりもお前は一人で戦ってるんじゃない。俺達がいる」

ロックオンはヒクサーの背中を軽く叩くと自分の部屋へ入って行った。

自室に戻ったラグノスはモビルスーツドッグへ行こうともう一度部屋を出た。廊下を歩いていると目の前の扉が開き、マリーが飛び出てきた。

「どうしてわかってくれないの！あつ……」

マリーはラグノスと鉢合わせてしまい、恥ずかしそうにうつむいた。

「マリー！」

続いてアレルヤが出てきた。

「何かあったのか？」

ラグノスが尋ねた。

「マリーがこれからもガンダムに乗るって……僕はもうこれ以上マリーに戦って欲しくないんだ。」

「アレルヤもあの時感じ取ったでしょ？私たちに向けられたメッセージを」

アレルヤとマリーが言い合った。

「メッセージ？」

ラグノスが首を傾げた。

「ええ、私たちがラグノスを助けた時に脳量子波を感じたの。具体的に言うことは出来ないんだけど、私たちにあてられたメッセージのよう……」

「僕も感じた。でもそれとこれとは話が別だ」

アレルヤがマリーに反論した。

「ちょっと待った」

ラグノスが間に入った。

「二人の言い分はわかった。でもさ、もう一度考えてみたらどうだ？二人が今一番望むことはなんだ？」

ラグノスの言葉に二人ははっとした表情になった。

「それに気付いたら何をすべきか自ずとわかるんじゃないか？」
ラグノスはそう言つとドッグへ向かつて行つた。

「イアンさん、頼まれたもの持つて来ましたよ」
ラグノスが向かつているのとは別のドッグ。そこに沙慈が入つて来た。

「あと食事も」

沙慈の後ろから食事を持ったルイスが顔を出した。

「すまないな二人とも、巻き込んでしまつて…もう戦争が始まるというのに」

イアンがともに食事をとる沙慈とルイスに謝つた。

「いいですよイアンさん。もう慣れましたから」

「それに私たちはちゃんと見る必要があると思つんです。人類が戦争をやめるまでの過程を」

二人はイアンに微笑みながら言つた。

「そうか。ならわしも頑張つてこいつらを早く完成させないとな」
イアンは三人の後ろに立つ四機のガンダムを見上げて言つた。

まだ開発途中でフレームの一部が見えているが、完成すれば第六世代ガンダムと呼ばれるであろう機体を。

第46話 それぞれの望み（後書き）

更新が遅くなっていました。
第2章はこれで終了です。

設定6 プレイヴ？（前書き）

プレイヴ？の設定です。

設定6 ブレイヴ？

GNX-1101V ブレイヴ？

一時は連邦軍の主力機として制式採用されたものの、開発主任であったビリー・カタギリが連邦政府のイノベーター追放政策に反発して軍を脱退したため開発中止になったブレイヴ。しかしビリーが第三勢力サーガの技術主任に就任したことで、サーガの主力モビルスーツ、ブレイヴ？として生まれ変わるようになった。

本機最大の特徴は、イノベーターとノーマル双方のパイロットが搭乗することを想定し、その両方に対応できるようにOSのシステムを変更できる点である。開発する時間と費用が限られていたため基本的な性能はブレイヴと大差はないが、新型OS「Aker（エーカー）」を採用することで攻撃力を一定の水準で保ったまま高速戦闘への対応力がさらに強化されている。つまりブレイヴをもとに機動力を優先的に強化したヴァンよりも総合的な戦闘力は高い。

ブレイヴ同様一般機と指揮官機に分かれているが、その違いは指揮官機は通信および索敵能力を強化されていることのみ。それとは別にイノベーターのパイロットと、ノーマルの中でも特に優れた技量を持つパイロットが搭乗する機体は擬似太陽炉を両腰のバインダーに二基搭載する。ただしツインドライブではない。それ以外の機体は胸部に一基搭載する。

GNビームライフル「ドレイクハウリング・ネオ」

ブレイヴのドレイクハウリングの改良型。ブレイヴでは機首を形成していたが、本機は背部パーツが機首になるため巡航形態時では肩

に接続する。そのため二丁装備することも可能となっている。内部で粒子圧縮率を変換することによってビームの出力を変更することができる。

GNキャノン？

巡航形態時に機首となる背部パーツに一門搭載。搭載位置の関係上巡航形態でしか使用できない。ドレイクハウリング・ネオを二丁装備した機体はそれと同時に発射する「トライパニッシャー」を使用できる。

GNショルダーキャノン

両肩に内蔵されたビーム砲。モビルスーツ形態時での使用が主だが、巡航形態時には肩に装備されているパーツ内に砲身を引き込みそのパーツ自体を前方に向けることで使用可能。ただし肩に接続されたドレイクハウリング・ネオと干渉するため二丁装備した機体では使用できない。

GNビームサーベル

両腰に二本装備する。柄の部分を連結させてダブルブレードモードにすることが可能。

GNミサイル

脚部に四基ずつ装備。

GNフアング

イノベーター搭乗機のみが装備する武装で、両腰のバインダーに計十基搭載される。可能な限りの小型化が行われている。

第47話 6th Generation（前書き）

連邦軍によるヴェーダ破壊作戦以降連邦軍とコロニー軍の軍事衝突はその頻度を増し、ついに約半年後の2319年の中ごろ、コロニー側が宣戦布告を行った：

第47話 6th Generation

旧AEU領であるアフリカ大陸ではもう間もなく戦闘が始まろうと
していた。

大陸の中央部、ほぼ赤道直下にあるビクトリア湖の近くに位置する
軌道エレベーター「アフリカタワー」を手に入れようとコロニー軍
―今は新人類軍と呼ばれている―が侵攻、これを連邦軍―イノベイ
ターは旧人類軍と呼んでいる―が防ごうとしているのだ。新人類軍
は先月大陸南部の喜望峰沖に大規模な部隊を降下させた。その部隊
は軌道エレベーターに到着し、旧人類軍と向き合っていた。

互いが攻撃を始めようとしている時、軌道エレベーターの近くを猛
スピードで降下してくる機体があった。機体のメインカラーは銀色
で背中に大きな翼状のパーツがある。光り輝く二つの目と額のアン
テナ。第六世代ガンダムの一機、GNTR-0000 ミカエルガ
ンダムである。

「210019、ミカエル、目標地点を視認。GN粒子の散布は目
標到達と同時に終了する」

コックピットの中でラグロス・セラードが状況を確認する。

その時電子音とともに地上を映し出しているモニターに両軍のモビ
ルスーツが映し出された。

「目標確認。予定通りファーストフェイズを開始する」

ミカエルが降下スピードを上げた。

「艦長。上空から接近してくる機影があります。これは…ガンダム

です！」

新人類軍の母艦のオペレーターが叫んだ。

「やはり来たか…プラン通り第五小隊と第六小隊に対応させる」

艦長のその言葉で十機近くのヴァンがミカエルに向かって行った。

「准将、どうしますか？」

「イノベーターどもに任せておけばいいだろう。ガンダムに向かう分戦力が削られるからな」

旧人類軍の司令官は部下にそう言った。

ラグノスは向かってくるヴァンを見据えていた。

「ミカエル、目標を撃砕する！」

ラグノスの言葉とともにミカエルはビームサーベルを抜き放った。

『ファーストフェイズ開始、ファーストフェイズ開始！』『敵機接近、敵機接近！』『狙い撃って、狙い撃って！』

アフリカタワーから少し離れた丘陵地帯に身を隠した緑色のガンダムのコックピットでは、オレンジ・青・黄色の三体の八口が耳を動かしながら叫んでいた。

「そうだな…あの数だとさすがのラグノスでも手を焼くか」

ロックオン・ストラトスは笑みを浮かべながらそう言った。

「なら、狙い撃つとしようか。プロメテウスガンダムの初陣だ！」

ロックオンが銃の形をした操縦桿を握ると、GN-012 プロメテウスガンダムは額のカメラを起動し、さらに頭部前面に半透明のスクリーンを展開した。

所変わって宇宙。ソレスタルビーニングの宇宙船、プトレマイオス

3ではオペレーターの二人が忙しく動いていた。

「ファーストフェイズ開始しました。ミカエルとプロメテウスが攻撃を始めた模様です」

フェルトが報告する。

「三人ともガンダムに乗り込んだです。これより射出シークエンスに入ります」

ミレイナがオペレートを行う。

第一デッキではオレンジ色のガンダムが飛行形態となって待機していた。そのコックピットでアレルヤ・ハプティズムとマリー・パークスが会話を行っていた。

「本当にいいんだね、マリー？」

「ええ。私も、ソーマ・ピーリスも覚悟はできているから」
マリーが力強く答えた。

『第一、第二デッキハッチオープン、射出タイミングをウルズへ譲渡します』

「ウィーハブコントロール。ウルズガンダム、アレルヤ・ハプティズム、ソーマ・ピーリス。目標へ飛翔する！」

GN-014 ウルズガンダムが飛び出して行った。

一方第二デッキには薄い黄色のガンダムが立っていた。バックパックには六枚の羽のような武装が見える。ヒクサー・フェルミの専用機、GN-017 ガブリエルガンダムである。

「行くよ、グラーベ……」

『射出タイミング、譲渡します！』

フェルトの声がコックピットに流れる。

「了解。ガブリエルガンダム、ヒクサー・フェルミ、行きます！」

第47話 6th Generation（後書き）

ということで第六世代ガンダム登場です。次回戦闘シーンになる予定です。

ちなみに今回の話の前半部分、ラグノスとロックオンが登場するところはアニメファーストシーズンの第一話のオマージュという形でよく似た構成にしました。

第48話 圧倒（前書き）

地上から軌道エレベーターの制圧に向けて動き出した新人類軍（イノベーター軍）。守りにつく旧人類軍（地球連邦軍）。その戦いに介入したのは、ついに完成した第六世代ガンダムだった。

第48話 圧倒

ラグノスが駆るミカエルはビームサーベルのみでヴァン部隊を圧倒していた。すでに三機を撃墜している。

一機のヴァンがミカエルの背後から高速で接近し、ビームサーベルで切り裂こうとした。そのヴァンのパイロットはしとめたと確信していた。背後からこのスピードで近付けばパイロットがイノベイターであつてもほとんど避けられないし、相手の機体はビームサーベルを振りかぶるまで微動だにしなかったからだ。

そのパイロットがビームサーベルを振り切ったと確認したときには、すでに自分のヴァンが両断されていた。ミカエルが目に見えないほどの高速でビームサーベルを避け、逆にビームサーベルで攻撃したのだ。

「何だあの機動性は！？トランザムも使わずにだと？」

それを見ていた他のパイロットは驚きの声をあげた。

「落착け！新型とて相手は一機だ。包囲して殲滅する！」

部隊の指揮官が部下を鼓舞するように言った。

その時下から桃色の粒子ビームが飛来し、ヴァンが一機大破した。

「何だ！？」

ビームは続けざまに放たれ、計四機が墜落した。

「さすがだ、ロックオン」

ラグノスはそのビームがやってくる方を見ながら言った。

プロメテウスガンダムは両手で保持した一丁の大型の銃を遙か上空へ向けて発射していた。

「ロックオン・ストラトス、目標を狙い撃つ！」

「地上からか？しかしこれだけの高度を猛スピードで動くヴァンを正確に撃つことなどできるのか？」

指揮官は自分が見ている光景が信じられなかった。その間にヴァンは次々とその数を減らしていき、ついに指揮官の機体だけになった。しかし指揮官はいまだに現実を受け入れられず、機体が動きを止めてしまった。

彼が気が付いた時にはすでに機体はミカエルのビームサーベルに四肢を奪われ、地上へ向けて急降下していた。

それを見つめながらラグノスが呟く。

「ファーストフェイズ……」

「……終了だ」

ロックオンが後を引き継いだ。

ミカエルとプロメテウスがヴァン部隊と交戦しているのとはほぼ同じころ、軌道エレベーターのすぐ近くに部隊を展開している旧人類軍の真上から降下してくる二つの光があった。ウルズガンダムとガブリエルガンダムである。

「司令、我が軍の上空に二機のガンダムです」

「毎度、毎度邪魔をしてくれる……迎撃しろ！」

旧人類軍司令官の命令に十数機のジンクス？が上空に向かった。

「敵機接近。ジンクス？だ」

「わかった、迎撃する。マリー！」

「了解」

ヒクサーの通信を受けたアレルヤと呼びかけに応じたマリーは、操縦桿についているボタンを押した。

ジンクス？部隊は二機のガンダムを射程に捉え攻撃しようとしていた。しかしその瞬間ウルズガンダムが発射した大量のミサイルがジンクス？を襲った。回避行動を取ったがあまりにもミサイルが多くさらに従来のものよりも優れた誘導性を発揮したため、一気に六機が撃破された。

「くそっ…何て性能だ」

ジンクス？のパイロットたちがウルズの方へ気を取られている隙にガブリエルガンダムはジンクス？の下方に移動していた。

約半数のジンクス？がガブリエルの方を向いた時には部隊を取り囲むように六基のビットが配置され、ガブリエル本体も両手に持ったバズーカ状の兵器を構えていた。

「ガブリエル、目標を破壊する」

ヒクサーのその言葉と同時にバズーカからは桃色、ビットからはオレンジ色のビームが発射された。ビームは正確にジンクス？を捉え、残っていた全ての機体が大破した。

「ちょっとやりすぎじゃないかい？」

アレルヤが苦笑交じりに言った。

「そうかな？コックピットはちゃんと外したよ。とにかくこれでセカンドフェイズ終了だよ」

ヒクサーが返答した。

第48話 圧倒（後書き）

第六世代ガンダムの武装など詳細は追って書きます。

感想などお待ちしています。

第49話 ブースターモード（前書き）

新人類軍と旧人類軍の衝突に介入した第六世代ガンダム。その力は両軍を圧倒するほどのものだった。

第49話 ブースターモード

新人類軍と旧人類軍はお互いに動きを止め、にらみ合いの状態に入った。その上空では四機のガンダムがにらみをきかせていた。

「さあどうする、僕たちにサードフェイズに入らせるつもりか？」
ラグノスが操縦桿を握りながら言った。

旧人類軍の司令はモニターに映し出されているガンダムを無言で見つめていた。

「司令、ご命令を。あの機体を出しますか？」

「いや、やめておこう。今あの機体を公にするのは得策ではない。新型のガンダムに勝てる保証もないしな」

司令はそう言いながら新人類軍の方を見た。

「艦長。いまこそ新型を使う時では？」

新人類軍のオペレーターの一人が艦長に言った。

「…作戦中止だ」

艦長はしばらく考えた後オペレーターに告げた。

「えっ!？」

「聞こえなかったのか。作戦中止だ。基地まで撤退する」

新人類軍は撤退を始めた。

マイスターたちは撤退する新人類軍とそれを見守る旧人類軍を見届けていた。

「ふう。予定通りだな」

ロックオンが安堵の声を漏らした。

「そうだな。なら僕たちは帰るとしようか」

「あれをやるのかい？まだ十分にテストしていないけど」

ヒクサーの言葉にアレルヤが少し心配そうに言った。

「やるしかないだろ…じゃないといつまでたつても帰れないぞ？」

ラグノスはアレルヤに言い聞かせるように言った。

「こちらミカエル。今から帰還する。予定のポイントで拾ってくれ」
『了解』

トレミーからフェルトの通信が送られてきた。

「よし、行くぞ。所定の位置についてくれ」

ラグノスの指示でプロメテウス、ウルズ、ガブリエルの三機はミカエルのもとに集まった。ミカエルの真下に飛行形態のウルズが位置し、その両脇にプロメテウスとガブリエルがいるという隊形だ。そして四機のガンダムはそのまま真上を向いた。

「ミカエル、ブースターモード始動」

ラグノスがそう言うと、ミカエルの背中にある二枚の大型ウイングから大量のGN粒子が放出され始めた。このウイングはミカエルが搭載する二基のGNドライブのうちの二基が片側一基ずつ内蔵されており、さらにツインドライブを形成している。ブースターモードはその二基のGNドライブが生産するGN粒子を全て推進力に回すものである。

プロメテウスとガブリエルがミカエルの肩につかまり、ミカエルはウルズを両手でつかんだ。

「GNフィールド、機体前面に展開」

ヒクサーがそう言うと、ガブリエルだけでなくプロメテウスとウルズも機体の前面にGNフィールドを展開した。

「よし、行くぞ！トランザム！」

ラグノスが叫ぶとミカエルが赤く光った。その瞬間四機のガンダム

はとてつもないスピードで上昇を始めた。

「光学カメラがガンダムを捕捉したです。着艦シークエンスに入ります」

宇宙で待機していたトレミーはミレイナのオペレートでハッチを開放した。

大気圏を突破したガンダムは順調にトレミーに着艦した。

「ミッション完了だな」

「ええ。みんなよくやってくれたわ」

スメラギがラッセに答えた。

第50話 再登場

ソレスタルビーイングの秘密基地にあるブリーフィングルームでは、四人のメンバーが話し合いを行っていた。スメラギ、ラグノス、ヒクサー、イアンの四人である。

「GNドライブ建造船に留まっていたイノベイドによると、何者かが新しいGNドライブを建造していた痕跡があるということです」
ヒクサーが報告する。

「オリジナルの太陽炉の建造方法を知っている者が私たち以外にもいる……」

スメラギが考えこんだ。

「今の状況では情報が少なすぎます。連邦やコロニーの仕業ではないことははっきりしていますが」

ラグノスがスメラギに言った。

「そうね、もう少し様子を見ないとわからないわね。ラグノスが何回か目撃している白いGN粒子の機体についても」

「はい」

スメラギの言葉にラグノスが頷いた。

「それで、わたらの太陽炉は大丈夫なのか？」

イアンがヒクサーに尋ねた。

「もうすぐ完成との報告が来ています。同調率も問題ないと」

「そうか。016の建造は順調に進んでいるし、あとは……」

イアンはそう言うラグノスの方を見た。

「あの二人についても問題ないでしょう。革新はもう始まっています」

ラグノスはゆっくり言った。

「焦る必要はないわ。自分たちで答えを導き出すでしょう。アレル

「ヤとマリーさんなら…」

スメラギが自信たっぷりにそう言った。

その時スメラギのそばにモニターが現れ、フェルトの顔が映し出された。

『コロニー軍が再び軌道エレベーターに向けて侵攻を始めました』

「わかったわ。トレミーは発進します。乗組員はすぐに搭乗を」

『了解』

モニターは消えた。

「今回はここまでね。行きましょう」

スメラギが他の三人に呼びかけた。そして四人は部屋を出て行った。

「プトレマイオス3、発進します。」

前回のミッションからトレミーの操舵を担当しているルイスがトレミーを発進させた。基地から発進したトレミーは地球へはまだ少し距離のあるところまで来ると動きを止めた。

「ガンダム、発進！」

スメラギの号令で四機のガンダムは大気圏へ突入した。

新人類軍は前回同様アフリカ大陸を北上して、アフリカ・タワーへと向かっていった。

「司令、来ました。ガンダムです」

旧人類軍のオペレーターが司令官に報告する。

「よし。あれを出せ」

「了解しました。ジンクス？部隊、発進せよ」

オペレーターがそう告げると、軌道エレベーターを防衛している部隊の旗艦から十機ばかりのモビルスーツが現れた。旧人類軍の新型モビルスーツ、GNX-809T ジンクス？である。

ガンダムのコックピットにはジnkス？の姿が映し出されていた。

「あれが連邦軍の新型か」

ラグノスが言った。

地球連邦政府のネットワークはヴェーダとリンクしていないため、ソレスタルビーイングは旧人類軍のモビルスーツについてほとんどといていいほど情報を持っていない。

「俺とアレルヤで相手する。お前らは先に行つてろ」

ロククオンがそう言うと、プロメテウスとウルズはジnkス？との戦闘へ向かった。

近付いてきたプロメテウスとウルズに対して、ジnkス？は三つの

銃口がある銃を構えるとビームを発射した。二機は全てのビームを難なくかわしたが、突然ビームが自分たちのほうへ向けて曲がった。

「うわっ！またかよ」

ロククオンが半ばあきれ顔で言った。

「でも、このガンダムの力をあなどつてもらったら困るな」

アレルヤはそう言うとウルズを加速させた。

プロメテウスとウルズはそれぞれの武器を使って反撃をしようとした。しかしその瞬間、二機のガンダムとジnkス？部隊の間を白いビームと桃色のビームが横切つて行った。その太さはどちらのビームもそれだけでモビルスーツ一小队を軽く飲み込んでしまうほどのものだった。

「あれは……」

「また現れたか……」

少し離れた位置からそのビームを目撃したヒクサーとラグノスは、

ビームを発射した機体を見据えていた。金と銀のカラーリングに白いGN粒子を発する機体、メテオラ。そして青主体の機体色で緑のオリジナルGN粒子を出しているガンダムヴァラント。

「やっと本気を出せそうだな」

『お前が本気を出すとガンダムも撃墜しかねない。やめておけ』

「わかったよ。ガンダムヴァラント、目標を駆逐する！」

人間の声と電子音声が普通に会話を行い、謎に包まれた二機は戦闘に介入した。

第50話 再登場（後書き）

新登場の機体が増えてきたので次回から数回に分けて機体設定を書いていきたいと思います。できるだけ早く本編も書きますので。

ちなみに本編で新人類軍とコロニー軍、旧人類軍と連邦軍というのが混在していますが、これは私の中で一つのルールを設けているためです。

そのルールとは、ソレスタルビーイングのメンバーは「新人類軍」や「旧人類軍」という呼称を使わないというものです。この呼称は差別的であるため、彼らは使うことを自ら控えているという設定にしています。

しかし公式ではこれらの呼称が使われていることもあり、地の文やソレスタルビーイング以外の人物の会話では使うことにしています。

設定7 第六世代ガンダム

GNTR-0000 ミカエルガンダム

純粹種のイノベーター、ラグノスの専用機。ラジエルアラに続いてトリプルドライブシステムを搭載しているが、いまだ完全な同調には至っていない。そのため二つの太陽炉をツインドライブとして同調させ、一つを独立稼働させている。GNドライブは胸部に一基、背部ウイングパーツ（GNウイングシールド）に二基搭載する。型式番号の「TR」はトリプルの意味。

GNバズーカライフル？

ラジエルアラのバズーカライフルの改良型。欠点であった連射能力の低さを、銃身周辺にGNフィールドを用いてGN粒子をプールしておくという方法を採用することで克服した。これにより銃の大きさと連射能力は通常のビームライフル程度でありながら、一撃で艦船を粉碎できるほどの威力を持つ。さらに銃身下部と両側にクリアグリーンの刃を装備。三本の刃を前に出して合わせることでソードモードになる。

GNハイパービームサーベル

ラジエルアラに装備されていたGNスーパービームサーベルのマイナーチェンジ。ビーム刃の出力を変えることで長さや太さを変えることができる。

GNウイングシールド

背部に二枚装備する翼状のシールド。GNドライブを一基ずつ内蔵し、ウイングビットのキャリアーを兼ねる。周囲にGN粒子を放出して防御面積を拡大することができる。シールドでありながら背部

に装備しているのはビットとしての機能を有しているからであり、分離させて腕などに装着したり遠隔操作してシールドビットにしたりと、その運用方法は多彩。先端にGNビームガンを一門ずつ内蔵する。

GNウイングビット

ラジエルアラで得られたデータをもとにプロトウイングビットを改良した武装。従来のビットを遥かに凌ぐ機動性を有する。ビームの発射、ビームサーベルの形成、GN粒子をまとわせての突撃の三パターンが主な使用方法であるが、他にも数多くの機能が搭載されている。ウイングシールドに片側五基ずつ、計十基を搭載する。

GNビームシールド？

両腕部に装備する防御兵装。GN粒子を盾として展開する。

GN-012 プロメテウスガンダム

デュナメス、ケルデイル、サバーニヤに続くロックオン専用の狙撃型ガンダム。設計の基本方針はサバーニヤと同じく「乱戦時における乱れ撃ち」であり、第六世代ガンダム中最多のビット数を誇る。それをノーマルのロックオンでも使用できるようにするため、本機ではオレンジ、青、黄色の三体のハロがロックオンをサポートする。頭部ガンカメラには最新型を採用、機体各部にも精密カメラを搭載している。それに加えケルデイルのトランザム時に使用されていたフォロスクリーンを通常時でも使用可能とすることで「狙い撃ち」もデュナメス、ケルデイル以上の能力を持つ。GNドライヴは背部に外付けされ、バックパックの中に収納されている。射撃能力と同時に防御力も大きく強化されており、GNフィールドの展開が可能。

GNハンドライフル

腰に二丁装備する銃身の短い銃。唯一の手持ち武装で、自衛や迎撃に使用される。下部にクリアグリーンの刃が装備されており、ビームサーベルを受け止めたり剣としてふるうこともできる。二丁を前後に連結すると精密狙撃用のスナイパーモードになる。

GNスナイパービット？

肩に片側四基ずつ、計八基装備する。サバーニヤリペアのスナイパービットを改良したもの。ピストルビットとライフルビットは廃止された。

GNマルチビット

プロトマルチビットを実戦データを用いて発展させた多目的ビット。バックパックに十基搭載する。プロトマルチビット同様目的に応じた多彩なモードに変形できるほか、他のガンダムのビットと合体して強化する機能が追加された。

GNマイクロミサイル

機体装甲を兼ねる全身のミサイルポッドに搭載するミサイル。新たな粒子圧縮法の発見により従来のミサイルよりも格段に小型化することに成功した。そのため装填数が格段に上昇している。

GN-014 ウルズガンダム

高機動可変ガンダムの集大成ともいえるガンダム。ハルートに続き複座式で、アレルヤとマリーが操縦と火器管制を分担して行う。本機の開発コンセプトはマイスターの二人が望んだ「命を守る機体」である。そのため戦場を縦横無尽に駆け巡るための機動力、命を脅かす脅威を排除するための攻撃力、命を守るための防御力に対応し

た武装やシステムを多数搭載している。しかし現段階ではそのすべてを使用することはできない。背部には主翼や多数のスラスターを装備した大型バックパック、脚部には武装コンテナも兼ねるレッグブースターを装着している。GNドライヴは腹部に搭載し、アリオスとハルートのGNドライヴが搭載されていた股間部には大型のGNタンクを内蔵している。

GNソードライフル？

ハルートのソードライフルのマイナーチェンジ。手持ち武装として新しい武装が開発はされているのだが、まだ投入する段階ではないという開発陣の意向でこの装備が採用された。

GNハイメガキャノン

肩に装備する連装キャノン砲。本機の火器の中で最高の威力を持つ。機体本体の肩に接続された一門と、バックパックに接続された一門で連装砲を構成している。

GNパームビット

腰に二基、バックパックに八基、レッグブースターに四基内蔵するオールレンジ兵器。通常は直方体型であるが、内部に指が内蔵されており展開すると手のようになる。これで直接相手に打撃攻撃を加えたり、機体から投げ出されたパイロットの身を守ることができる。

GNマイクロミサイル

プロメテウスと同装備の小型ミサイル。バックパック、レッグブースターに多数内蔵する。

GNビームシールド？

ミカエルと同じ武装。GN粒子を盾として展開する。両腕に発生器

を搭載する。

GN-017 ガブリエルガンダム

ヴァーチェ系列の砲撃戦用ガンダム。マイスターはヒクサー。ラファエルの後継機として開発されたため、第六世代ガンダムの中でも色濃くイノベイドの技術を受け継いだ機体である。最大の特徴はオリジナルの太陽炉と擬似太陽炉の双方を搭載した史上初のハイブリッド機ということである。武装のほぼ全てを擬似太陽炉でまかなうことでオリジナルのGN粒子の大部分を推進力とGNフィールドに回すことができ、それによって驚異的な機動力と防御力を獲得した。擬似太陽炉も含めるとモビルアーマー並みの太陽炉搭載数になっているが、イノベイドの技術を用いて極限まで擬似太陽炉を小型化しそのほとんどを外付けにすることで機体の大型化を防ぎ、機体サイズは他のガンダムよりもほんの少し大きいくらいである。オリジナルのGNドライブは胸部に搭載する。

GNバズーカ？

GNバズーカの三代目。外観はセラヴィーのGNバズーカ？の分割時に近いが、連結機能は無い。しかし新型の粒子圧縮機能を採用することで、連結せずとも威力の上昇が可能。オリジナルのGNドライブから粒子供給を受ける唯一の射撃武装。

GNビームサーベル

腰に二基装備。粒子供給はオリジナルのGNドライブから受ける。

GNキャノンビット

本機専用に開発されたビット。一基につき擬似太陽炉を一基ずつ内

蔵しており、モビルスーツ用の遠隔操作武装としては最高級の出力を持つ。通常の状態から砲身を開き擬似太陽炉を直結させたバーストモードにすることで威力を向上させることができる。また各ビツトで独立してトランザムを発動することが可能。バックパックに六基装備する。

GNキャノン？

セラヴィーのGNキャノン？の発展型で、肩に装備する。この武装は肩に内蔵された擬似太陽炉と直結しており、高い威力を発揮する。さらにこの擬似太陽炉は大型スラスターとしての役目も持っている。

設定7 第六世代ガンダム（後書き）

久々の投稿ですが、設定だけになります。申し訳ありません。
現在スランプ状態に陥っておりまして…気分転換にSEEDを書こうかと思っている今日この頃です。

第51話 悪夢（前書き）

第六世代ガンダムで武力介入を行うガンダムマイスターたちの前に、謎の機体が現れた。メテオラとガンダムヴァラント。この二機が世界にもたらすものとは…

第51話 悪夢

「何だあの機体は！ガンダムか？」

「あと二機存在していたとは……」

新人類軍と旧人類軍の兵士たちは突然現れたメテオラとガンダムヴァランタを見て口々に言った。

だがそれはガンダムマイスターたちも同じだった。

「何だよあれは……」

「白いGN粒子……ラグノスが言っていた機体か」

間近でこの二機を見ているロックオンとアレルヤは驚きの目をしていた。

「ラグノス……」

「ああ。あのガンダムタイプは初めて見る」

一方少し離れたところから問題の二機を見つめていたヒクサーとラグノスはヴァランタの方に注目していた。

「さて、さつさと終わらせますか！」

驚きで言葉を失った周りの人間たちとは対照的に、ガンダムヴァランタに乗る少年は明るい口調だった。

『キーク、あまりやりすぎるなよ。ヴァランタの性能をフルに使うとどうなるか、わかってるだろ』

メテオラから電子音が送られてきた。

「何言ってるんだ、お前の機体のほうがえげつないじゃないか」

キークと呼ばれた少年の声は誰もいないメテオラのコックピット内に響いた。

『『ソウダ、ソウダ』』

ヴァランタに搭載された二体のハ口がキークに賛同するような声を

出した。

その時メテオラとヴァランタにめがけて一機のジンクス？がビームライフルを発射した。

しかし二機は軽々とそのビームをかわした。

「危ないじゃないか！」

キークは非難の声をあげ、操縦桿を操作した。

それに呼応してガンダムヴァランタは左肩に装備されていた大型の剣らしきものを左手に持った。その刹那、大型の剣からは桃色のビームが発射されジンクス？のコックピットを貫いた。

「あれだけの巨大な銃を片手で、しかもあんなに正確に撃つとは……」
ヒクサーが感嘆にも似た声を漏らした。

「あの武装……まさか……いや、そんなはずはない」

それを見ていたラグノスは一人呟いていた。

『おい、ラグノス。どうするんだよあれ』

その時ロックオンがラグノスに尋ねてきた。

「……両軍ともさっきの攻撃のおかげで下手に動けないだろうし、しばらく様子を見よう。今スメラギさんからもそう通信が届いた」

ロックオンの声で我に返ったラグノスはそう答えた。

ラグノスの言葉通り、新人類軍も旧人類軍も警戒して動きを止めていた。しかしメテオラとヴァランタはそうではなかった。キークが銃を放ったその直後、メテオラは新人類軍、ヴァランタは旧人類へと攻撃をかけたのだ。

メテオラが両手に持つバズーカが白いビームを発射するとヴァンの一個小隊が消し飛んだ。

ヴァランタは先程の銃でジンクスを正確無比に撃ち落とし、右手に持った剣で切り裂く。
ヴァンもジンクスも反撃すらできないまま次々と数を減らしていった。

「そんな…」

「嘘でしょ…」

アレルヤとマリィは自分たちの目の前で起きたことが信じられなかった。いや、信じたくなかった。自分たちの力では何もできないということを本能的に悟っていた。

それはロツクオンも同じだった。ヒクサーも。そしてラグノスも。何かしなければと思った時には、すでに戦場にはジンクスとヴァン、そして戦艦の残骸しか残っていなかった。メテオラとヴァランタは戦場を離脱した後だった。

任務を終えて帰還したキークは飲み物を口にしつつモニターに話しかけていた。

「なあ、ガンダムマイスターってあの程度なのか？何もしてこなかったじゃねえか」

『彼らの力を侮るな。彼らは何か持っている、私にも予測できないような何かを…』

「んじゃ次会うときは、それが見れるように期待しとくよ」

キークはそう言うとその場を後にした。

第51話 悪夢（後書き）

本格的な登場となりました、メテオラとガンダムヴァラント。

メテオラは想像屋様、ガンダムヴァラントはsenzaki様から投稿いただいたオリジナル機体です。この場を借りて紹介とお礼を申し上げます。ありがとうございました。

オリジナル機体やオリジナルキャラ、まだまだ募集しています。（新人類軍、旧人類軍の機体アイデア不足中です。）

前回の投稿の後書きでも書かせていただきましたが、スランプ状態です。投稿間隔が開いてしまいかもしれませんが、気長に待っていただけると幸いです。

P・S・SEED&DESTINYの続編が読みたいという方はいらっしゃいますか？

第52話 決意

ソレスタルビーイングの基地内にある一室の空気は重く沈んでいた。

「……」

ラグノス・セラード、ロックオン・ストラトス、アレルヤ・ハプティズム、マリー・パーファシー、ヒクサー・フェルミ。ソレスタルビーイングが誇る五人のガンダムマイスターたちは、誰も言葉を発しなかった。

先日の戦闘に介入した謎のモビルスーツ二機。そして彼らが目の当たりにしたその驚異的な性能。まさに出鼻をくじかれたような気分であった。

「あんな奴らがでてきて、俺たちは戦争根絶なんてできるのかよ……」
ロックオンがようやく口を開いた。

「第六世代ガンダムの性能を過信しすぎていたよ。僕たちが最初に武力介入を行った時とは状況が全く違うということを忘れていたしね……」

五人のマイスターの中で唯一2307年の武力介入を経験しているアレルヤも重い口調で語った。

「私たちの前には大きな壁が立ちふさがっているということから、自然に目を背けていたのかもしれない……」

マリーはアレルヤの顔を心配そうに見つめながらそう言った。

「こんな風に弱気になってしまったらダメだってことはわかっているけど、やっぱりあの性能を見せつけられると……」

ヒクサーも普段は見せないような表情になっていた。

四人のマイスターが次々と消極的な感情を吐露していく中で、ただ一人ラグノスだけは依然無言のままだった。

「ラグノス？どうかしたのかい」

アレルヤがそんなラグノスの顔をのぞきこみながら尋ねた。

「いや、みんな僕と同じことを考えているんだと思って。あの二機の性能はほんの一瞬見ただけでも飛びぬけているものだったことはわかったし、僕たちがいくらあがいても到底及ばないかもしれないと本能的に思った。でもそれと同時に別に思ったことがあるんだ。もしかしたらこれもみんな考えているかもしれない」

ラグノスは他の四人の顔を見回して言った。

「僕たちは人類を解り合わせるためにガンダムに乗って戦っている。そうだろうか？」

ラグノスの言葉に四人は頷いた。

「刹那がELSとの対話をした時、一筋縄ではいかなかった。お互いを理解し合うということは、一見簡単そうに見えて実はとても難しいことだっていうことだ。でもいくら難しくても不可能じゃないってことも刹那は教えてくれた。今回も同じだと思うんだ」

「不可能じゃない…か」

ロックオンが呟いた。

「ああ。さっきマリーが言った通り、僕たちの前には大きな壁が立ちふさがっている。それもたくさん。でもそれは決して乗り越えることができないものじゃない」

四人のマイスターたちはラグノスの言葉に真剣に耳を傾けていた。

「僕は、いや僕たちは刹那とティエリアに人類の未来を託された。だからたとえ何度ぶつかっても、何度跳ね返されても、僕たちは壁の前で立ち止まるわけにはいかない。人類の未来のために」
ラグノスは最後に力強く言った。

「そうだね。僕たちが立ち止まってしまったらこの世界はどうなってしまうかわからない」

「ええ。人類の未来を守るためにも」
アレルヤの言葉にマリーも同調するように頷いた。ヒクサーとロツクオンも同様に頷いた。

「それに第六世代ガンダムはまだ性能の一割も出していないよ」
技術者として第六世代ガンダムの開発にも関わったラグノスは笑顔でそう言った。

そのとき五人の端末にミレイナから通信が入った。

『ラグランジュ2で新人類軍と旧人類軍の戦闘が始まるうとしています。ヴェーダからの情報によればあの二機もラグランジュ2に向かっているです』

決意を新たにした五人はその通信を聞くと部屋を飛び出して行った。

第52話 決意（後書き）

徐々にスランプから脱出しつつある感じでした。少しですがこれから先の話の流れが自分の中で固まってきました。

第53話 驚愕の事実（前書き）

どうもお久しぶりです。ようやく更新できました。

第53話 驚愕の事実

漆黒の闇の中を一筋のオレンジ色の光が交差する。

ここは月の裏側にあるラグランジュ2。新人類軍がELSの花周辺に築き上げた基地に旧人類軍が侵攻していた。

先日アフリカ・タワーで行われた戦闘において、メテオラとヴァラントが介入した結果双方が多大な被害を受けた。特に新人類軍側の損失は大きく、地上からの撤退を余儀なくされた。その隙についてコロニーに最も近い基地を制圧せんと旧人類軍が侵攻したのだ。

その戦場に近づいている二機のモビルスーツがいた。

「目標補足。全くこりないね、あの人たちも」

そのうちの一機、ガンダムヴァラントの中でキークは言った。

『ごちゃごちゃ言うな。ミッションを始めるぞ』

ヴァラントの隣にいるメテオラから通信が送られてきた。

「はいはい」

キークは半ば退屈したかのような口調だった。

二機とは逆の方向からもモビルスーツが近づいていた。ただしこちらには四機。ソレスタルビーイングの第六世代ガンダムである。

「例の二機を確認した。予定通り、先行する」

ラグノスがほかの三機へ告げた。

「了解。気をつけて」

ヒクサーがラグノスに声をかける。そしてミカエルはメテオラとヴァラントの方へ向かって行った。

「さて、俺たちはやることをとっと片付けますか」

ロックオンの言葉に応じてプロメテウスが両手にハンドライフルを持った。

新人類軍のヴァンと旧人類軍のジンクス？はいつも通りの戦いを繰り広げていた。ヴァンが高速で飛び回りジンクス？を翻弄するが、ジンクス？もヴァンの攻撃を確実に防御する。どちらも相手に決定的な打撃を与えられずにいた。旧人類軍は先日の戦闘で初陣を飾ったジンクス？を用意してはいるのだが、メテオラとヴァランタが前回出撃した部隊を全滅させたため、今回の出撃には慎重になっていた。それは新人類軍にもあてはまることであり、開発した新型機はまだ日の目を見ていない。

そんな両軍にメテオラとヴァランタは攻撃を仕掛けた。ヴァンとジンクスの部隊を白のビームと桃色のビームが飲み込もうとしていた。しかしその瞬間二本のビームは突如形成されたGNフィールドに防がれた。

「何！？」

キークは驚きの声をあげた。

GNフィールドを形成したのは二基のビットだった。ミカエルのウイングビットだ。

「あのビームを受け止めるとは…さすが第六世代」

キークはモニターに映るミカエルを見つめながら言った。

「こちらはソレスタルビーイング。前回の戦闘や今回の戦闘においてそちらが介入し、新人類軍と旧人類軍の双方を攻撃した動機を知りたい」

ラグノスはメテオラとヴァランタに呼びかけた。

『動機？それを知ってどうする』

（若い男か…あのガンダムタイプの方だな。脳量子波は感じない。ノーマルか）

ラグノスはヴァランタから送られてきた通信を聞きながら考えを巡らせていた。

「世界から戦争を失くし、人類を解り合わせようとするために君たちが戦うのであれば、我々ソレスタルビーイングと志を同じにする者たちだ」

『つまり仲間になれということか？』

「力を合わせて戦えるかもしれない」

ラグノスがそう言ったとき、会話に電子音が割り込んできた。

『聞こえるか、ガンダムマイスター』

「!？」

『確かに我々は戦争根絶のために戦っている。だが今は君たちとともに戦うことはできない』

「ならば敵対も辞さないというのか？」

『そうなるかもしれない。だが今回は君たちに任せるとしよう』

その通信と同時に、二機のモビルスーツはミカエルに背を向けて撤退しようとした。

だがラグノスはそれを呼び止めた。

「待ってくれ！君たちは何らかの組織として動いているのか？それほどの性能を持ったモビルスーツを開発することは容易ではない」
すると金と銀の機体、メテオラがミカエルの方を振り向いた。

『聞くなら答えよう。君はその答えにもう気付いているかもしれないが、純粹種のイノベーター。我々メテオラとガンダムヴァランタはある組織に属している』

「ある組織？」

『その組織の名はソレスタルビーイング。戦争根絶を目指す私設武装組織だ』

「ソレスタル：ビーイングだと！？」
ラグノスが驚きの声をあげた。驚くラグノスを尻目にメテオラとヴァランタは戦場から去って行った。

第53話 驚愕の事実（後書き）

なるべく早く更新できるように頑張ります。

第54話 光（前書き）

ラグランジュ2にある新人類軍の基地に侵攻した旧人類軍。それに介入しようとしたソレスタルビーイングの前に、メテオラとガンダムヴァラントが現れる。彼らと対話しようとしたラグノスであったが、彼らはソレスタルビーイングであるという驚愕の事実を知られる。

第54話 光

ラグノスがメテオラ、ヴァランタと対話をしている頃、戦場では三機のガンダムが介入行動を行っていた。ロックオンのプロメテウスガンダム、アレルヤ&マリーのウルズガンダム、ヒクサーのガブリエルガンダムである。

三機のガンダムはその性能もあって、ジンクス？とヴァン相手に優位に戦いを進めていた。

そのためジンクス？とヴァンは少し引き気味になった。

「ラグノスは上手くいつてるかしら？」

そんな中、複座式であるウルズのコックピットの前席に座っているマリーが、後席にいるアレルヤに問いかけた。

「彼なら大丈夫さ。だって刹那とティエリアが未来を託した人なんだから」

「そうね」

アレルヤの言葉にマリーはうなずいた。

そのときコックピットにトレミーにいるスメラギから通信が入った。
『ミッションプラン変更よ。ミカエルも加えて四機で武力介入を続けて』

その言葉と同時にウルズのそばにミカエルがやってきた。

『対話は失敗だったよ…あの二機は撤退した。それにとんでもない事実を知ってしまった』

ラグノスは他のマイスターに通信を送った。心なしか声が落ち込んでいるようだ。

「ラグノス…」

アレルヤが呟いた。

『その話はこの状況を打開してから聞くことにするぜ』

ロックオンの言葉にマイスター全員が前方を見た。

「これは……！」

「どうやらどちらもあの二機がいなくなったことに気づいたみたいだね」

驚きの声をあげたマリーと、苦笑するアレルヤをはじめとするマイスターたちが見たものは、新人類軍と旧人類軍の艦隊から発進するモビルスーツの隊列だった。

「ついにコロニー軍の新型もお披露目か」

ヒクサーの言葉通り、そのモビルスーツは両軍の最新鋭機であった。旧人類軍のジンクス？、そして今回が初の実戦となる新人類軍のエクレール。両軍が最大の危機と認識していたメテオラとヴァランタが撤退したことが判明したため、出撃に踏み切ったのだ。

『ガンダム各機へ。ミッションは続行します。新型機への武力介入を開始して』

スメラギが指示を出した。

「了解」

ガンダムは次々と新型モビルスーツへ向かって行った。

四機のガンダムは二機ずつに分かれて両軍の攻撃に向かった。エクレールを相手取るのはプロメテウスとガブリエル、そしてジンクス？にはミカエルとウルズが対応する。

まず攻撃を仕掛けたのは新人類軍のエクレールだった。巡航形態からモビルスーツ形態へと変形すると両腕からビームを発射した。しかしそのビームはジンクス？に届く前にプロメテウスのマルチビット・シールドモードに防がれた。

「ヒクサー！」

ロツクオンが叫ぶのとほぼ同時に、四方八方からオレンジ色のビームがエクレールを襲った。ガブリエルのキャノンビットである。

二機のエクレールが四肢、三機が脚、一機が腕を失ったが、ほとんどの機体はビームをかわした。

「さすがは新型だ。でもこっちも負けちゃいないよ」

ヒクサーがそう言うと、ガブリエルは巡航形態のエクレールに匹敵するスピードで追撃を始めた。

エクレールの攻撃が届かなかったジンクス？は、二手に分かれた。

「ELSの方へ向かってるな！アレルヤ、マリー、追撃を！こっちは僕が引き受ける」

「わかった。任せるよ」

エクレールの方へ向かったジンクス？にウイングビットを放っているラグノスに声をかけると、アレルヤはウルズをELSの花を指すジンクス？を追った。

ジンクス？の部隊は手に持った銃をELSの花を方へ向けた。しかし引き金を引こうとした時にはすでに銃が手の中から消えていた。

「何だ！？」

パイロットたちが銃を探して辺りを見回すと、銃が宙を舞っていた。よく見ると手首から先だけの手が銃を持っている。ウルズのパームビットがジンクス？から銃を奪い取ったのだ。パームビットは全ての銃を破壊すると、ELSの花とジンクス？の間に陣取ったウルズの下へ戻った。

「もう誰も傷つけさせはしない！」

「ノーマルも、イノベーターも、そしてELSも！」

アレルヤとマリーの目は固い決意で満ちていた。

「お前らがそう言うんなら仕方ねえ。戦おうぜ！」

ハレルヤが一時的に表出して叫ぶ。その時だった。

「あれは…E L Sが？」

ジンクス？を切り裂いたミカエルのコックピットの中から、ラグノスはそれを感じた。まるでウルズを包み込むようにE L Sの花から発せられている脳量子波を。

「そうか、ついに革新の 때가…」

ラグノスがそう言うと、脳量子波の発生が終わった。

ウルズのコックピットにいるアレルヤとマリーは、自らの身に起きたことに困惑しているようだった。しかしその困惑も一瞬のものだった。二人は先程と同様に決意に満ちた目をしていた。そしてその目はもう一つのことを宿していた。そしてその太陽のように輝く、金色の光を…

第54話 光（後書き）

新人類軍の新型機、エクレール初登場です。ジnkクス？と合わせて機体説明は現在進行中の戦いの話が終わり次第行います。メテオラ&ヴァランタの設定もその時に行います。

第55話 ノルニルモード（前書き）

ラグランジュ2で発生した戦闘に介入したソレスタルビーイング。
謎のモビルスーツ、メテオラとガンダムヴァラントがソレスタルビ
ーイングであるという事実が発覚するが、そんな中アレルヤとマリ
ーに変革の時が訪れた。

第55話 ノルニルモード

「どうやら僕たちは新しい力を授かったみたいだね」
アレルヤが前にいるマリーに声をかけた。

「そのようね…」

マリーが呟いた。

そのとき通信が入った。ミカエルのラグノスからだ。

『アレルヤ、マリー。ジンクスが来るぞ!』

ラグノスの言葉で二人は正面を見た。

先程の攻撃で銃を失ったジンクス?の部隊が、ビームサーベルを構えて突撃してきた。

(行くぜ、お前ら!)

マリーはハレルヤの声を聞いた。ただしいつものように耳で直接聞いたのではなく、頭の中に響いてきた。

「ハレルヤ…?」

不思議に思ったマリーは後ろを振り返った。

(俺は今お前らの頭ん中に話しかけてんだ。そんなことより敵が来てるぜ)

「そうね」

マリーは再び前を向いた。

ウルズはジンクス?のビームサーベルを軽やかにかわすと、すぐさま反撃に出た。ソードライフル?で三機のジンクス?を一瞬にして戦闘不能にし、背後から迫って来た四機をパームビットで破壊、さらに遠方にいた二機はハイメガキャノンで攻撃。ちなみに全ての攻撃がコックピットを狙っていないものである。

遂に革新を遂げた二人が操るウルズの前に、旧人類軍のジンクス？は手も足も出なかった。わずか二分足らずでELSの花へ向かった部隊は全滅した。

『二人ともプロメテウスとガブリエルの援護へ向かって頂戴』
ちょうどその時スメラギから通信が入った。

「了解」

ウルズは同じくジンクス？部隊を壊滅させたミカエルとともに、新人類軍のエクレール部隊の攻撃に向かった。

エクレールを相手にしているロックオンのプロメテウスと、ヒクサーのガブリエルはエクレールのスピードに苦戦しながらも着実にその数を減らしていた。

「なかなかやるな、ガンダム。しかし！」

エクレールのパイロットの一人が叫ぶ。それと同時にエクリエールは赤い光を放った。トランザムだ。エクレールはさらにそのスピードを増した。

プロメテウスとガブリエルは攻撃を続けるが、一切当たらなくなつた。

「くそっ……」

ロックオンが悪態をつく。その時猛スピードでプロメテウスのそばを駆け抜けて行ったものがあつた。

「あれは…アレヤ、マリー！」

ウルズガンダムを見たロックオンが心配そうな声を出した。

『大丈夫だよ、ロックオン。心配無用だ、僕たちも行こう』

いつの間にか隣にいたミカエルからラグノスの声が送られてきた。

トランザムを起動したエクレールに完璧な対応を見せているウルズ

を中心に、ガンダムは介入行動を再開した。

「ヒクサー、あれを解除してくれ」

そんな中ラグノスがヒクサーに言った。

「あれを？…わかった。遂に訪れたのか」

そう呟くと、ヒクサーの目が金色に輝いた。

「レベル7にアクセス。パイロット二名の脳量子波、規定値をクリア。システム承認。解除コード入力」

そこまで言うと、ヒクサーの目が元に戻った。

「解除した。いつでも行けるよ」

ヒクサーはラグノスに通信を送った。

「よし。アレルヤ、マリー」

ラグノスは今度はウルズに通信を送る。

「何だい？」

アレルヤが答えた。

「今モニターに出ているシステムを起動させるんだ。使い方はすぐにわかるはずだ」

二人の前にあるコックピットのモニターには起動されるのを待ちわびるかのようにある文字列が点滅していた。それは“NORNIR MODE”という文字。

「ノルニルモード？」

マリーがそれを読む。

「とにかくやってみよう。ラグノスがああ言っているんだし」

「そうね」

アレルヤの言葉にマリーが頷いた。

「ノルニルモード…」「…起動！」

二人が叫ぶと、モニターの文字の点滅が終わった。そしてコックピットの内部が一瞬明るい光に包まれた。

光が和らいだ後には、二人のマイスターの目が金色に光っていた。

ウルズに起きた変化は機体の外からも視認できた。

「何だ、あれは？」

新人類軍のパイロットたちは口々にそう言った。ウルズの機体全体から大量のGN粒子が放出され、まるで天使の翼のようになっていくのだ。

彼らがそれに目を奪われている隙に、ウルズは攻撃を仕掛けた。

しかしその攻撃はいままでのもとは大きく違っていた。

「トランザムではない……しかし、これだけの速度でなぜ攻撃できる？」

エクレールのパイロットの一人がそう言うのも当然だった。そのスピードはパイロットたちが今まで経験したことのないものだったからだ。イノベーターが一切視認することができず、脳量子波による追尾でも追いつけないほどのスピードでウルズは攻撃していた。

「すごいな……」

それを見ていたロックオンが呟いた。すでにエクレールは大半が戦闘不能な状態になっており、ウルズ以外の三機のガンダムは戦闘を止めていた。

「あれが、ウルズのノルニルシステム。ハルルトに搭載されていたマルチモードと同じくリミッター解除機能だが、ノルニルシステムはGN粒子のほぼ全てを推進力と機体制御に回すことでこれだけの機動性を実現している。そして純粋種のイノベーターが二人搭乗することで、あの超高速でも精密な攻撃が可能なんだ」

ラグノスが説明した。

しばらくするとエクレール部隊は全滅した。

所変わって新人類軍の基地。

「エクレール部隊、全滅しました」

オペレーターの一人が司令に報告した。

「そうか…別働隊は？」

新人類軍は今回迎撃に出た部隊とは別に、別働隊を編成して旧人類軍の艦隊に直接攻撃をかけようとしていた。

「だめです。別働隊も壊滅した模様」

別のオペレーターが告げた。

「何だと！旧人類軍に読まれていたのか！」

「いえ、ジンクスにやられたものではありません。これをご覧下さい。戦闘中の機体に転送されてきた文章です」

オペレーターの言葉と同時にモニターに文章が映し出された。

「『我らはサーガ、混沌の世界に楔を打ち込むもの…』サーガだと聞いたこともない」

文章を読み上げた司令が言った。

「そのサーガとやらが使用していたモビルスーツですが、半年ほど前旧人類軍がヴェーダを奪還しようとしてきた際にガンダムとともに介入してきた機体に酷似しています」

「ソレスタルビーイングと手を組んでいるということか。サーガ…また厄介なものが現れたものよ」

第55話 ノルニルモード（後書き）

次回からは機体説明をいくつかに分けて行います。
感想などお待ちしています。

設定8 メテオラ&ガンダムヴァランタ（前書き）

読者様から投稿していただいた二機の設定です。

ストーリーの進行上明かせない部分も多いのですが、少しずつ明らかにしていく予定です。

設定8 メテオラ&ガンダムヴァラント

G N - φ φ φ S S メテオラ

争いを続ける新人類軍と旧人類軍、それに介入するソレスタルビーイングの前に突如として現れた謎のモビルスーツ。白いG N粒子を発生させる。機体のカラーは金と銀で、頭部はモノアイ。ガンダムなど通常のモビルスーツよりも二回りほど大きい。パイロットは搭乗しておらず、本機が行う通信は常に電子音によるものである。防御力を重視した機体であり、強固なG Nフィールドを展開できる。

G N シールド

両腕に装備する大型の盾。G Nフィールドを発生させることができる。

G N バズーカ

本機の主武装である小型のバズーカ。両手に二挺携行し、腹部に内蔵型も装備されている。一撃でモビルスーツの小隊を壊滅させるほどの威力をもつ。三つの砲門から同時にビームを発射するバーストモードは、他をよせつけない出力を有する。

G N パームキャノン

掌に内蔵されたビーム砲。相手に密着して放つというのが主な使用方法であるが、ビームサーベルを形成することも可能でありその運用法のバリエーションはまだ未知数。

G N - 0 0 0 0 V a ガンダムヴァラント

メテオラとともに現れた謎の機体。いわゆるガンダムタイプと呼ばれるモビルスーツである。機体カラーは青で、両肩の太陽炉や武装

などにダブルオーとの共通項が多く見られる。パイロットはキーク・ウェッジ。メテオラとは対照的に攻撃力を重視している。

GNソード？

形状はダブルオークアンタのGNソード？似ているが、ビームライフルは内蔵されていない。しかしビームライフルがオミットされたことにより、刀身により多くのGN粒子をまとわせることができるようになり攻撃力が上昇している。

GNソード？フルセイバー

ダブルオークアンタのツインドライヴ安定用に製作された、GNソード？フルセイバー（外伝に登場）に類似した大型剣。五つのパーツから成り立っており、それらを組み替えることで剣から銃まで多彩な攻撃法を生み出すという点はフルセイバーと変わりはないが、出力は向上している。

GNカタール

両脚ふくらはぎに装備する小型の実体剣。かつて提案されたダブルオーガンダムの強化案、セブンソード（外伝に登場）で使用されていた同名の武装と形状は酷似している。クリアグリーンの刃は情報収集用のセンサーを兼ねている。

GNシールドビット・GNクロスビット

腰に十六基装備されるオールレンジ兵器。普段はシールドビットの内部にクロスビットが収納されている。クロスビットはダブルオークアンタのソードビットに類似しているが、新たにビーム発射機能が加えられている。その反面防御力が低下したため、防御には基本的にシールドビットを使用する。

設定9 エクレール&ジンクス? (前書き)

新人類軍のエクレール、旧人類軍のジンクス?の設定です。

設定9 エクレール&ジンクス？

GNX-1103V エクレール

新人類軍がヴァンに次ぐ主力モビルスーツとして開発した機体。地上への侵攻作戦を念頭に置いて開発が進められた。そのため機動力だけを考慮していたヴァンとは異なり、攻撃力も十分に備えている。変形機構など機体の基本部分はヴァンと変わっていないが、より早く次の行動に移ることができるように手持ち武装を廃し、武装は全て機体に内蔵される形になっている。

最大の特徴は、かつてのAEUイナクトと同様太陽光発電システムからマイクロウェーブを受信できることである。コロニー用に新たに建設された太陽光発電システムを利用したもので、これによりトランザム等で粒子を使い切っても電力によって機体を稼働させることができる。擬似太陽炉はヴァン同様両腰のバインダーに二基装備する（ツインドライヴではない）。エクレールとはフランス語で雷の意味。

GNハンドガン

本機のメイン武装。両掌に装備する。連射ビームと高出力ビームを使い分けることができ、ビームサーベルを発生させることもできる。

GNキャノン？

ヴァンのGNキャノンの後継型。同様にバインダー先端に一門づつ装備する。ドライヴと直結させることでより強力なビームを放つことが可能。さらにハンドガンと同時発射することで強力な照射ビームを放つ「テトラパニッシャー」を使用できる。

GNビームエクリプス・エッジ

ヴァンのビームエクリプスの改良型。両手脚に装備する。三日月型のビームを発射するだけでなく、鋭利なビーム刃を形成して敵を切り裂くこともできる。

GNミサイル

脚部コンテナに内蔵するほか、オプションとしてミサイルコンテナを追加することもできる。

GN-809T ジンクス？

ジンクスの通算六代目（各バリエーション機を除く）で、旧人類軍としては初の量産機。ジンクス？と同様にコア・ファイターを標準装備している。

先代機ジンクス？は徹底的に万能性を追求した結果あらゆる状況に対応できたが、その反面基本的な武装しか装備していなかったため攻撃力がある一定の水準で打ち止めになってしまったという欠点があった。今後新人類軍との戦いの中ではそれ以上の攻撃力、ひいては全体的性能が求められると予想した技術陣は本機開発にあたり、白兵戦、射撃戦などある戦闘シチュエーションのみに特化した機体をミックスした性能を持つ万能機を作るという方向性を定めた。

当初は先々代機ジンクス？と同様にさまざまな武装を用意してそこから状況にあったものを選択するという案が出たが、より効果的な武装選択案として「コアブロックシステム」が提案され採用された。これは武装だけでなく頭部、胸部を残して四肢を換装することで、よりきめ細やかに戦場の状況に対応するというものである。換装パ

ーツである四肢は多種多様なバリエーションが用意されており、開発当初の目標は達成されたといえる。ただしこのシステムは通常機と比べてコストや整備時の負担が大きいことから、武器のみを換装する機体が多いのが現状である。

GNバルカン

頭部に装備。本機唯一の換装に影響されない武装である。

コアブロックシステム

本機運用の根幹をなすシステム。開発にはエースパイロット用に開発されたジンクス？のカスタム機のデータが使用されている。基本は高機動、近接、遠距離の三つのシチュエーションに対応した四肢が用意されているが、さらに各パイロットの特性に合わせてカスタムが施されている。さらにこの三つ以外のタイプも開発中である。

フェニックス・ブロック

高機動戦闘タイプ。ジンクス？・スザクのデータを使用して開発された。四肢の各所に小型のスラスターを装備しており、さらにコア部分の背部には大型のブースターが装備される。武装は四肢にコンテナが接続されたGNミサイル。

バイコーン・ブロック

近接戦闘タイプ。ジンクス？・ユニコーンのデータを使用。両肩や足先などに鋭利な突起があり、これにGN粒子を纏わせて相手に突撃してダメージを与える。武装は両腕に格納されたGNマルチビームサーベル改。刀身の形状を自由に変形することで多彩な攻撃パターンを生み出す。

コカトリス・ブロック

遠距離戦闘タイプ。ジnkクス？・バジリスクのデータを使用している。四肢にはガデッサと同じようにGNコンデンサが搭載され、強力な砲撃武装のサポートを行う。さらに一部のスーパーエースの機体にはコンデンサではなく擬似太陽炉が搭載される。武装は両肩のコンデンサまたは擬似太陽炉に直接接続されているGNブラスター？と両ひざのコンデンサまたは擬似太陽炉に直接接続されたGNビームソーレ。GNビームブラスター？は三連ビームライフルモードと、曲射ができるブラスターモードを使い分ける。GNビームソーレは多数のビームを驚異的なスピードで連射する。

設定9 エクレール&ジnkクス? (後書き)

次回から本編に戻ります。

第56話 GNT - 001 (前書き)

久しぶりの本編です。さらに戦闘ではない話はもっと久しぶりです。
何かおかしなところがあるかもしれませんが、どうぞ。

第56話 GNT - 001

雲一つない真つ青な空。その下には広大な砂漠が広がっている。その砂漠の上に二つの影が落ちていた。影の真上には二機のモビルスーツ。白を基調にした機体と、オレンジを基調にした機体。人々がよく見かけるモビルスーツとは存在を異にする機体。世間では尊敬と畏怖をこめてこの機体をこう呼ぶ。

「ガンダム」と…

白いガンダムの名はミカエルガンダム。一方のオレンジの機体はウルズガンダム。どちらも私設武装組織ソレスタルビーイングが保有する機体である。今この二機は砂漠の上空で向かい合っていた。今にも戦闘を始めそうな雰囲気である。

そんな二機をモニターで見つめる者たちがいた。スメラギ・李・ノリエガを始めとするソレスタルビーイングのメンバーだ。

「さあ、三人ともいいかしら？」

スメラギが呼びかける。

「いつでもいいですよ」「はい」「どうぞ」

ラグノス、アレルヤ、マリーが返答した。

「今回は一対一のサバイバル方式。先に相手を戦闘不能にした方が勝ちよ」

今行われようとしているのは、シュミレーターを用いたミカエルとウルズによる模擬戦である。先の戦いでイノベーターへ変革したアレルヤとマリーに、ウルズがどれほど対応しているのかを同じイノベーターであるラグノスとの戦闘で見極めるのだ。それとも一つ

見極めるものがある。

「それじゃあ始めるわよ。模擬戦闘、スタート！」
スメラギの号令で戦闘が始まった。

模擬戦は約三十分で終了した。

「ラグノスがここまでやられるのは初めて見たな……」

モニターで見ていたヒクサーが呟いた。シュミレーター内のミカエルは戦闘継続が不可能なほど大破していた。ウルズの勝利である。

『だから言っただろ？この二人の力は並大抵じゃないって』

ラグノスの声がモニタールームに響く。ミカエルのコックピット内からの通信だ。

「単純に考えてイノベーターが一人と二人だもんな。その差は大きいよな」

ロックオンが頷く。

「それに加えてツインドライブ搭載機が相手じゃ、さすがのラグノスもってことか」

ラッセが言った。

ウルズにはこの模擬戦の直前にGNDドライブがもう一基搭載された。股間部にあった粒子貯蔵タンクと交換する形で搭載されたこの太陽炉は、もともと腹部に搭載されていたGNDドライブとツインドライブを形成するのだ。模擬戦で見極めるもう一つのものとは、このツインドライブの性能であった。

その時モニタールームにアレルヤとマリーが入ってきた。後ろにラ

グノスも続く。

「お疲れ様。見事だったわ」

スメラギがアレルヤとマリーに声をかけた。

「ありがとうございます」

アレルヤが頭を下げた。

「さすがはツインドライブ。全ての性能が大幅に上がっている。これならノルニルモードを使っても火力が落ちることはない。イノベイドたちの仕事も見事なもんだ」

イアンが感心した。今回ウルズに搭載されたもう一つのGNドライブは、木星に残ったイノベイドたちが製造したものである。

「確かにすごい力でした。前とは比べ物にならないくらいに。でも

……」

アレルヤの言葉をマリーが引き継いだ。

「でも、この力の強大さをしっかりと自覚しないと」

「そうね。だからこそ、あなたたちが望んだように型式番号を変更することにしたわ」

スメラギがそう言いながらキーボードをたたいた。するとモニターにウルズのスペックなどが表示された。多数ある文字のうち一つが拡大した。

『GN - 014』

ウルズの型式番号だ。そしてそれが消えると新たな文字列が出現した。

『GNT - 001』

「GNT - 001 ウルズガンダム。ツインドライブ搭載機……」

「世界を守る機体……」

それを見ながらアレルヤとマリーが呟いた。自分たちに託された力への責任感と希望を持って。

第56話 GNT - 001（後書き）

GNT - 001。この話のタイトルにもなっていますが、ウルズの新たな型式番号です。ダブルオークアンタのGNT - 0000と同様、Tはツインを意味します。

イノベーターが二人も乗っているのならばツインドライブにしくはなく、ということとツインドライブにさせていただきました。

感想などお待ちしています。

第57話　ずっと心の中に

ソレスタルビーイングの母艦、プトレマイオス3は普段宇宙にある秘密基地に係留されている。現在もそこで調整作業を受けていた。

新人類軍と旧人類軍の戦争が始まって早二年。当初激しい戦いになると予想されていたこの戦争は、両軍のモビルスーツの性能の高さやガンダムへの介入もあり膠着状態に入っていた。そのためソレスタルビーイングも今はしばしの休息をとっている。

そんな中、プトレマイオス3の格納庫から二人の男が出ようとしていた。ラグノスとアレルヤだ。

「ウルズの脳量子波に対する適応性は問題ないみたいだな」

「うん。イアンさんや沙慈くんたちのおかげだよ」

アレルヤの言葉にラグノスはまだ機体の整備を行っている沙慈のほうを見た。隣にいるルイスとともにソレスタルビーイングの制服がすっかり板についている。

「あの二人には本当に申し訳ないことをしたな。もう二年も組織にいさせてしまっている」

格納庫を出て、ブリッジに向かう通路を進みながらラグノスが言った。

「普通の生活に戻してあげたいけど、そうもいかないからね」

アレルヤの言う通り、イノベーターのルイスとノーマルの沙慈が一緒に暮らすことは、地球でもコロニーでも今の情勢では不可能なのだ。

「でもいいのかい？この時期に戦力を分散させても。いつ戦いが再

開するかもわからないのに」

アレルヤは少し心配そうにラグノスに言った。

「確かに戦力の分断は厳しいけど、それよりも僕たちには今情報がある。連邦政府のネットワークがヴェーダとつながっていない以上、地道に地上で情報収集をするしかない。それには旧カタロンの力が必要不可欠だからな」

ラグノスが言った。

話しているうちに二人はブリッジに到着した。開いた扉から入ると、中にはミレイナがいた。端末を操作している。

「ミレイナ、二人から報告は？」

アレルヤが尋ねた。

「たった今、現地に到着したと連絡があったです。でもまずはあの場所に向かうと言っていたです」

ミレイナが報告した。

「あれからもうすぐ12年か……」

ミレイナの言葉を聞いたラグノスが呟いた。

「もうそんなになるんだね。でも彼はまだ僕たちの心の中で生き続けている。そして、これからずっと」

「ああ。ロックオン・ストラトス。いや、ニール・ディランディは……」

アレルヤとラグノス、そしてミレイナはかつての仲間に見えはせ
た。

地球、旧AEU領アイルランド。雲一つない青空から暖かい日差しが届く。その日差しの中をゆっくりと歩く男女がいた。二人とも黒いスーツに身を包み、花束を両手に抱えていた。

二人は規則正しく並ぶ墓石の間をしばらく歩いた。そして目的の場所まで来ると足を止めた。二つの石碑が並んで建てられている。どちらの石碑にも名前が彫られていた。片方には四つ、もう片方には一つの名前が。

まず女性のほうが、四つの名前が彫られた石碑の前に花束を置いた。「ロックオン……」

その女性、フェルトが石碑の一番下の名前を見ながら声を出した。ここは初代ロックオン・ストラトスであるニール・ディランディ、その両親と妹のディランディ家四人が眠る場所。

その隣にある石碑には「アニニュー・リターナー」と刻まれている。男性はその石碑の前にしゃがみながら花束を置いた。二代目ロックオン・ストラトスことライル・ディランディ。彼は亡き恋人の名をしばらく見つめていた。

ロックオンとフェルトはディランディ家の石碑の前に立った。

「兄さんが死んでから、いろんなことがあった。死んでから四年後にその事実を刹那から教えられて、そのままマイスターになった。アニニューとの出会い、そして別れ。ELSとの遭遇。でも俺は今も戦い続けている。ガンダムマイスターとして、ロックオン・ストラトスとして」

ロックオンは兄に語りかけるように言った。

「あの時ロックオンにかけてもらった言葉、まだ覚えてるよ。私を強いつて言ってくれたあの言葉……絶対に忘れないから」
フェルトは自らの決意を語った。

「そろそろ行こうか、フェルト」

「うん」

ロックオンに促されたフェルトは立ち上がり、もう一度石碑を見つめると歩を進めた。ロックオンもフェルトに続いて歩き始めたが、立ち止まり石碑のほうを振り向いた。

「これからの戦いの中で、兄さんの力を借りることになる日が来るかもしれない。その時はよろしく頼むよ」

そう言くとロックオンは再び歩き出した。

その時一陣の風が吹き木の葉を揺らした。まるで「任せておけ」でも言うかのように。

第57話　ずっと心の中に（後書き）

二話連続で非戦闘シーンになりました。次回は戦闘シーンになる予定です。

感想などお待ちしています。それから外伝のほうもよろしく願います。

第58話 変化

西暦2320年。ELSが地球に來訪してから六回目の年明けを迎えた。この六年の間に地球には劇的な変化が訪れた。最も大きな変化は、地球圏の政治体制だ。地球連邦が唯一の統治組織であった六年前と違い、今やラグランジュ5を実行支配しているコロニー政府は地球連邦と同程度の力を持つようになった。これに伴って社会の枠組みも大きく変わった。イノベーターが次々とコロニーに移住した結果、今では地球上にいる人間の95%以上がノーマルとなり、わずかに残っているイノベーターもその能力を隠してひたすらイノベーター排除の風潮から逃れていた。

地球圏が大きな変化を遂げている中、私設武装組織ソレスタルビーイングも変わっていた。一番の変化はその規模だ。第三勢力サーガと合流したことで人員、装備ともにこれまでにないほどの大きさになった。これまで「ソレスタルビーイングといえばガンダム」という認識があったが、今は多数のブレイヴ？が配備されている。

それは現在ラグランジュ1の資源衛星群に停留しているソレスタルビーイングのフラッグシップ、プトレマイオス3も例外ではない。当初はガンダム専用の母艦だったこの船にも、ガンダムを最前線でサポートする役割を与えられたスーパーエースたちが搭乗するブレイヴ？が積載されている。

「スメラギ、カタロンからの情報の件だが…」
プトレマイオス3のブリッジに一人の女性が入ってきて、ブリッジの中央の座席に座っているスメラギに話しかけた。入ってきた女性

もスメラギと同じくソレスタルビーイングの制服を着ている。

「リーサでいって言ったでしょ？カティ」

スメラギは入ってきた女性、カティ・マネキンに言った。

ソレスタルビーイングの戦術予報士兼ブレイヴ？部隊担当指揮官に就任したカティは、今回が初めてのトレミー乗船である。普段トレミーにはガンダム担当指揮官であるスメラギのみが乗船し、カティはブレイヴ？運用母艦で指揮をとるのだが、今回はガンダムとブレイヴ？の連携をテストするため二人が揃って乗船したのだ。

「そうか…リーサ」

カティは、スメラギが座る指揮官席の右隣に並べて設置されている席に腰かけた。この席はスメラギの要望で備え付けられたものだ。

「それで？カタロンの情報の件っていうのは？」

スメラギが隣に座るカティに尋ねた。

「ああ。ロックオンが送ってきた情報に一つ気になる点があったな…」

「軌道エレベーター内の不穏な動きのこと？」

「そうだ。もしかしたら…」

カティがそう言った時、トレミーの警報が鳴り響いた。

「どうしたの！？」

スメラギがオペレーター席のミレイナの方を見て言った。

「トレミーに接近する機影があるです！」

「カティ。そっちは行けるかしら？」

ミレイナの報告を聞いたスメラギがカティに言った。

「ああ。今日はもともとそのつもりで来ているんだからな」
カティが頷いた。

「なら決まりね。ミレイナ、ミカエルとウルズを発進させて。それから…」

「ブレイヴ？、全機発進だ」

カティがスメラギの言葉を引き継いだ。

「了解です！」

「まさか連携の初戦がいきなり実戦とは…」

カタパルトに移動したミカエルの中でラグノスが苦笑した。

「みなさん。よろしくお願いします」

ラグノスは同じく出撃しようとしている五人のパイロットに通信を送った。その中にはミカエルのサポートを担当するパトリック・マネキンもいた。

二機のガンダムと五機のブレイヴ？はトレミーを飛び出して行った。

「アレルヤ、あれよ」

出撃してすぐ、マリーが敵を見つけた。

その時、まだオレンジの点程度にしか見えなかったそれから一筋の光が発せられた。その光は徐々に大きくなっていき、アレルヤたちがその正体に気付く頃には強大な粒子ビームになっていた。

「危ない！」

アレルヤは回避行動をとった。粒子ビームはウルズの上方を通過した。ミカエルとブレイヴ？もビームをかわした。

「あの距離からこれだけの砲撃ができるのか!？」

アレルヤは驚きその姿を拡大した。そしてモニターに映し出されたその姿に息を呑んだ。

「これは…!」

アレルヤが見ているものはトレミーの大型モニターにも映し出されていた。

「ガデラーザ…」

カティが立ち上がり呟いた。

見る者を威圧するかのような巨体。かつて一人のイノベーターが搭乗し、ELSとの戦いで散った機体。その機体が今彼らの目の前にいた。

第58話 変化（後書き）

次回から本格的な戦闘が始まります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1572t/>

機動戦士ガンダム00 ~ The Last War ~

2011年12月8日17時49分発行